原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第16集

原の辻遺跡

（はる　つじ）

原の辻遺跡特定調査事業発掘調査報告書Ⅰ
（船着き場付近水路等状況調査）

1999

長崎県教育委員会

原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第16集

原の辻遺跡

原の辻遺跡特定調査事業発掘調査報告書Ⅰ
（船着き場付近水路等状況調査）

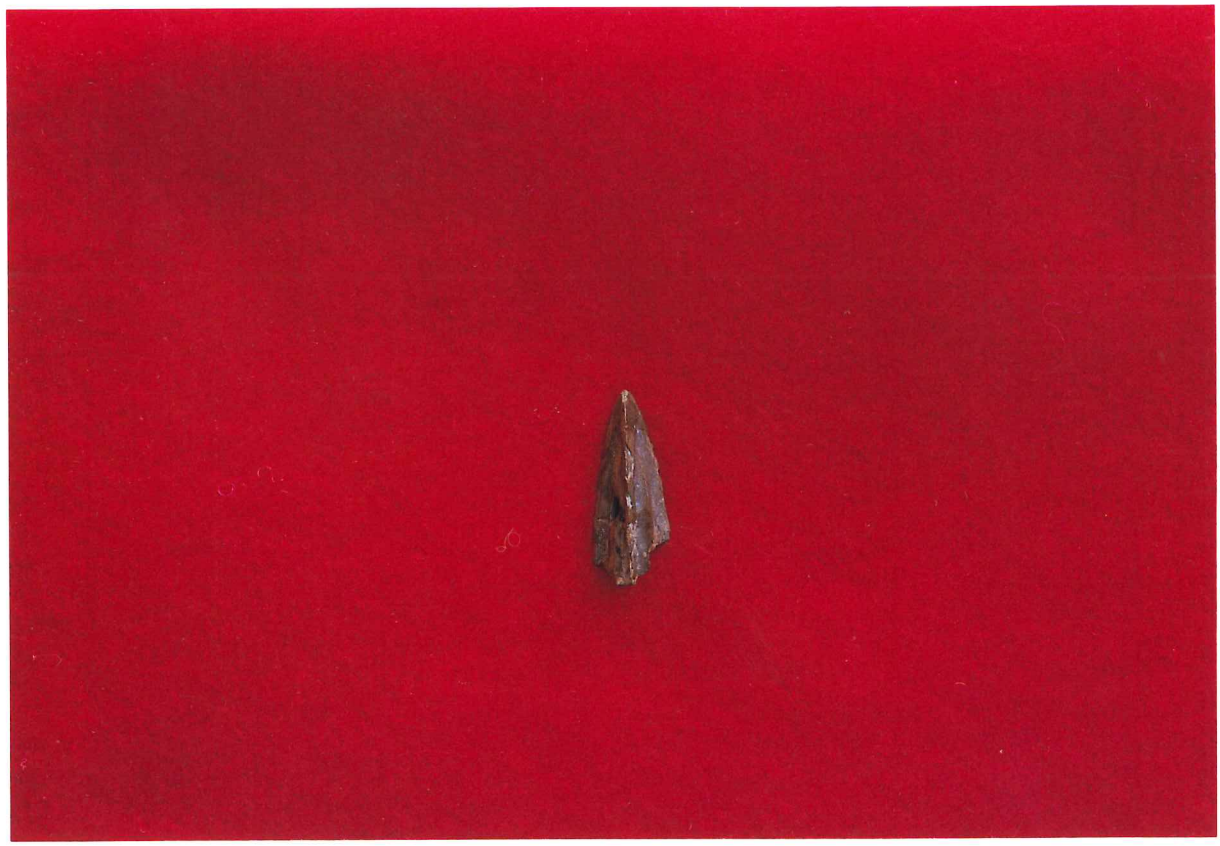
調査区上空より内海を望む

B・D・E区　全景

B・D区　全景

E区　全景

出土　五銖錢



出土　三翼鏃

2 号濠遺物出土状況

2 号濠内土手状遺構

出土木製品（槽）

出土木製品（建築部材）

発刊にあたって

本書は，原の辻遺跡特定調査事業に伴って実施した，平成10年度の原の辻遺跡発掘調査報告書です。

原の辻遺跡は，中国の歴史書『魏志倭人伝』に登場する，「一支國（いきこく）」の「王都」として特定されている遺跡です。『魏志倭人伝』に記された３世紀の日本に存在した国々の中で，国の都がはっきりと特定されているのは原の辻遺跡だけで，全国的にも貴重な遺跡であり，平成９年９月に国史跡の指定を受けました。

今回の調査は，平成８年の調査で発見された日本最古の「船着き場跡」と弥生時代の旧河道を結ぶ水路などの状況を確認するため実施いたしました。その結果，新たな弥生時代の旧河道や環濠，溝などの遺構や，長崎県で初例の中国前漢時代の「五銖錢（ごしゅせん）」や，「三翼鏃（さんよくぞく）」などの遺物が発見されました。このように原の辻遺跡は，発掘調査のたびに重要な発見が相次ぎ全国的に注目をあつめる遺跡で，一日も早い国特別史跡の指定と保存整備・活用が待ち望まれます。

今回の発掘調査の成果を学術的な資料として，また文化材の保護のため役立てていただければ幸いです。

平成11年３月31日

長崎県教育委員会教育長　　出　口　啓二郎

例　　言

1．本書は，原の辻遺跡特定調査事業に伴って実施した，平成10年度の発掘調査報告書である。

2．本書に収録した遺跡の調査地区は，長崎県壱岐郡芦辺町深江鶴亀触字不條に所在する。

3．調査は長崎県教育委員会を主体として，原の辻遺跡調査事務所係長（副参事）宮崎貴夫と文化財保護主事杉原敦史が担当した。

4．本書で使用した遺物の実測および遺物と遺構の製図は，原の辻遺跡調査事務所がおこなった。

5．本書に収録した遺物・図面・写真は，原の辻遺跡調査事務所で保管している。

6．本書の写真は，宮崎貴夫が撮影した。

7．本書の執筆は，Ⅲ．3．(1)を宮崎貴夫が，それ以外を杉原敦史が担当した。

8．本書の編集は杉原敦史による。

本 文 目 次

Ⅰ．遺跡の立地と環境 ……1

　1．地理的環境 ……1

　2．歴史的環境 ……2

Ⅱ．調査の経緯 ……3

Ⅲ．調　　査 ……7

　1．調査概要 ……7

　2．遺　　構 ……7

　3．遺　　物 ……36

　4．ま と め ……79

表　目　次

第1表　これまでの原の辻遺跡の主な調査の経緯と成果 ……4

挿 図 目 次

第１図　壱岐島および遺跡位置図 ……1
第２図　平成９年迄の調査成果による主要遺構配置図（１／10,000） ……5
第３図　調査区配置図（１／6,000）……6
第４図　主要遺構配置図(１／1,000) ……9
第５図　Ａ区，Ｂ・Ｄ区遺構配置図（１／200） ……11
第６図　Ｃ区遺構配置図（１／200） ……13
第７図　Ｅ区遺構配置図（１／200） ……13
第８図　Ｄ区東壁土層図（１／60）……14
第９図　Ｅ区北・東・南壁土層図（１／60）……15
第10図　Ｃ区北壁土層図（１／60）……17
第11図　１号旧河道土層図（１／60）……18
第12図　濠土層図①（１／40）……19
第13図　濠土層図②（１／40）……20
第14図　１号濠遺物出土状況（１／40）……21
第15図　４号溝・６号溝遺物出土状況（１／40）……22
第16図　５号溝遺物出土状況（１／40）……23
第17図　溝土層図（１／20）……24
第18図　Ａ区１号・２号土壙実測図（１／30）……25
第19図　Ｂ区２号土壙実測図・土層図（１／30）……26
第20図　Ｂ区３号土壙実測図・土層図（１／30）……27
第21図　Ｂ区６号・10号土壙実測図（１／30）……29
第22図　Ｂ区17号・24号土壙実測図（１／30）……30
第23図　Ｂ区27号・34号土壙実測図（１／30）……31
第24図　Ｂ区28号・Ｄ区２号土壙実測図・土層図（１／30）……32
第25図　Ｄ区３号・Ｅ区１号土壙実測図・土層図（１／30）……33
第26図　Ｅ区11号土壙実測図（１／30）……34
第27図　Ｅ区16号土壙実測図（１／30）……35
第28図　Ｅ区１号甕棺実測図（１／10）……36
第29図　１・２号旧河道出土土器（１／２，１／４）……38
第30図　２号旧河道出土土器（１／４）……39
第31図　１号濠出土土器①（１／４）……41
第32図　１号濠出土土器②（１／４）……42
第33図　１号濠出土土器③（１／４）……43
第34図　２号濠出土土器①（１／４）……44
第35図　２号濠出土土器②（１／４）……45
第36図　２号濠出土土器③（１／４）……46
第37図　２号濠出土土器④（１／４）……47
第38図　３号濠・４号濠出土土器（１／４）……49
第39図　２号溝出土土器①（１／４）……51
第40図　２号溝出土土器②（１／４）……52
第41図　２号溝出土土器③（１／４，１／６）……53
第42図　５号溝出土土器①（１／４）……54
第43図　５号溝出土土器②（１／４）……55
第44図　Ｂ区２号土壙出土土器（１／４）……57
第45図　Ｂ区10号・17号土壙出土土器（１／４）……58

第46図　E区1号・11号土壙出土土器（1／4）……59
第47図　E区16号土壙出土土器（1／4）……60
第48図　朝鮮半島系土器，その他の土器①（1／2）……61
第49図　朝鮮半島系土器，その他の土器①（1／2，1／4）……62
第50図　石器・石製品①（2／3）……65
第51図　石器・石製品②（2／3）……66
第52図　石器・石製品③（1／2）……67
第53図　石器・石製品④（1／2）……68
第54図　石器・石製品⑤（1／2）……69
第55図　石器・石製品⑥（1／2，1／3）……70
第56図　石器・石製品⑦（1／3）……71
第57図　石器・石製品⑧（1／2，1／3）……72
第58図　石器・石製品⑨（1／3）……73
第59図　石器・石製品⑩（1／4）……74
第60図　石器・石製品⑪（1／3，1／4）……75
第61図　出土五銖銭・三翼鏃（1／1）……76
第62図　骨角器・土製品・勾玉（1／1，1／2）……77
第63図　時期別遺構配置図（1／500）……81

図版目次

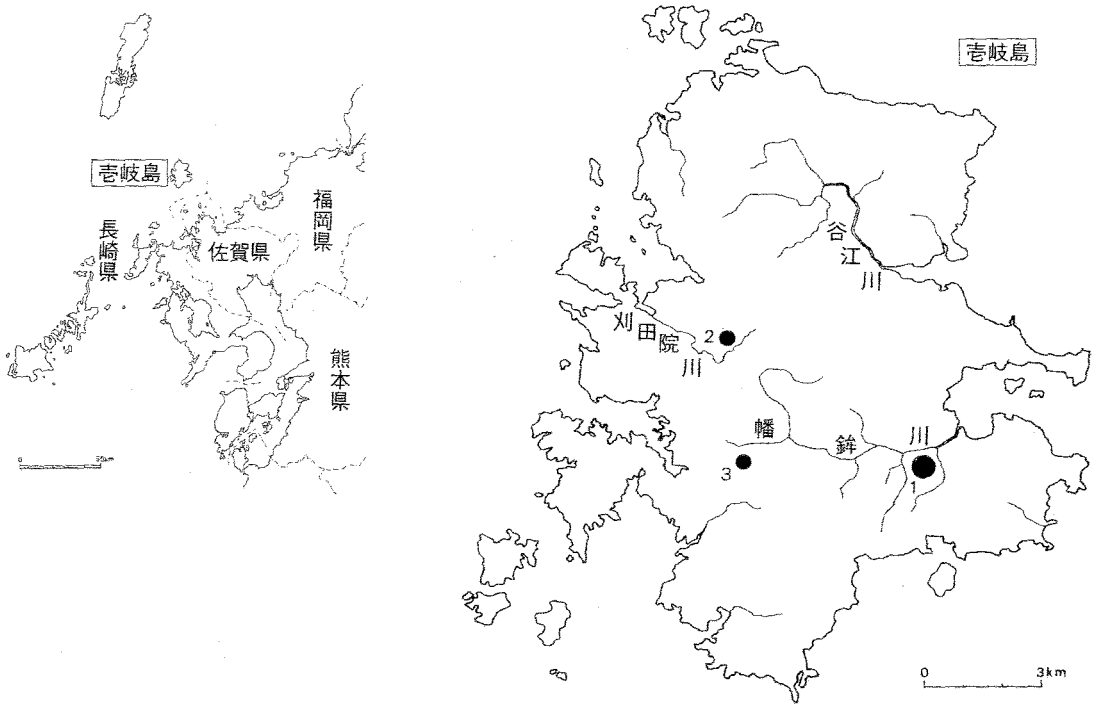
図版1　調査風景（B区）・調査風景（B区）・調査風景（B区）……83
図版2　A区全景（西から）・1号旧河道検出状況（東から）・A区1号土壙遺物検出状況……84
図版3　A区2号土壙遺物検出状況・A区3号土壙　〃　・A区3号土壙完掘状況……85
図版4　1号溝遺物出土状況・1号溝完掘状況・1号溝横断土層……86
図版5　B・D区全景（北から）・2号濠と4号濠検出状況・4号濠遺物出土状況……87
図版6　4号濠遺物出土状況・4号濠出土状況・4号濠完掘状況……88
図版7　2号濠遺物出土状況・2号濠遺物出土状況・2号濠遺物出土状況……89
図版8　D区全景（南から）・D区全景（北から）・3号濠検出状況……90
図版9　2号溝遺物出土状況・2号溝遺物出土状況・2号溝と3号溝検出状況……91
図版10　4号溝と5号溝検出状況（北西から）・　〃　（東から）・1〃1遺物出土状況……92
図版11　B区2号土壙遺物出土状況・B区6号土壙　〃　・B区10号土壙　〃　……93
図版12　B区17号土壙遺物出土状況・B区26号土壙　〃　・B区27号土壙　〃　……94
図版13　B区28号土壙遺物出土状況・D区1号土壙　〃　・D区3号土壙　〃　……95
図版14　礎盤1と礎盤2検出状況・礎盤1検出状況・礎盤2検出状況……96
図版15　2号濠内土手状遺構検出状況（北から）・　〃　（北から）・　〃　（南から）……97
図版16　2号濠内土手状遺構1検出状況・　〃　2　〃　・　〃　3　〃　……98
図版17　2号濠内建築部材出土状況・　〃　槽　〃　・　〃　五銖銭　〃……99
図版18　E区全景（北から）・E区東部とD区検出状況（　〃　）・E区南部　〃　（東から）……100
図版19　5号濠と6号濠検出状況（南から）・E区内3号濠横断土層・6号濠　〃　……101
図版20　5号濠横断土層（E区北壁）・　〃　（北部）・　〃　（南部）……102
図版21　E区1号土壙遺物出土状況・E区11号土壙　〃　・E区16号土壙　〃　……103
図版22　1号甕棺検出状況・5号濠内掘り込み　〃　・5号濠内掘り込み出土木製竪杵……104
図版23　C区全景（西から）・2号旧河道検出状況・7号溝検出状況……105
図版24　1号濠遺物出土状況（北から）・　〃　（南から）・1号濠横断土層……106
図版25　1号濠遺物出土状況・　〃　・　〃　……107

Ⅰ．遺跡の立地と環境

1．地理的環境

壱岐島は，九州と朝鮮半島の間に位置する東西約15km，南北約17km，面積約139m²の島である。行政的には長崎県に属しているものの，長崎県本土との交通アクセスは航空路のみで直接結ぶ航路は無い。佐賀県呼子町とはフェリーで約１時間，福岡県の博多港とはフェリーで約２時間半，ジェットフォイールで約１時間で結ばれている。経済的・文化的には博多の圏内である。

島の地形を概観すると，全体的に平坦である。標高約213mの岳の辻が島内の最高峰である。同じく玄界灘に位置する峻険な地形の対馬とは対照的な景観を有する。島の基盤は，第三紀の堆積岩で，その上を玄武岩が覆い低平な地形を形成している。島の南東部には「深江田原」と呼ばれる，長崎県内第２の広さを誇る平野があり，県下有数の穀倉地帯となっている。原の辻遺跡は，この平野に舌状に伸びた台地を中心に広がっている。遺跡面積は，約100haの規模で，芦辺町と石田町にまたがっている。台地の標高は最高部でも18m程度であるが，平野全体を見渡すことができる。遺跡の北側には島内最大河川の幡鉾川（全長約９km）が西から東に流れ，約１km離れた内海に注ぐ。この幡鉾川を遡ると，島西部の半城湾等の沿岸に出ることも容易である。また，「深江田原」は周囲を丘陵に囲まれ，盆地状の地形となっている。



1．原の辻遺跡　2．カラカミ遺跡
3．車出遺跡

第１図　壱岐島および原の辻遺跡位置図

2．歴史的環境

壱岐島は，博多，対馬へ約67km，佐賀県呼子まで約26km程の距離で，その地理的条件から中国大陸や朝鮮半島と日本とを結ぶ，文物の交流，交通，防衛上の中継地点，拠点として重要な役割を歴史的に果たしてきた。

3世紀の中国の歴史書『魏志倭人伝』には「一支国」として記載され，弥生時代終末期の壱岐の状況が紹介されている。「(対馬国から）南に瀚海という海を渡り，千余里行くと，一大国（一支国）に着く。長官は卑狗，副官は卑奴母離と呼ばれている。広さは四方三百里ばかり。竹林・叢林が多く，三千ばかりの家がある。やや田地があるが，食べるには足らない。南北に海を渡って米などを買ってくる。」短いが当時の壱岐を知る貴重な記述である。

現在，壱岐では約60箇所の弥生時代の遺跡が確認されているが，原の辻遺跡はその中で最大の規模を誇り，検出，出土した遺構と遺物も質，量ともに他をしのいでいることから，一支国の王都に特定されている。遺跡の調査は，古くは大正時代から行なわれてきたが，平成5年からの調査で遺跡の中心となる台地を取り巻く多重の環濠が確認され，全国的に注目を浴びた。そして原の辻遺跡は，『魏志倭人伝』に記載された国の都が唯一特定された遺跡として評価されている。

島内で原の辻遺跡以外の弥生時代の重要な集落遺跡としては，カラカミ遺跡と車出遺跡が知られる。カラカミ遺跡は，原の辻遺跡と同じく弥生時代前期末から始まる。高地に位置し，環濠を巡らしているが，原の辻遺跡と比べると規模は小さく遺物の内容もやや劣る。原の辻遺跡とは別個に発祥した集落が原の辻遺跡の発展過程の中で，原の辻主導で連合したものと思われる。車出遺跡は弥生時代中期に始まり，その発祥時には原の辻遺跡は発展を遂げていたため，また幡鉾川上流に位置するが，その水系により原の辻遺跡とも結ばれているため，発祥時より原の辻主導の連合下にあったと考えられる。原の辻遺跡の集団の一部が分離，形成した集落の可能性もある。西側の低い丘陵を越えると，対馬を臨む半城湾に出る。島内外から原の辻遺跡へ入る物資の搬入ルートの島西部拠点，また島の西部地域の管理拠点として重要な集落であったと推測される。

原の辻遺跡は，集落として古墳時代前期まで続いたことが確認されている。遺跡から北東に位置する丘陵上に5世紀頃のものと考えられる，大塚山古墳が築かれており，このころまでは原の辻遺跡の首長などと繋がる支配勢力が付近に存在したと考えられるが，考古学的には実証されておらず，今後の調査を待つところである。

6世紀から7世紀になると，確認されているだけでも約270基もの古墳が島内で築造されている。これは長崎県の古墳の約半数にのぼり，その中でも県内最大の前方後円墳である双六古墳（全長約93m），同じく県内最大の円墳である鬼の窟古墳（直径約45m），金銅製馬具が出土した笹塚古墳（直径約38m）などが代表的である。壱岐の首長と中央政権との強い結びつきが窺えるが，これもまた，壱岐島の中国大陸や朝鮮半島と日本との中継拠点としての，政略的，国防的重要性に起因することは疑いない。

II．調査の経緯

原の辻遺跡の調査は，幡鉾川流域総合整備計画に係わる圃場整備に伴う範囲確認調査及び緊急発掘調査を平成３年度から平成９年度にかけて実施し，弥生時代の大規模な多重環濠や船着き場等の重要な遺構や遺物を発見した。

平成５年度の調査では，遺跡の中心となる舌状の台地の東側一帯の緊急発掘調査と北側から西側一帯の範囲確認調査を実施し，環濠をはじめとする弥生時代の重要遺構を検出した。その結果に基づいて関係各機関で協議を行ない，平成５年度の調査箇所を含めた工事区域の約４．５haについて，非農用地を設定して遺構の保存を図ることとなった。

平成６年度の調査は，台地北側一帯の緊急発掘調査を実施し，環濠等の遺構を検出した。また，遺跡の南側の大川地区では農道拡幅工事中に中国製陶磁器類などの古代の遺物が大量に発見されたため，工事を中断して調査を実施した。

平成７年度には，原の辻遺跡調査指導委員会において，これまでの調査結果に検討が加えられた結果，当該遺跡が『魏志倭人伝』中の「一支国」の王都として特定された。

平成８年度は，遺跡の西部一帯の調査を実施し，弥生時代中期前葉の船着き場跡，それに付属する石組遺構，弥生時代前期末から中期初頭にかけての水田畦畔遺構，弥生時代から古墳時代にかけての旧河道などを確認した。

平成９年度の調査では，幡鉾川の弥生時代中期の旧河道と濠等を確認し，旧河道内から高床建物の部材である床大引材をはじめとする多数の建築部材や100点以上の朝鮮系無文土器等が出土し，低地部分の居住域も確認した。

旧河道の調査については，幡鉾川流域総合整備計画に係わる幡鉾川の河川改修工事に伴って，平成６年度から平成８年度にかけて実施した。その結果，遺跡内での幡鉾川の弥生時代前期末から古墳時代前期にかけての旧河道４条，濠２条，溝１条を確認した。

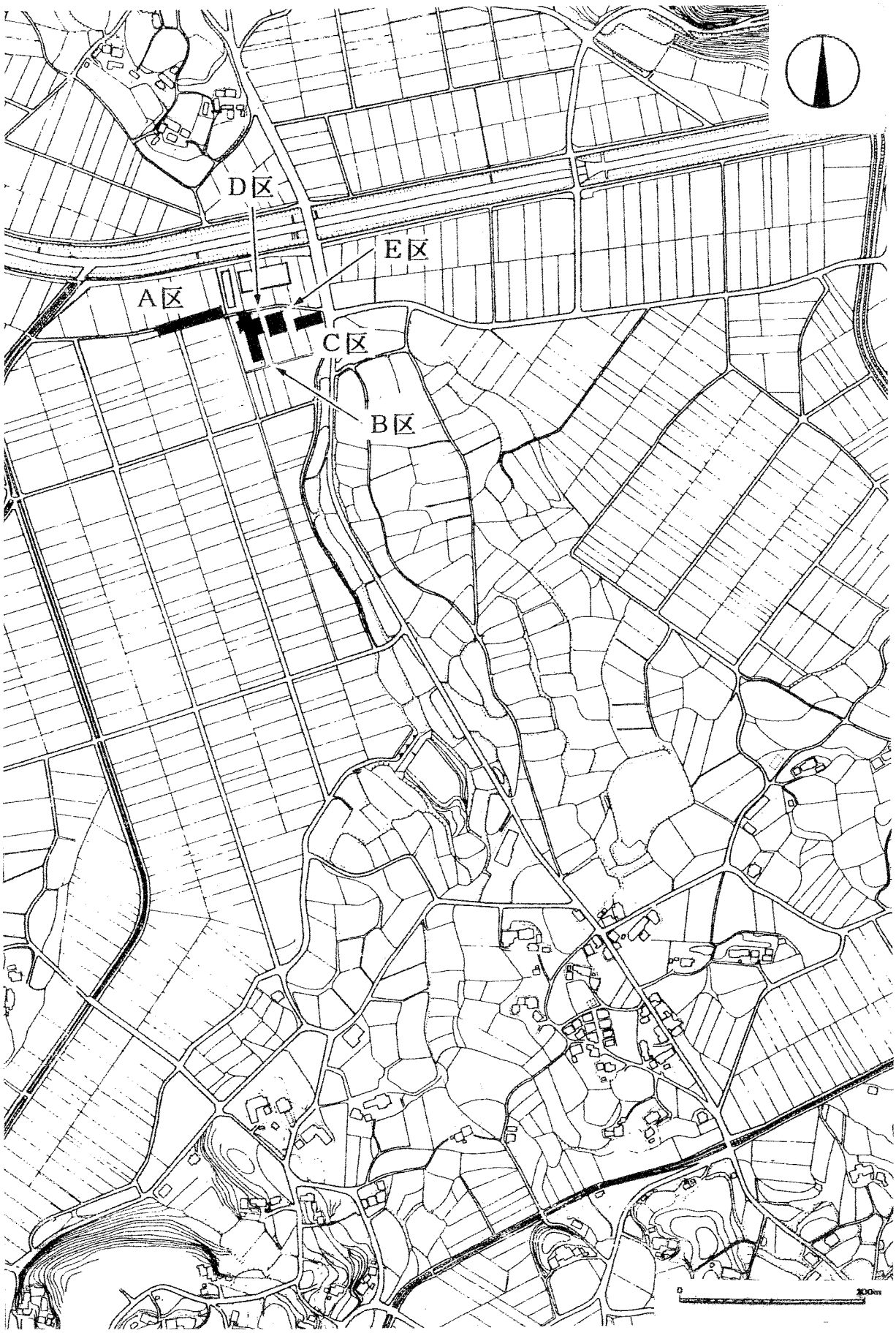
また，これらの開発に伴う調査と平行して，台地部分の遺構確認調査も平成６年度から平成11年度までの予定で，継続して実施している（高元・原・大川地区）。その結果，台地頂上部分とその周辺部の調査で，祭儀用と考えられる高床建物の柱穴群や区画のための台地を東西に切る濠等を検出し，この付近一帯が遺跡の中核的部分であることが判明した。台地北部の高元地区では，竪穴式住居跡等を検出し，この地区が居住域であることを確認した。

平成８年度に確認した船着き場跡は，各調査で検出した幡鉾川の旧河道から離れた位置で検出した。当然，これと旧河道の間は自然の，もしくは人為的に造られた水路で結ばれていたことが推定される。当該調査は，これを確かめるべく，船着き場跡と幡鉾川の旧河道との間を結ぶ水路等の状況を確認することを目的とする。平成10年８月３日から平成11年３月12日の期間，長崎県教育委員会を主体に，原の辻遺跡調査事務所が担当して，幡鉾川旧河道に沿った遺跡の北西部面積2,297m²の調査を実施した。

調査・発見年度	発見者・調査主体	主　な　成　果
大正～昭和初期	松本友雄・山口麻太郎	学会への遺跡の紹介・報告。
昭和14年	鴇田忠正	幡鉾川改修に伴う耕地整理での調査。
昭和26～39年	九学会・東亜考古学会	住居跡，墓域の確認。卜骨，貨泉出土。原の辻上層式の設定。石器から鉄器へ転換した典型的遺跡の評価。
昭和29年	東亜考古学会	圃場整備で大原地区から細形銅剣２・銅戈１出土。
昭和49年	長崎県教委	大原地区で，個人の基盤整備に伴って甕棺墓52・石棺墓19を発見し，戦国式銅剣１・トンボ玉など出土。
昭和50～52年	長崎県教委	大川地区，原の久保Ａ地区，原の久保Ｂ地区などの墓域を発見。大川地区では，方格規矩鏡，有鉤銅釧など出土。遺跡が台地上に広域に拡がることを確認。
平成３～５年	長崎県教委・ 芦辺・石田町教委	幡鉾川総合整備事業に伴う範囲確認調査。災害に伴う緊急調査。環濠の一部などを発見する。
平成５年	長崎県教委・ 芦辺・石田町教委	台地東裾で環濠，大溝を確認し，遺跡が大規模な多重環濠集落であることが判明する。各種の膨大な資料が出土する。
平成６年	長崎県教委・ 芦辺町教委	原地区の高台部分で高床建物群を確認。高元地区で弥生中期～古墳時代初頭の住居跡13軒，土壙30基などを確認し，卜骨，獣帯鏡などが出土する。
平成７年	長崎県教委・ 芦辺・石田町教委	原地区高台部分で弥生時代高床建物群と古墳時代初頭竪穴住居跡，濠２条など確認。大川地区の墓域調査。調査指導委員会で一支国の王都であることが特定される。
平成８年	長崎県教委・ 芦辺・石田町教委	遺跡北側と西側の水田部分に弥生中期の居住域が拡がることを確認する。新たに濠や旧河道なども確認し，ココヤシ製笛など出土する。台地西側の八反地区で，船着き場跡と水田畦畔遺構を発見する。原地区で濠と竪穴住居を確認する。原の久保地区では墓域を確認し，内行花文鏡などが出土する。
平成９年	長崎県教委・ 芦辺町教委	遺跡北西部の溜池予定地で，弥生時代中期の旧河道を確認し，高床建物の床大引材を発見する。池田大原地区で濠を確認する。原地区では濠と竪穴住居を確認する。
平成10年	長崎県教委・ 芦辺町教委	不條地区で弥生時代中期の旧河道，弥生時代中期から後期旧河道，弥生時代中期の濠１条，弥生時代後期の濠５条，弥生時代や古墳時代の溝などを確認し，前漢時代の五銖銭や三翼鏃などが出土する。

第１表　これまでの原の辻遺跡の主な調査の経緯と成果

第2図　平成9年迄の調査成果による主要遺構配置図（1／10,000）



第3図　調査区配置図（1／6,000）

Ⅲ．調　　査

1．調査概要（第３図，第８図，第９図，第10図）

調査区は，原の辻遺跡調査事務所周辺の非農用地に，調査開始当初には西からＡ区（10m×70m），Ｂ区（10m×50m），Ｃ区（10m×30m）を設定したが，調査途中で濠や溝等の遺構の追跡調査のためにＢ区を67㎡拡大し，Ｄ区（６．５ｍ×20m）とＥ区（20m×30m）を追加設定した。

基本土層は，Ａ区を除き残りの４区で共通である。１層は褐色の現在の水田作土層である。２層はａ，ｂの２つの層に細分されるが，２ａ層は灰褐色で現在の水田下層土である。２ｂ層は近世から近代の水田の下層土と考えられ，明灰褐色をしている。Ｂ・Ｄ区は，２ｂ層下ですぐに弥生時代の遺構面が検出されたが，Ｃ・Ｅ区では中世に埋め立てたと考えられる混礫の褐灰色粘質土の３層や，旧河道内を弥生時代後期から古墳時代前期に埋め立てた淡褐灰色粘質土層（Ｃ区５ａ層，Ｅ区４ａ層）などがあり，それらの下が弥生時代の遺構面となる。Ａ区は，平成９年に埋め立てた客土が２ｍほどあり，これを除くと場所によっては近現代の水田作土層が薄く残っている所もあるが，大半の部分はすぐに弥生時代の遺構面が検出する。なお，Ａ・Ｂ・Ｄ・Ｅ区の地山は，近現代の圃場整備により削平をうけ，Ｃ区の地山も弥生時代後期～古墳時代前期に２号旧河道を埋め立てる際に埋土とされ削平を受けている。

2．遺　　構（第４図，第５図，第６図，第７図）

(1) 旧 河 道（第11図）

旧河道は，２条検出した。１号旧河道は，現在の幡鉾川の支流に相当すると思われる。Ａ区で検出し河道は斜めに調査区を切っている。最大幅約26mを確認した。深さは安全上約１m60cmしか掘れず，それ以下を確認していないが，灰色砂層（８層）となったためほぼ川底部に近いと考えられる。この８層からは須玖Ⅰ式土器古段階～須玖Ⅱ式土器古段階が出土した。この区は昭和14年に圃場整備をうけた地区にあたるが，１層はこの時整備された水田の下層土と考えられる。２ａ層・２ｂ層は，それ以前の近代や近世の水田下層土と思われる。平成９年度に溜池造成工事に伴って調査した，約30ｍほど離れた地区において同じ時期の現在の幡鉾川本流と推定される旧河道が検出したが，この河道内は須玖Ⅱ式の古段階の期間に人為的に埋め立てられ，水田として利用されていたことを確認した。当該旧河道は西岸が調査区外であり，東岸部分も後の時代に４層・５層の自然水路に切られているので不明な点は多いが，６・７層は水平堆積しているため，同じように人為的に埋め立てられ利用されたと推測される。３層は古墳時代の埋め立てと思われる。南東から北西方向に流れ，前述した平成９年度の調査地区との間で幡鉾川本流と合流するものと考えられる。２号旧河道は，同じく幡鉾川支流にあたり，東岸がＣ区，西岸の際部分がＤ区で検出した。推定幅約15mで，南から北方向へ流れて本流と合流したものと考えられる。東岸寄りの川底部から須玖Ⅰ式・Ⅱ式土器が出土したが，中央部分

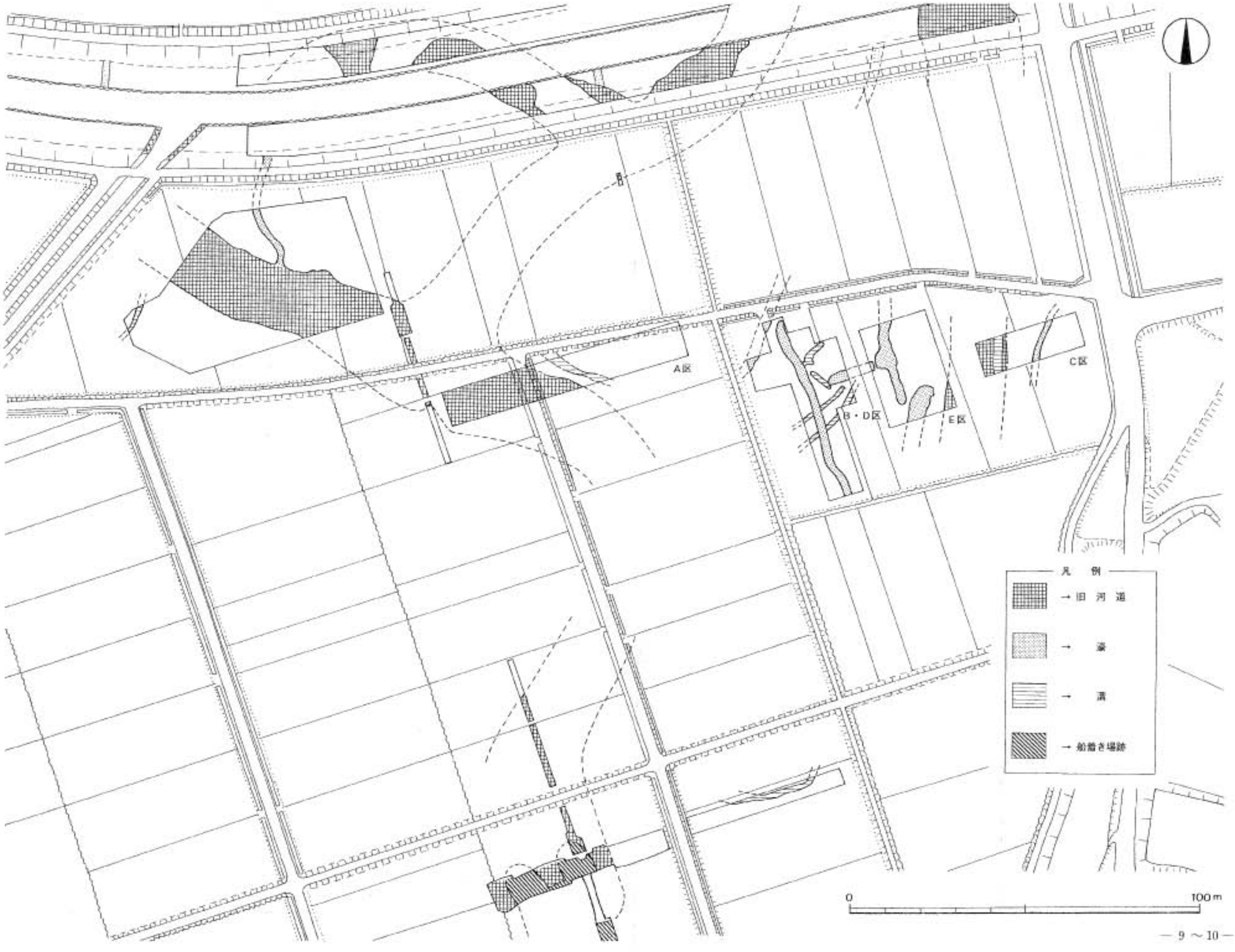
からは弥生時代後期の遺物が出土したため，徐々に埋没しながらも河道中央部分は弥生時代後期まで残存したものと推定される。確認した深さは約80cmである。

(2) 濠（第12図，第13図，第14図）

濠は，６条検出した。１号濠は，幅約１m40cm，深さ約60cmを測り，長さ約12mを確認した。弥生時代中期の遺物が出土した。C区を南西から北東へ走る。２号濠は，B区から検出し，幅約２m30～60cm，深さ約80cm～１mを測り，長さ約55mを確認した。B区の北端からはじまり，南に走る。３号濠は，D区からE区にまたがり東西方向に走る。幅約３m，深さ約１m30cm，推定長約14mを測る。４号濠は，B区北西角をかすめて南西から北東に走る。５号濠は，E区からはじまり北へ走る。幅約２m，深さ70～90cmを測り，長さ約24mを確認した。６号濠は，E区から南西へ走る。幅約５m，深さ約１mを測り，長さ約10mを確認した。２～６号濠は共通して，弥生時代中期の遺構を切り，埋土の下層から弥生時代後期の遺物が，中層付近から古墳時代前期の遺物が出土するため，弥生時代後期に掘られ，古墳時代前期に埋没したと考えられる。これは，弥生時代後期にこの５条の濠が複雑に互いが中継し合い，総体として複合的環濠を形成していたことを意味する。過去の調査の結果，原の辻遺跡の環濠は，弥生時代中期から後期に，多重環状的に存在したと考えられていたが，少なくとも当該調査地区においては，違うことを今回の調査により確認した。この状況がこの地区の特殊性であるのか，遺跡全体に共通したものなのかについては今後の課題である。目的としては，「虎口」的な防御的意味があると考えられる。２号濠には地山を掘り残した土手状の遺構を３箇所確認したが，その目的は不明である。また，２号濠と５号濠には築造後しばらくして掘った掘り込みの部分を伴うが，これは農業用水等に利用するために雨水や，最下部が切り込んでいる縄文時代の泥炭質層からの湧水を溜めるたものと考えられる。なお，２号濠南端部埋土から前漢代の五銖銭が出土した。

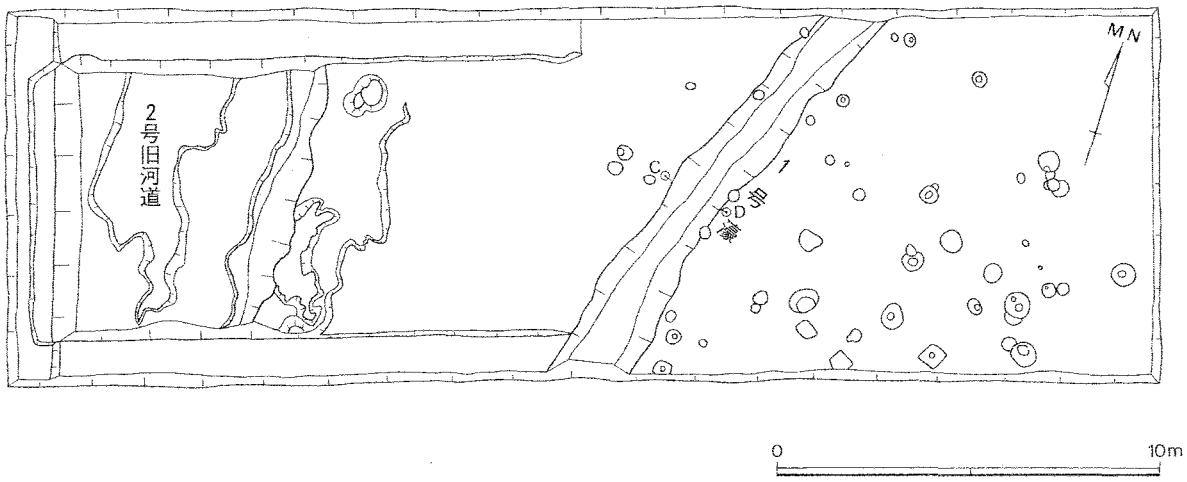
(3) 溝（第15図，第16図，第17図）

溝は，７条検出した。１号溝はA区で検出し，１号旧河道に沿って南東から北西に走る。幅約１m70cm，深さ約80cmをはかり，約８mを確認した。下層から弥生時代中期の遺物が，上層から古墳時代前期の遺物が出土した。上層部分のみ古墳時代前期に掘り直した可能性がある。２号～６号溝は，B区～D区にかけて検出した。２号溝は，幅約１m50cm，深さ約40cm，長さ約９mを測る。弥生時代中期～後期初頭の遺物が出土した。３号溝は，幅約１m，深さ約30cm，長さ約６mを測る。弥生時代中期の遺物が出土した。４号溝は，幅約80cm，深さ約40cmを測り，長さ約10mを確認した。弥生時代中期の遺物，焼土・炭化物層が出土・検出した。５号溝は，幅約１m40cm，深さ約40cm，長さ約20mを測る。弥生時代前期末から中期初頭の遺物が出土した。６号溝は，幅約80cm，深さ約30cm，長さ約３m50cmを測る。弥生時代前期末から中期初頭の遺物が出土した。７号溝は，２号旧河道を埋め立てた層に旧河道東岸に沿うように切り込んでC区で検出し，幅約２m50cm，深さ約60cmを測り，長さ７m50cmを確認した。古墳時代前期のものと考えられる。２号・３号・４号溝は区画のためのもの，その他の溝は生活・農業用の用排水路と考えられる。２号濠によって２号・４号溝は西端を，５号溝は途中を，６号溝は東端を切られ，３号溝は３号濠によって東端を切られている。

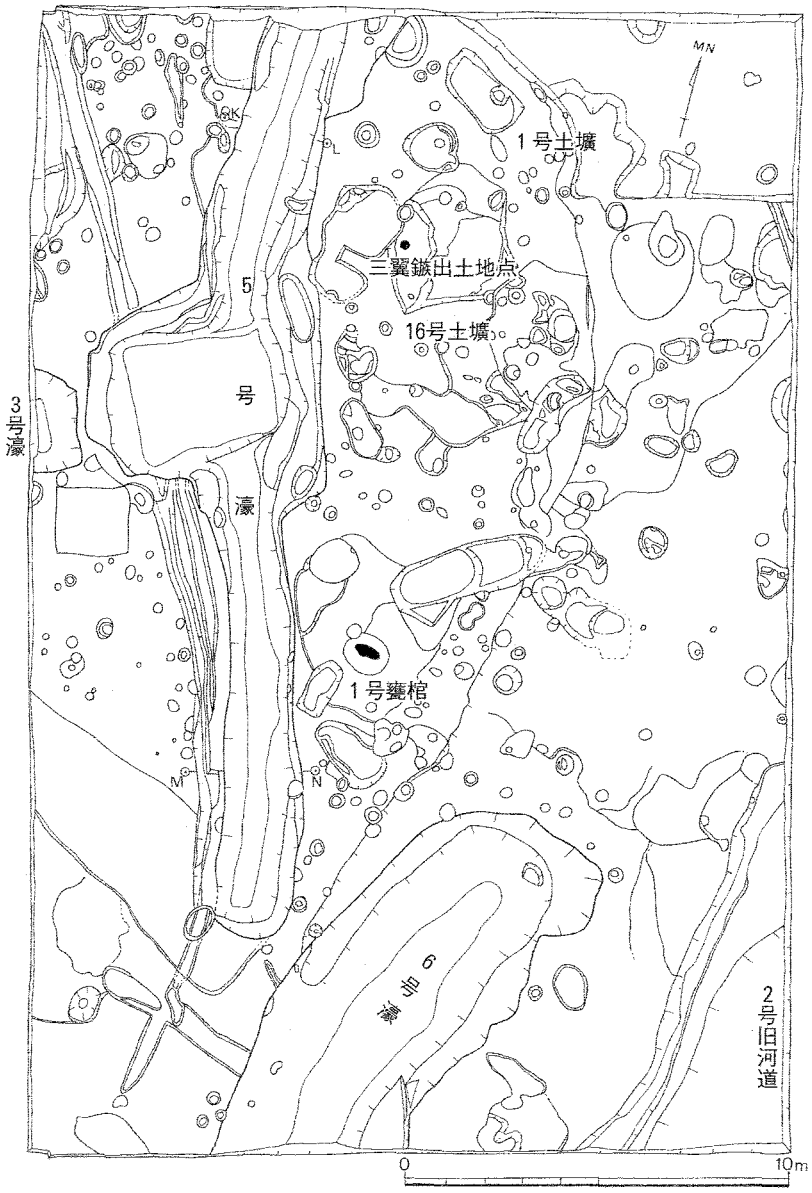


第4図　主要遺構配置図（1／1,000）（※A～E区以外の調査区は平成8年度・9年度の調査区）

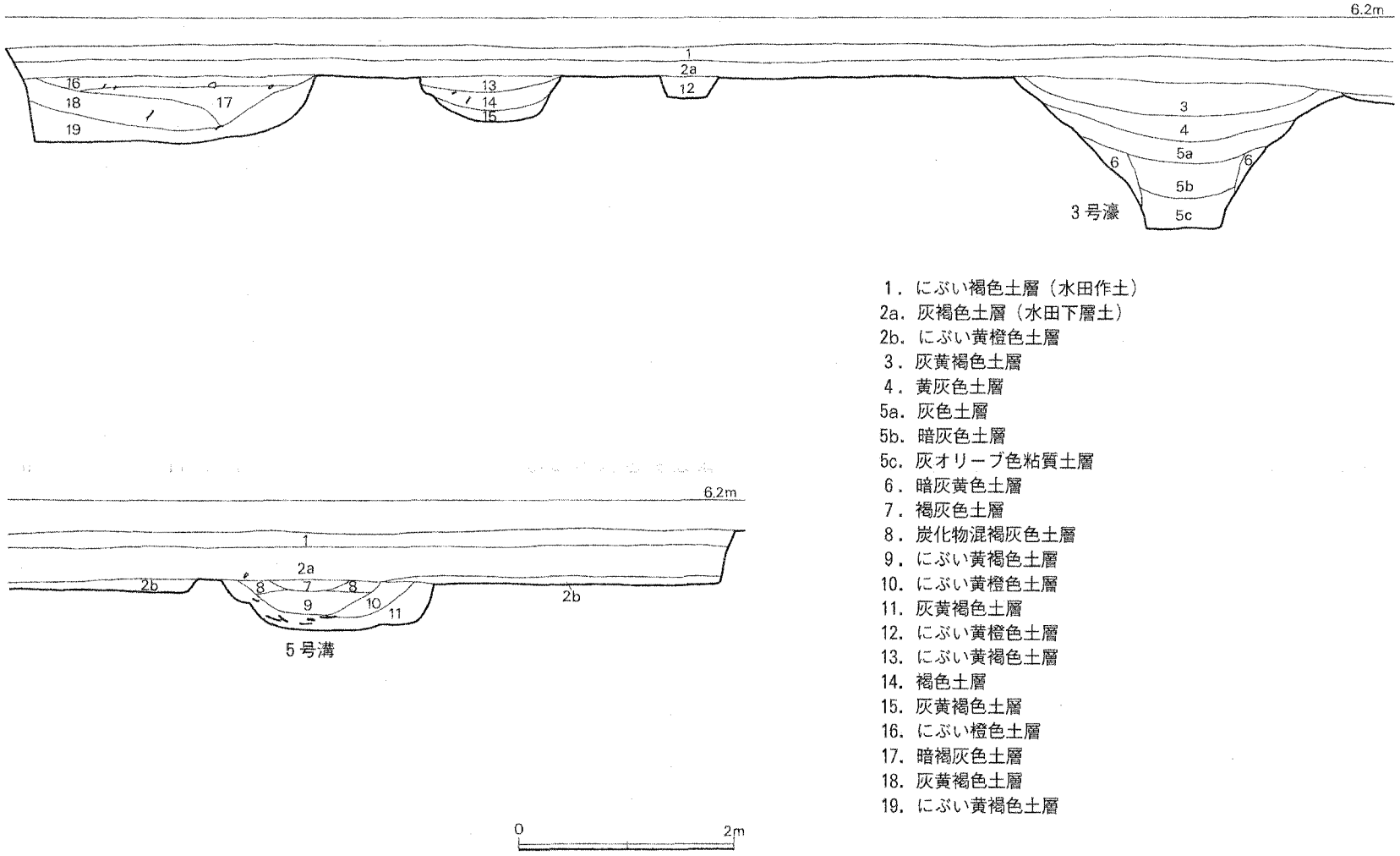
第5図　A区，B・D区遺構配置図（1／200）



第6図　C区遺構配置図（1／200）

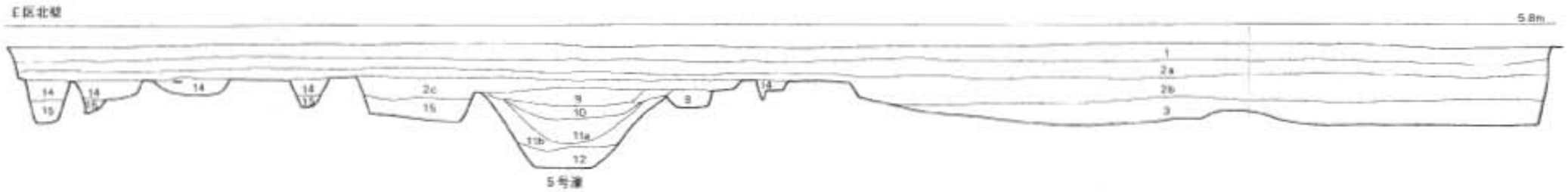


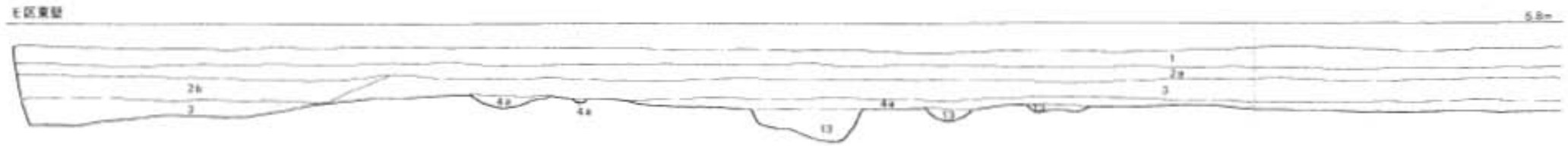
第7図　E区遺構配置図（1／200）

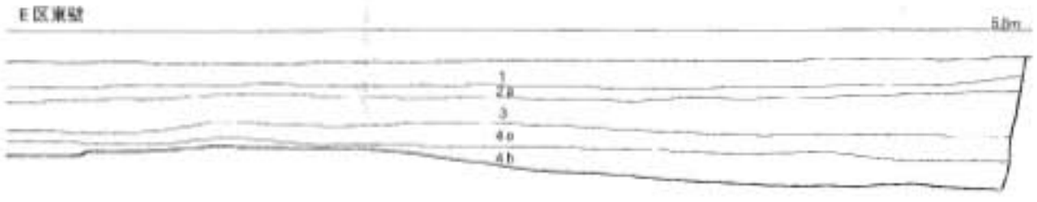


1．にぶい褐色土層（水田作土）
2a．灰褐色土層（水田下層土）
2b．にぶい黄橙色土層
3．灰黄褐色土層
4．黄灰色土層
5a．灰色土層
5b．暗灰色土層
5c．灰オリーブ色粘質土層
6．暗灰黄色土層
7．褐灰色土層
8．炭化物混褐灰色土層
9．にぶい黄褐色土層
10．にぶい黄橙色土層
11．灰黄褐色土層
12．にぶい黄橙色土層
13．にぶい黄褐色土層
14．褐色土層
15．灰黄褐色土層
16．にぶい橙色土層
17．暗褐灰色土層
18．灰黄褐色土層
19．にぶい黄褐色土層

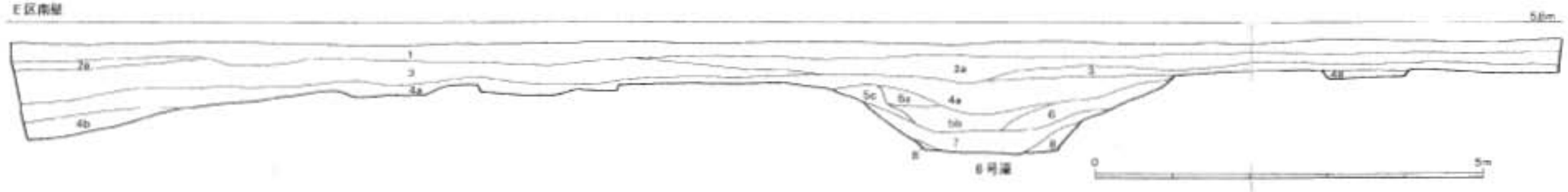
第8図　D区東壁土層図（1／60）



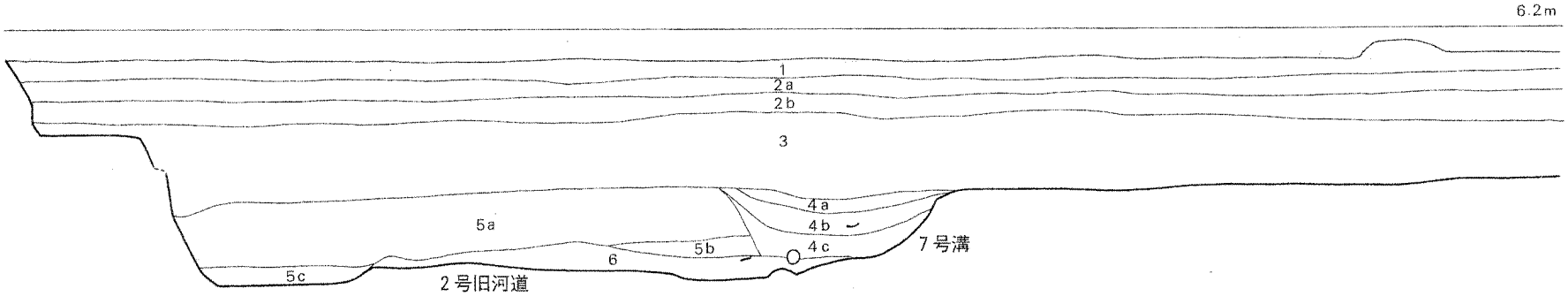


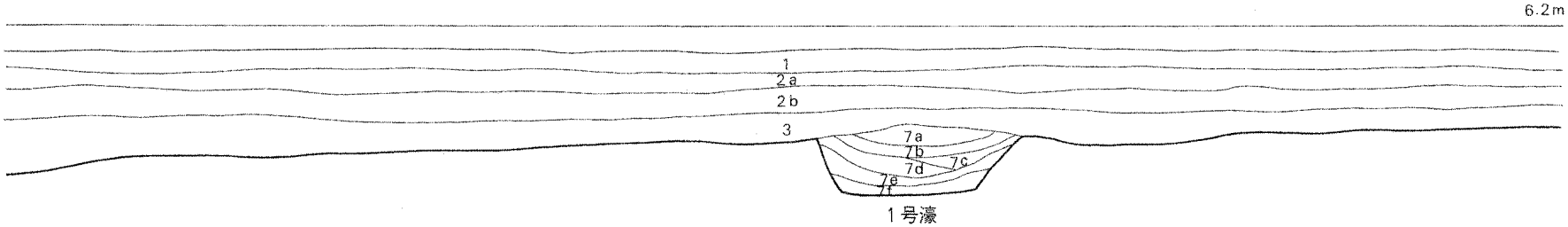


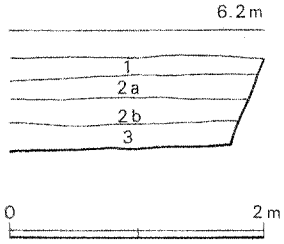
1．褐色土層（水田作土）
2a．灰褐色土層（水田下層土）
2b．明灰褐色土層（水田下層土）
2c．赤灰色土層
3．褐灰色粘質土層
4a．淡褐灰色粘質土層
4b．灰色粘質土層
5a．灰褐色粘質土層
5b．褐灰色粘質土層
5c．淡褐灰色粘質土層
6．暗褐灰色粘質土層
7．暗灰色粘質土層（炭化物混り）
8．黄灰色粘質土層
9．淡褐灰色粘質土層
10．明褐灰色粘質土層
11a．暗褐灰色粘質土層
11b．褐灰色粘質土層
12．灰色粘質土層（炭化物混り）
13．暗褐灰色土層
14．灰黄褐色土層
15．暗灰黄褐色土層



第9図　E区北壁・東壁・南壁土層図（1／60）

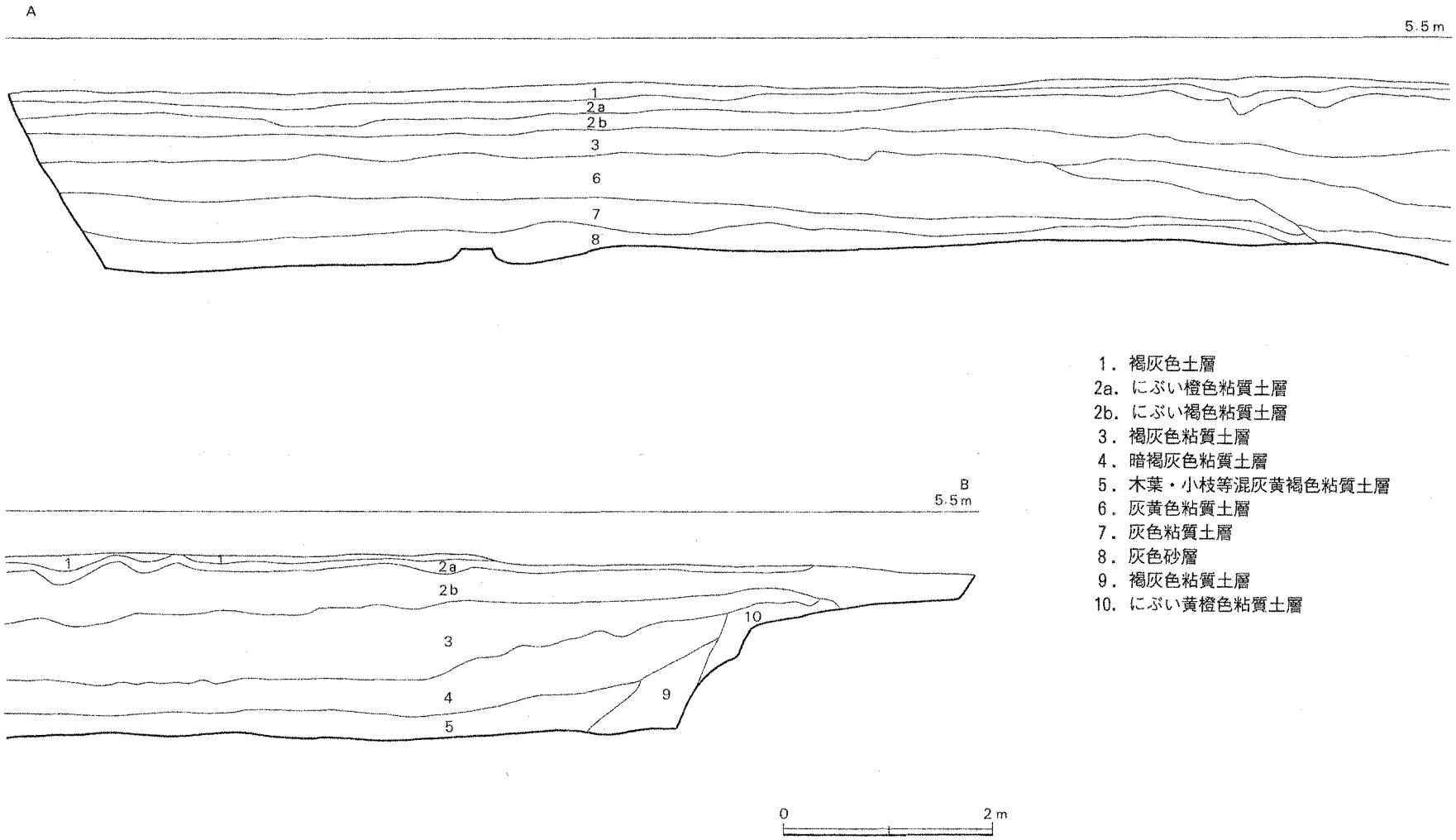






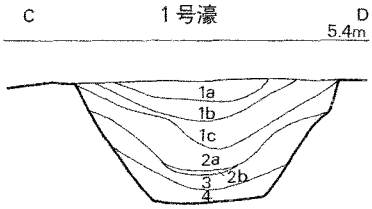
1．褐色土層（水田作土）
2a．灰褐色土層（水田下層土）
2b．明灰褐色土層
3．礫混褐灰色粘質土層
4a．黒褐色粘質土層
4b．褐灰色粘質土層
4c．淡褐灰色粘質土層
5a．砂混淡褐灰色粘質土層
5b．オリーブ灰色砂層
5c．砂・小枝等混灰色粘質土層
6．黄灰色粘質土層
7a．灰褐色土層
7b．褐灰色土層
7c．暗灰褐色土層
7d．灰黄褐色土層
7e．灰黄色粘質土層
7f．灰色粘質土層

第10図　C区北壁土層図（1／60）

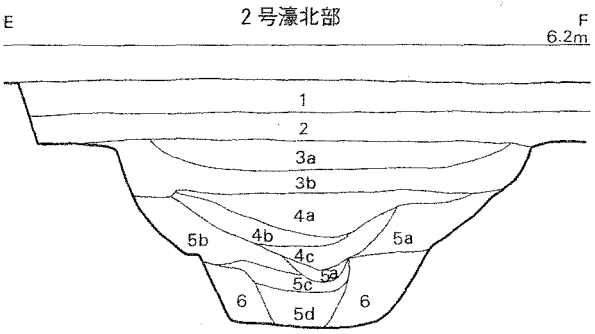


1．褐灰色土層
2a．にぶい橙色粘質土層
2b．にぶい褐色粘質土層
3．褐灰色粘質土層
4．暗褐灰色粘質土層
5．木葉・小枝等混灰黄褐色粘質土層
6．灰黄色粘質土層
7．灰色粘質土層
8．灰色砂層
9．褐灰色粘質土層
10．にぶい黄橙色粘質土層

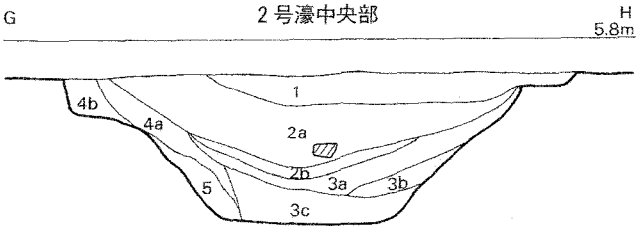
第11図　1号旧河道土層図（1／60）



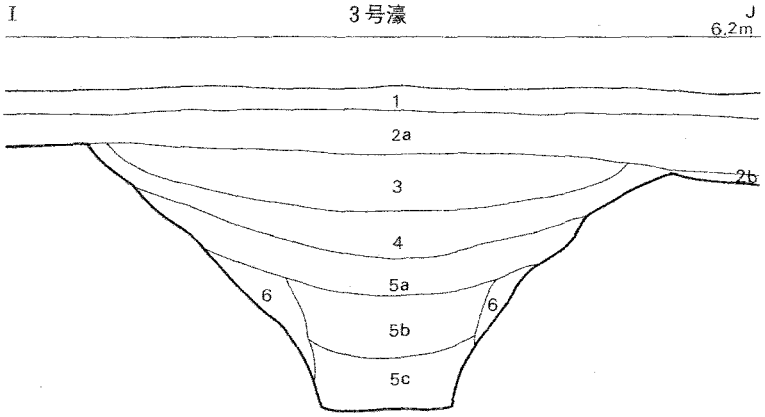
1a. 炭化物混赤灰色土層
1b. 褐灰色土層
1c. 灰褐色土層
2a. 灰黄褐色土層
2b. 黒褐色炭化物層
3. 灰色粘質土層
4. 灰オリーブ色粘質土層



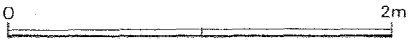
1. にぶい褐色土層（水田作土）
2. 灰褐色土層（水田下層土）
3a. にぶい赤褐色土層
3b. 赤灰色土層
4a. 淡赤灰色土層
4b. 灰褐色土層
4c. 褐灰色土層
5a. 淡褐灰色土層
5b. 淡灰褐色土層
5c. 暗黄灰色粘質土層
5d. 黄灰色粘質土層
6. 暗灰オリーブ色粘質土層



1. 灰褐色土層
2a. 褐灰色土層
2b. 炭化物混褐灰色土層
3a. 炭化物混黄灰色土層
3b. 暗灰黄色色土層
3c. 灰色粘質土層
4a. 灰黄褐色土層
4b. にぶい黄橙色土層
5. 暗灰オリーブ色粘質土層



1. にぶい褐色土層（水田作土）
2a. 灰褐色土層（水田下層土）
2b. にぶい黄橙色土層
3. 灰黄褐色土層
4. 黄灰色土層
5a. 灰色土層
5b. 暗灰色土層
5c. 灰オリーブ色粘質土層
6. 暗灰黄色土層



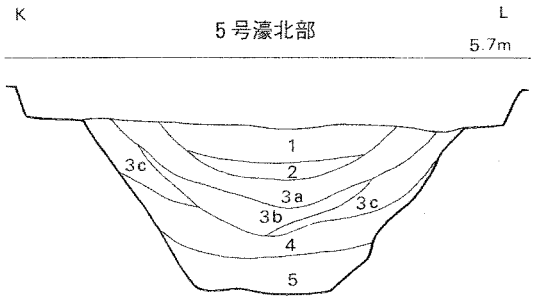
第12図　濠土層図①（1／40）

(4) 土壙及び竪穴状遺構（第18図～第27図）

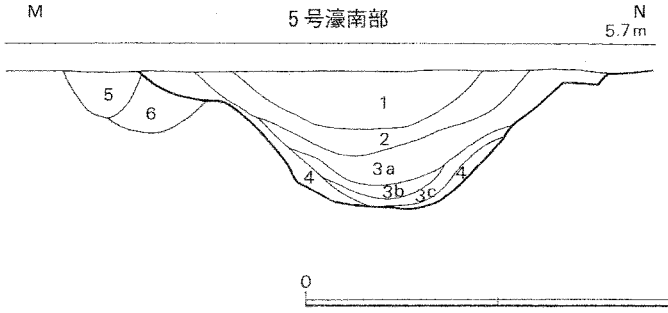
今回の調査地区においては，土壙をはじめ竪穴状遺構が数多く検出した。ここでは実測図を掲載したものに限って報告する。時期別にすると，城ノ越式土器～須玖Ⅰ式土器主体がB区2号・6号土壙，E区16号土壙，須玖Ⅰ式土器主体がB区10号土壙，須玖Ⅱ式土器主体がA区1号・2号・3号土壙，B区17号土壙・24号土壙・28号土壙・34号土壙，D区2号・3号土壙，E区1号・11号土壙である。用途別にみると，本来貯蔵穴で最終的に廃棄土壙となった可能性があるのが，A区3号土壙，B区2号・10号土壙，D区3号土壙，E区1号土壙で，廃棄土壙がA区1号・2号土壙，B区6号・17号・24号・27号・28号・34号土壙，D区2号土壙，E区11号・16号土壙であり，この内B区2号・6号土壙は，石製品の粗材や未製品，チップ等を多く出土したので，石製品工房関連のものと考えられる。なお，E区1号土壙から滑石混入の楽浪系土器，16号土壙から前漢代の三翼鏃が出土した。

(5) その他（第28図）

B区では，石製の礎盤を伴う柱穴を3箇所確認した。原の辻遺跡では，前述した近接する平成9年度の溜池造成工事に伴う調査地区において，大型高床建物の建築部材である床大引材が出土したが，この材は礎石建物や瓦葺き建物に使用される可能性を指摘された。しかし，現在までの調査では礎石や瓦は発見されていない。また，他の遺跡の例では礎盤は木製であり，当該遺跡では床大引材と石製礎盤との組み合わせの可能性も出てきた。E区では，上甕，下甕とも須玖Ⅰ土器新段階による，合口小児甕棺1基を検出した。B・D・E区では，北部を中心に柱穴状小穴が集中して検出した。

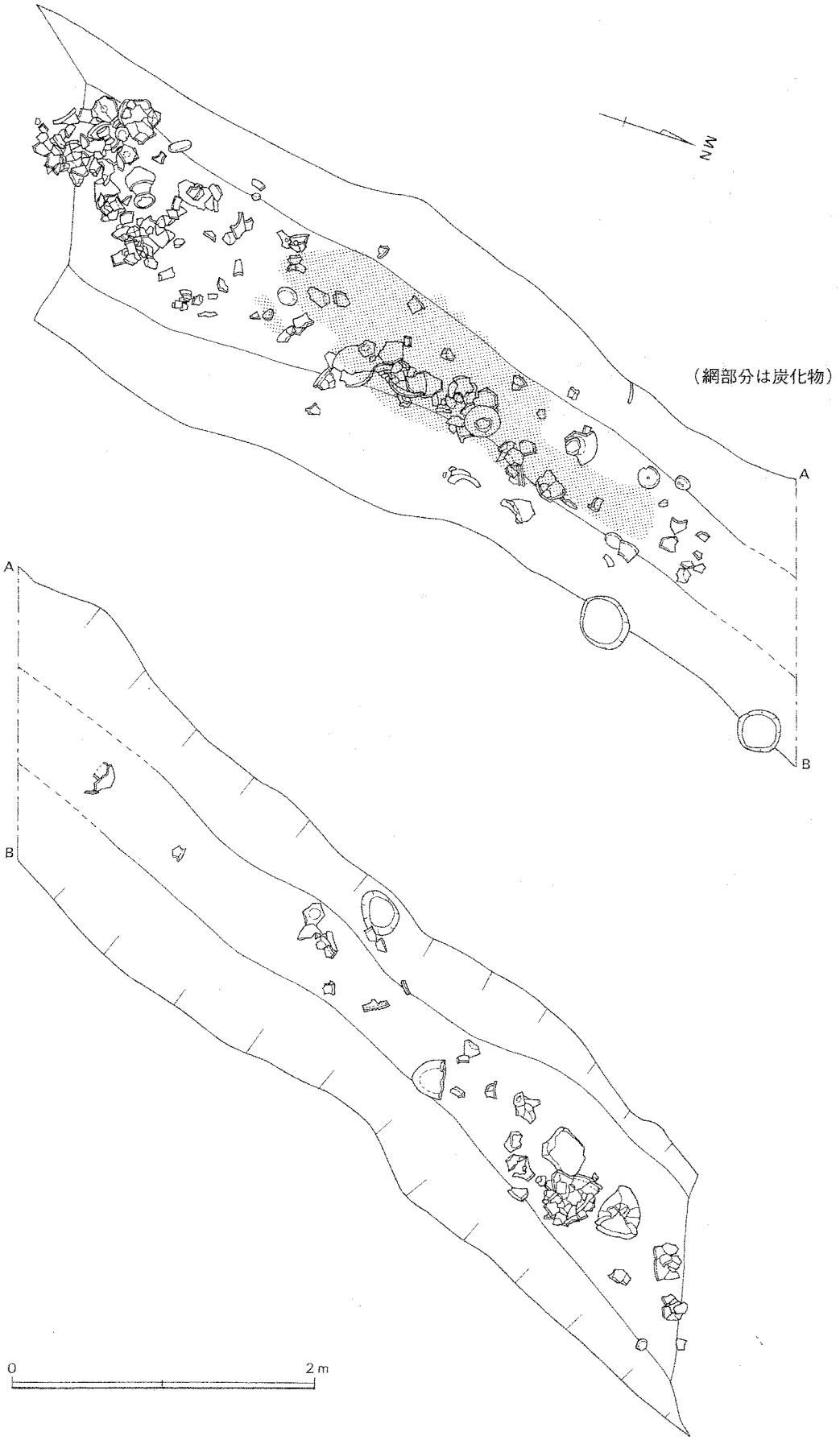


1．灰褐色土層
2．褐灰色土層
3a．灰黄褐色粘質土層
3b．炭化物混暗褐灰色粘質土層
3c．黄灰色粘質土層
4．灰色粘質土層
5．炭化物混暗灰色粘質土層

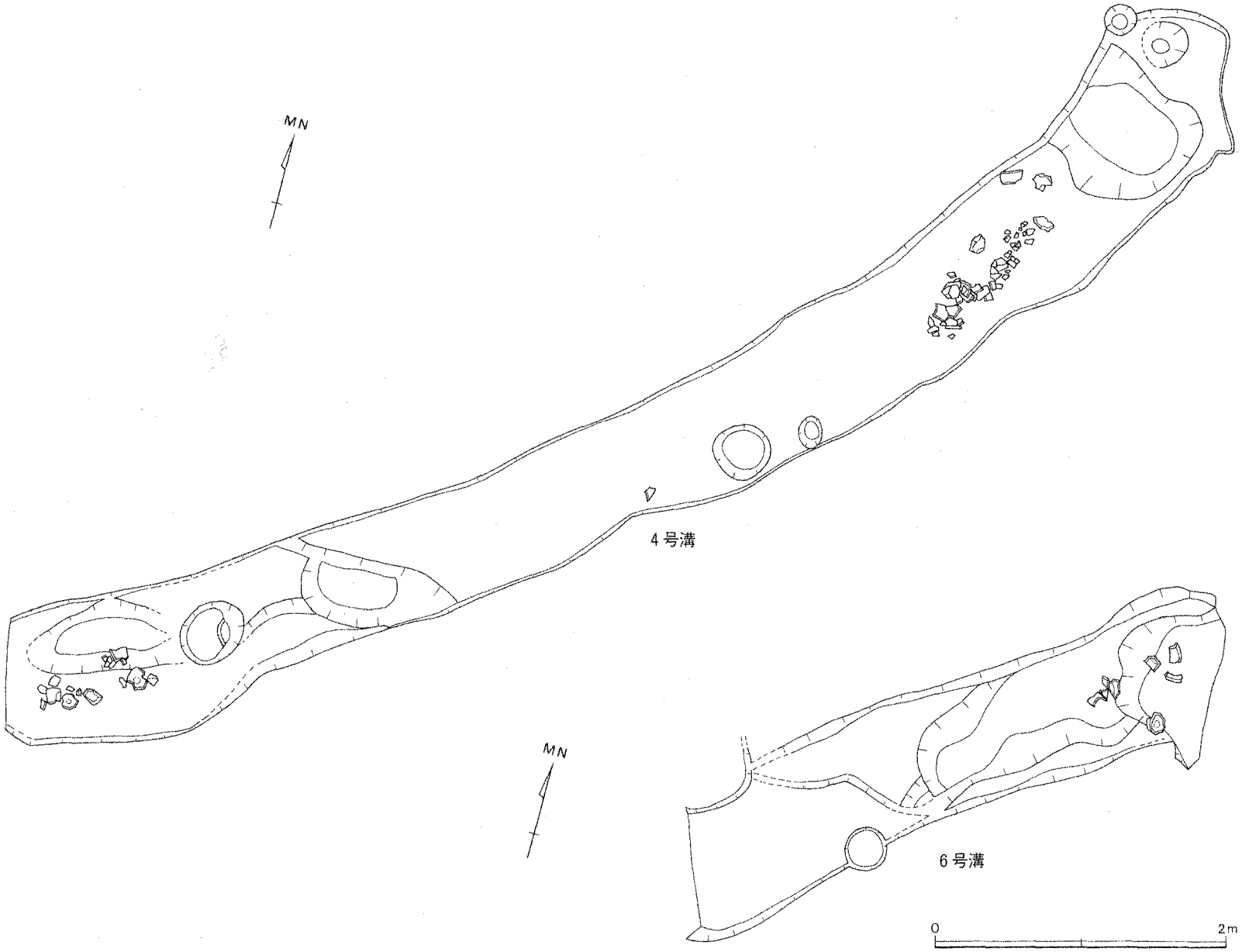


1．灰褐色土層
2．炭化物混褐灰色土層
3a．灰黄褐色粘質土層
3b．炭化物混暗褐灰色粘質土層
3c．黄灰色粘質土層
4．暗灰黄色粘質土層
5．淡黄灰色土層
6．黄褐色土層

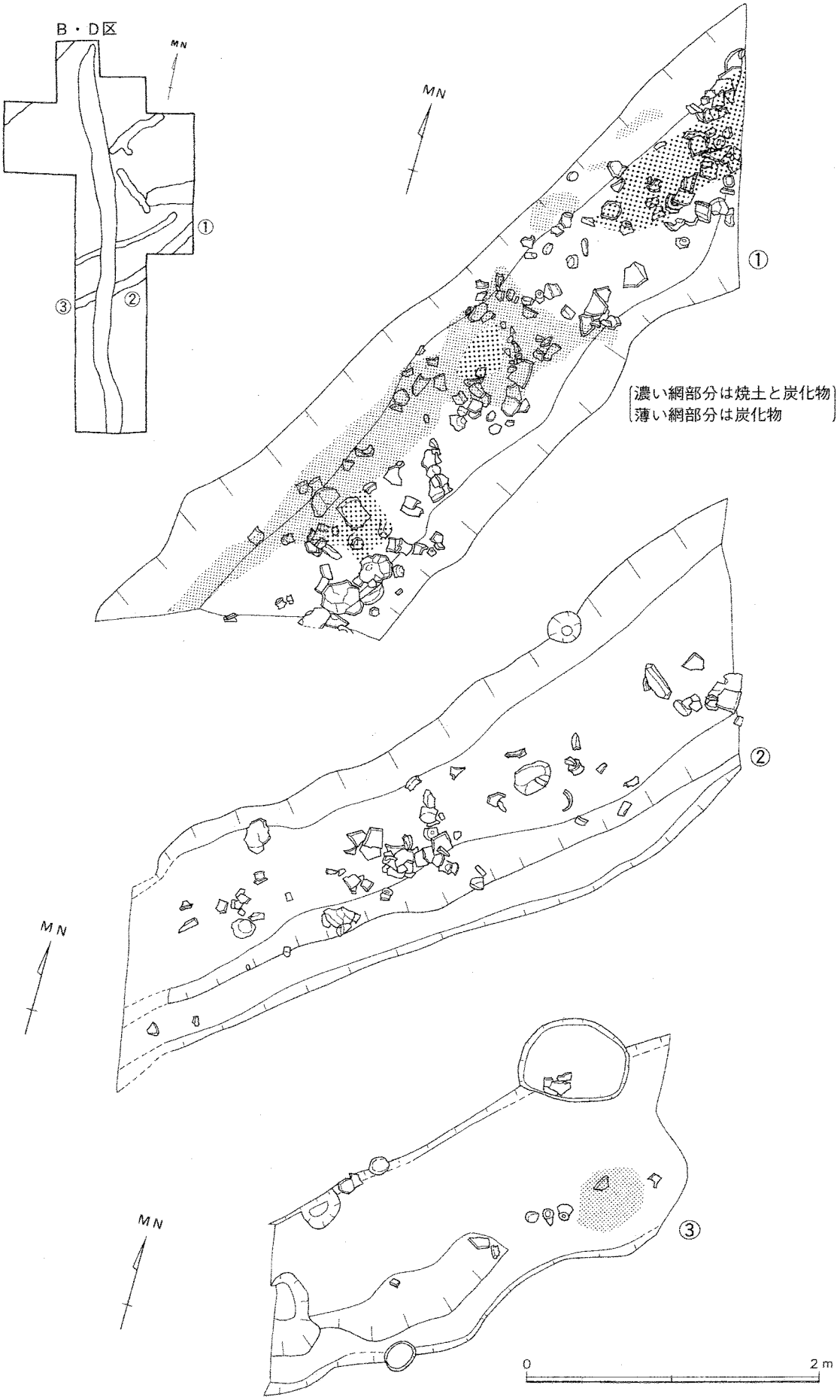
第13図　濠土層図②（1／40）



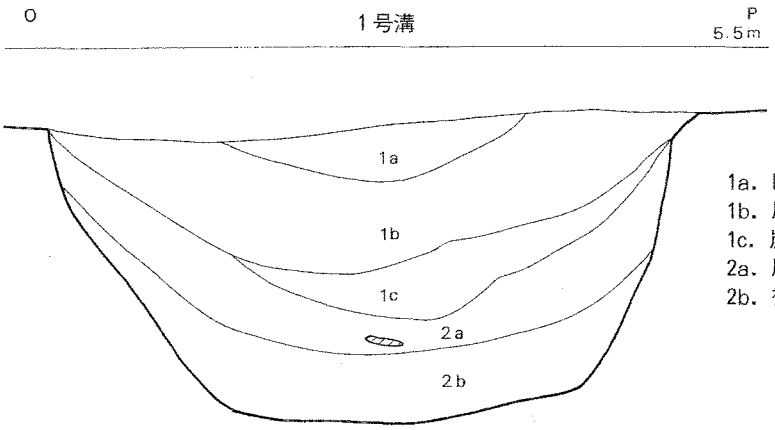
第14図　1号濠遺物出土状況（1／40）



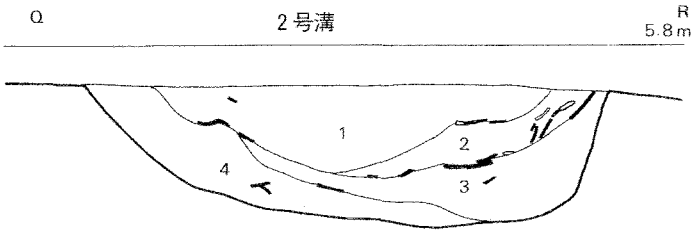
第15図　4号溝・6号溝遺物出土状況（1／40）



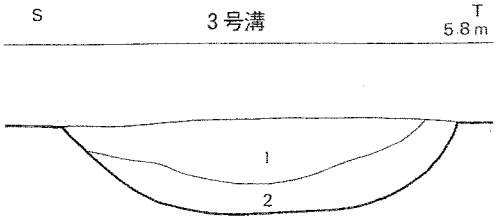
第16図　5号溝遺物出土状況（1／40）



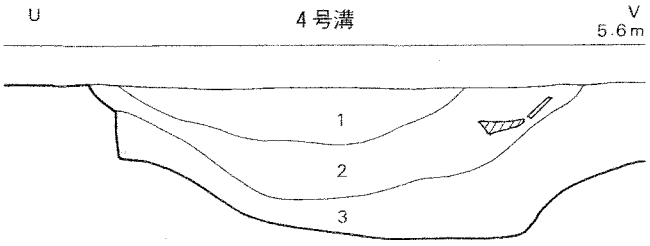
1a．暗褐灰色土層
1b．灰褐色土層
1c．炭化物・焼土混にぶい褐色土層
2a．灰黄褐色粘質土層
2b．褐灰色粘質土層



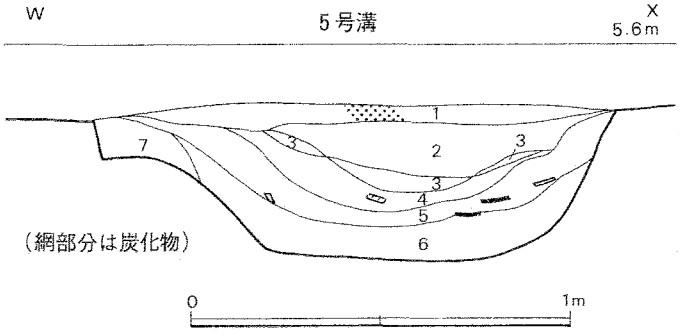
1．にぶい褐色土層
2．褐灰色土層
3．灰褐色土層
4．淡灰褐色土層



1．灰褐色土層
2．にぶい黄褐色土層

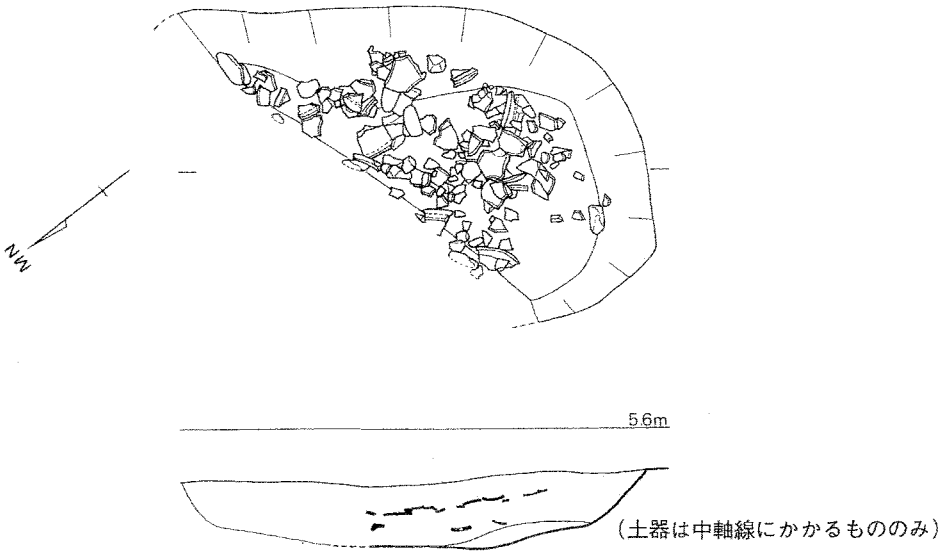


1．炭化物混赤灰色土層
2．炭化物・焼土混灰褐色土層
3．灰黄色土層

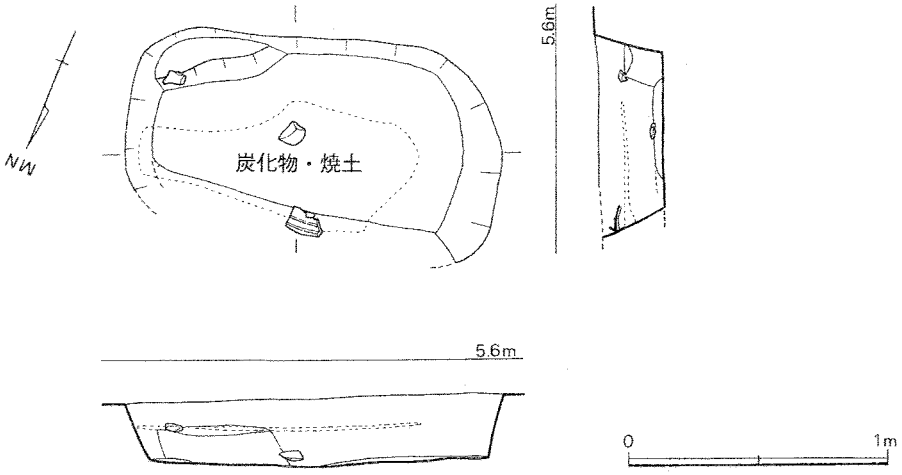


1．炭化物混赤灰色土層
2．褐灰色土層
3．炭化物混暗褐灰色土層
4．橙色焼土層
5．炭化物混にぶい黄橙色土層
6．炭化物混灰黄褐色土層
7．灰褐色土層

第17図　溝土層図（1／20）

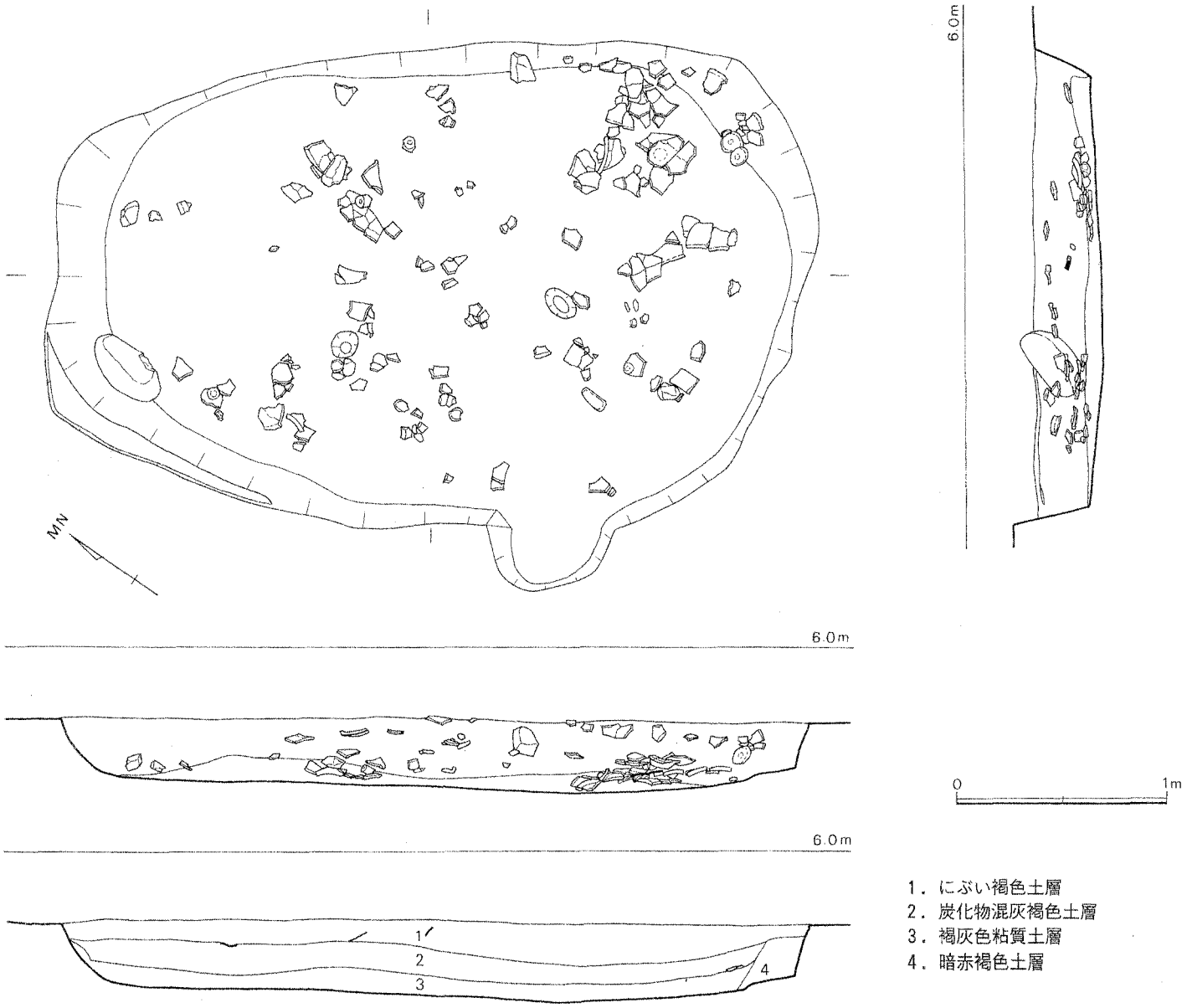


A区１号土壙



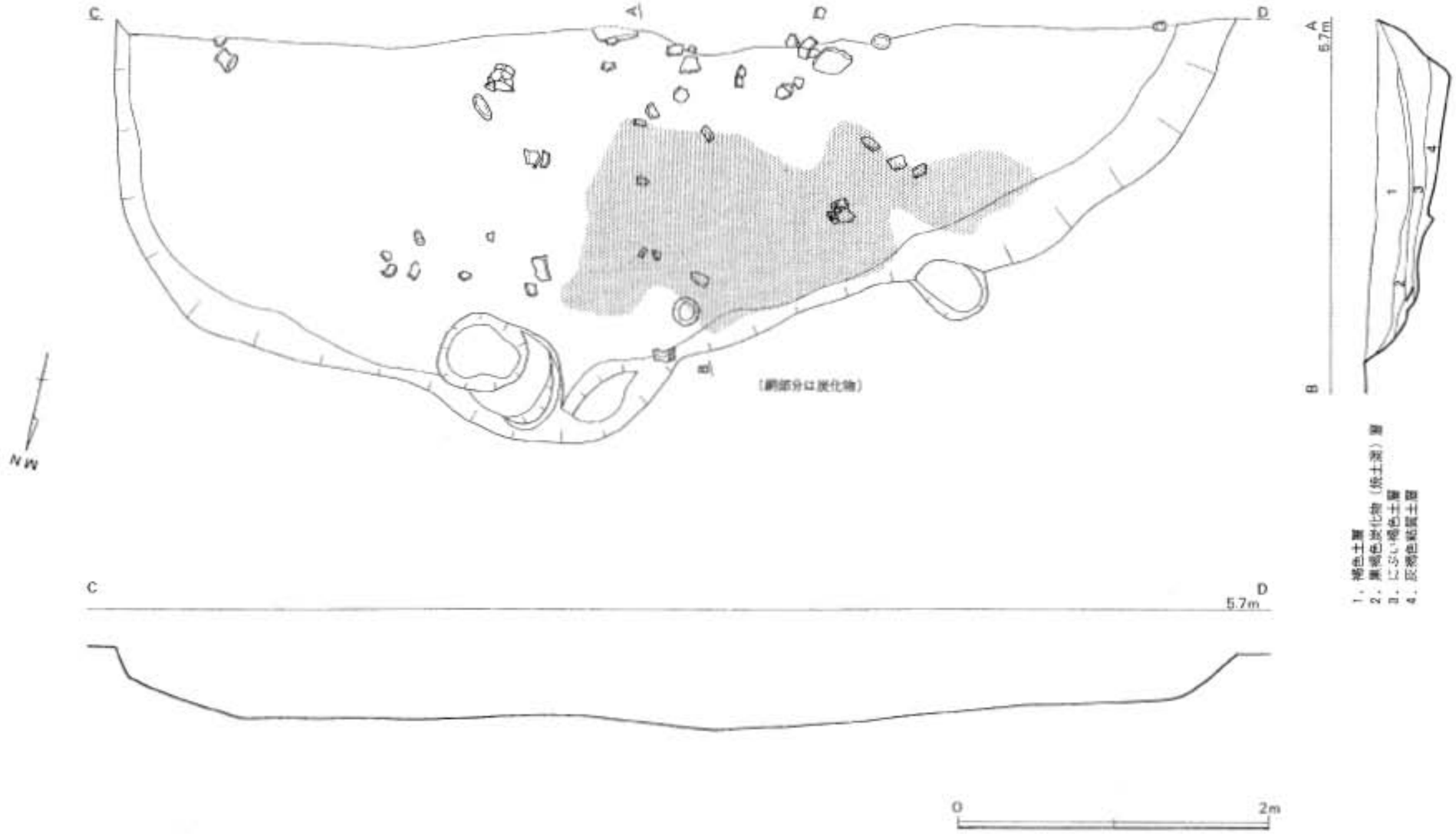
A区２号土壙

第18図　A区１号・２号土壙実測図（１／30）

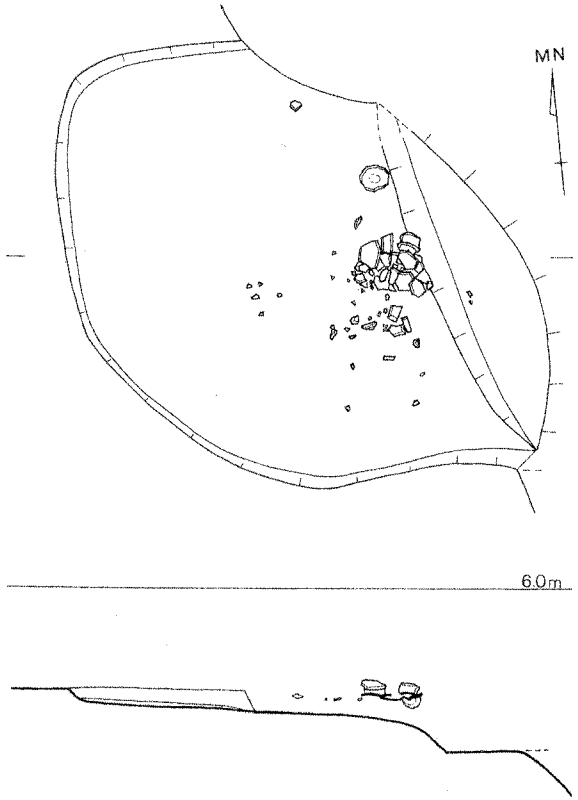


1．にぶい褐色土層
2．炭化物混灰褐色土層
3．褐灰色粘質土層
4．暗赤褐色土層

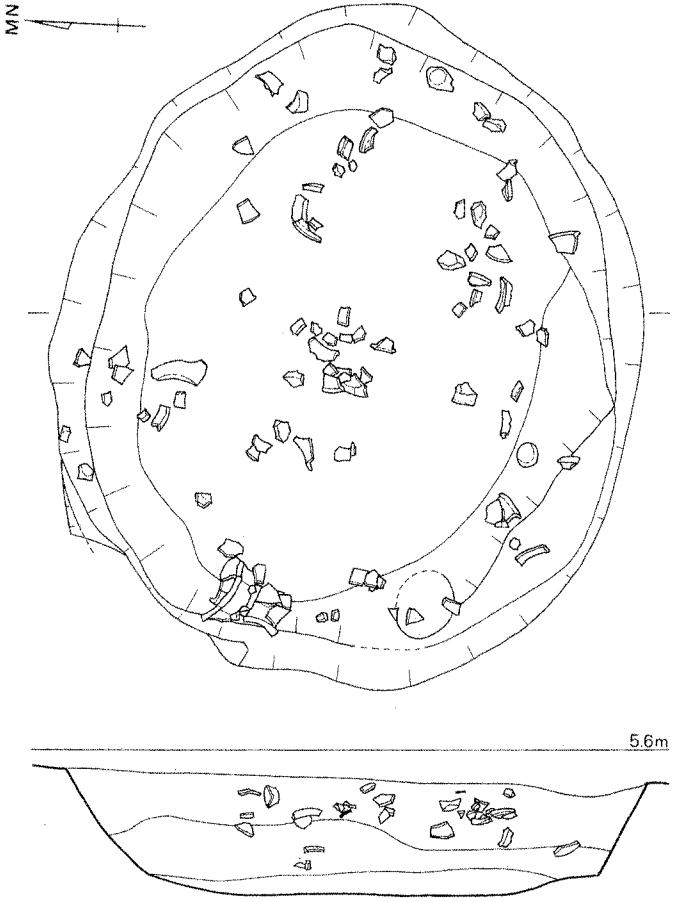
第19図　B区2号土壙実測図・土層図（1／30）



第20図　A区3号土壙実測図・土層図（1／30）



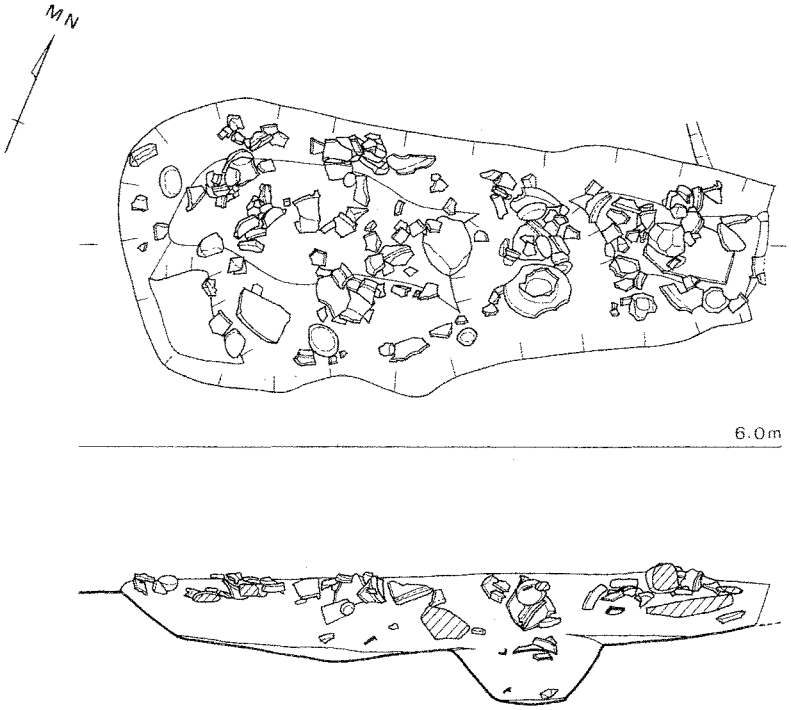
B区6号土壙



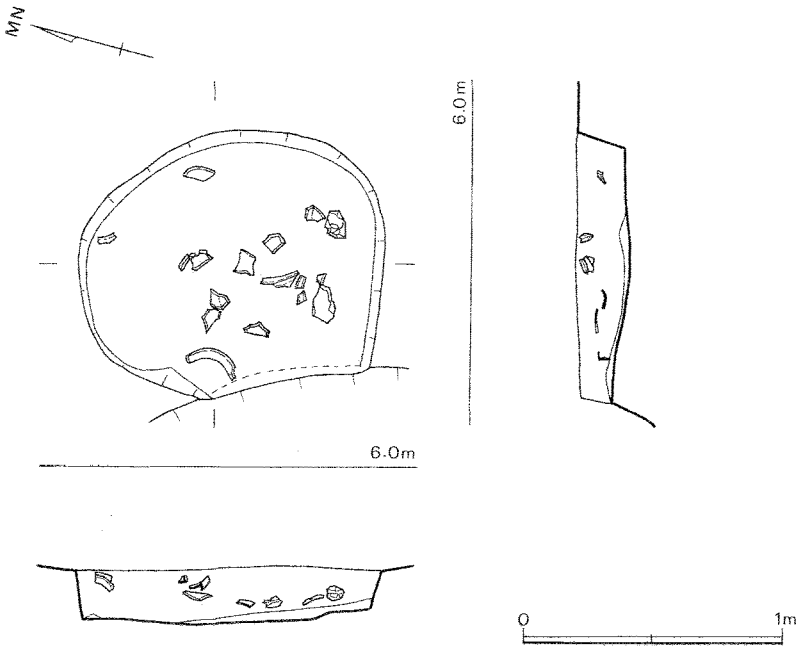
B区10号土壙

0 1m

第21図　B区6号・10号土壙実測図（1／30）

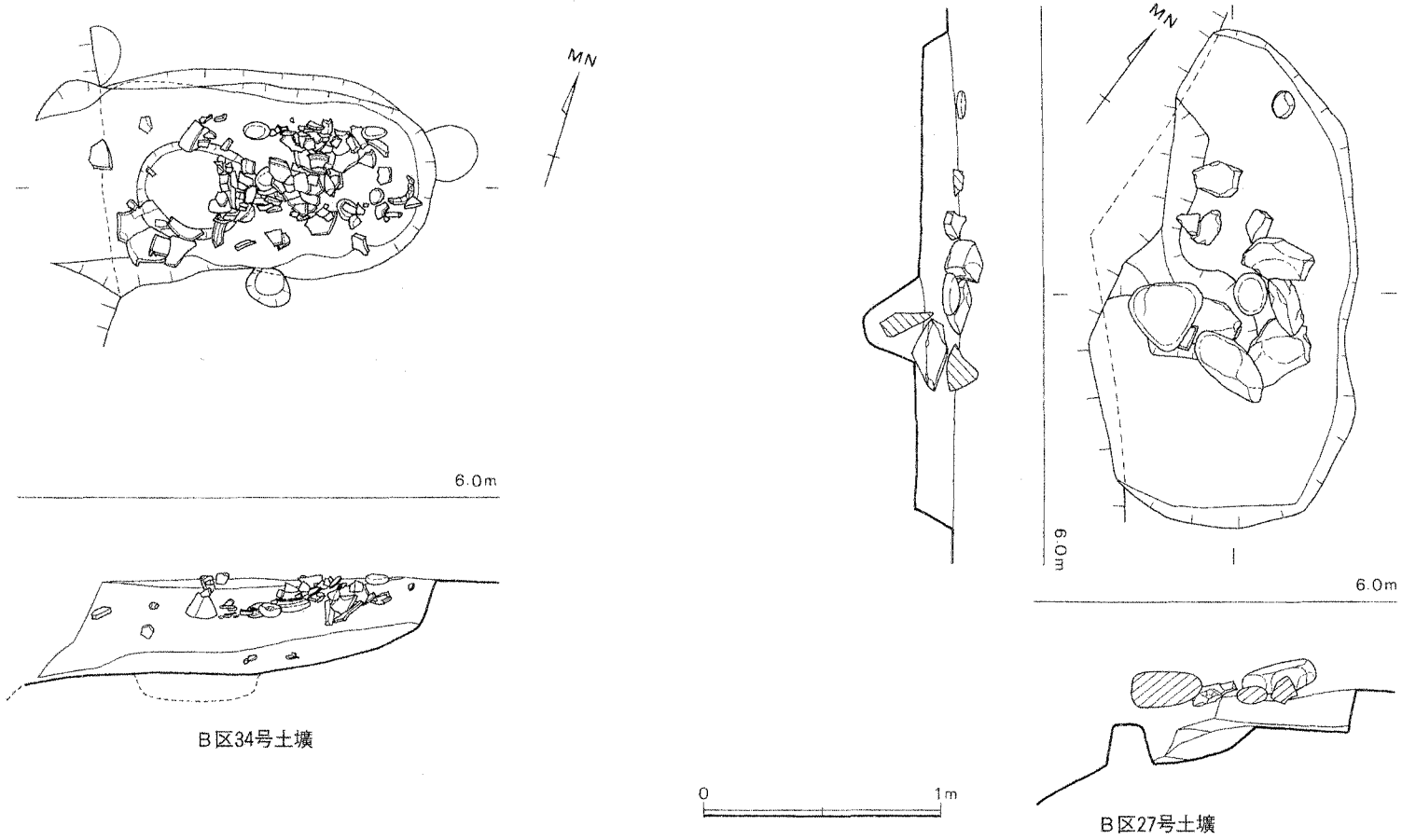


B区17号土壙

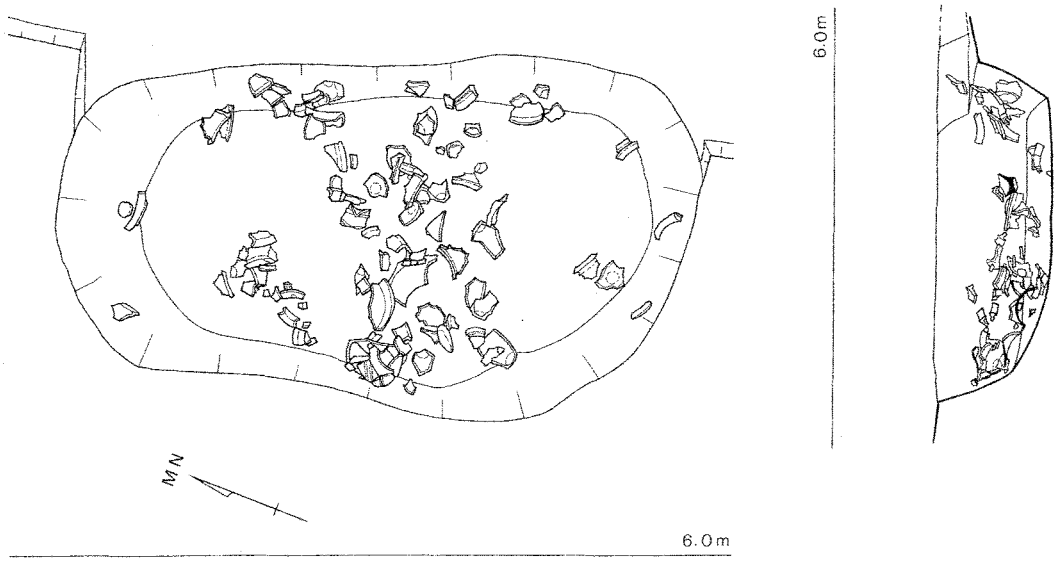


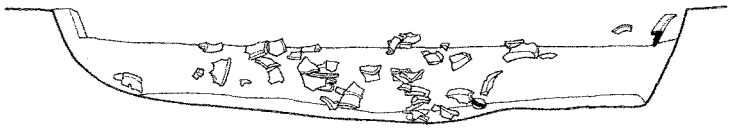
B区24号土壙

第22図　B区17号・24号土壙実測図（1／30）

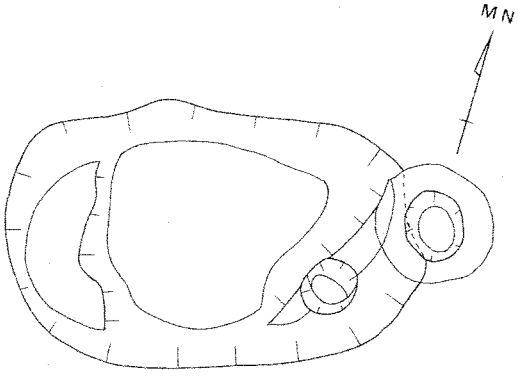


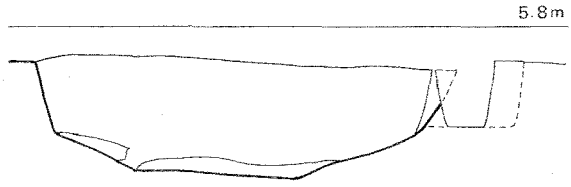
第23図　B区27号・34号土壙実測図（1／30）

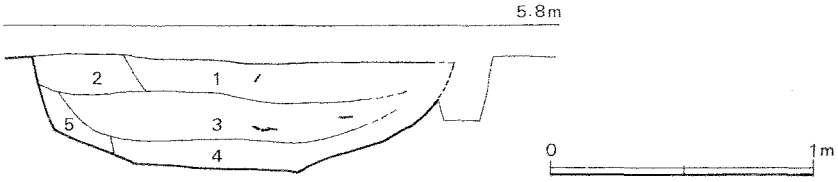




B区28号土壙



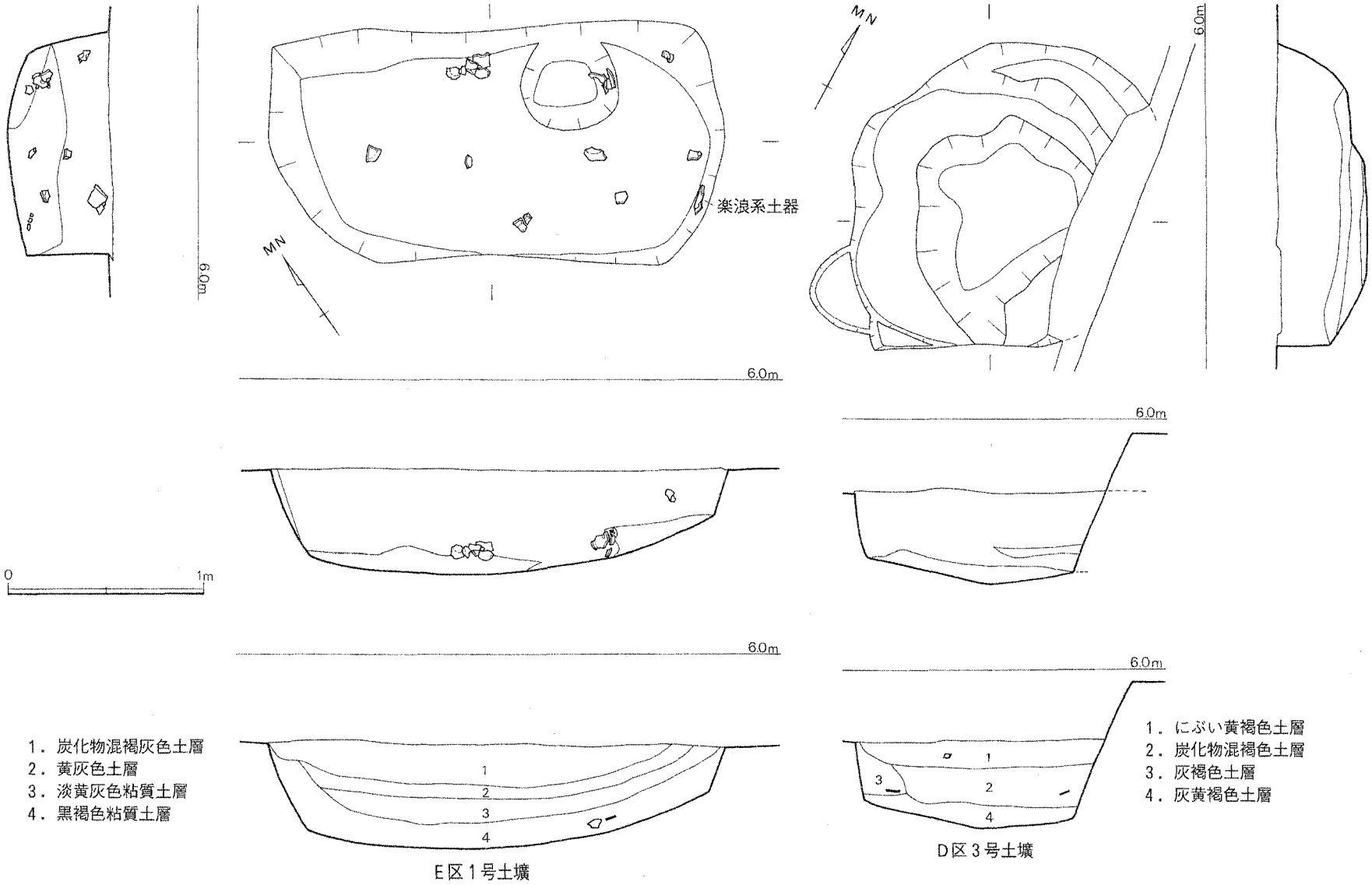




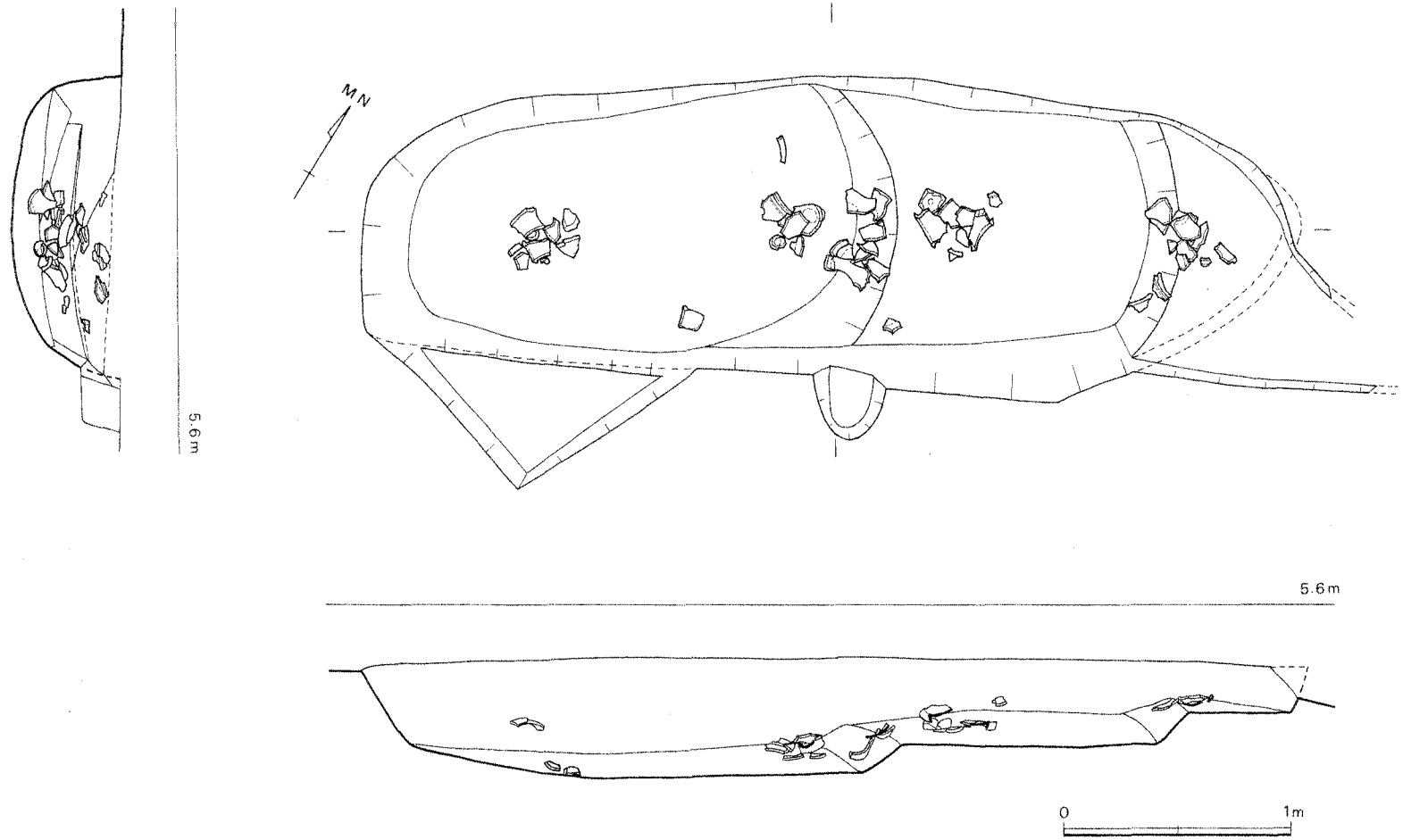
1．にぶい黄褐色土層
2．淡灰黄褐色土層
3．炭化物混褐色土層
4．灰黄褐色土層
5．褐灰色土層

D区２号土壙

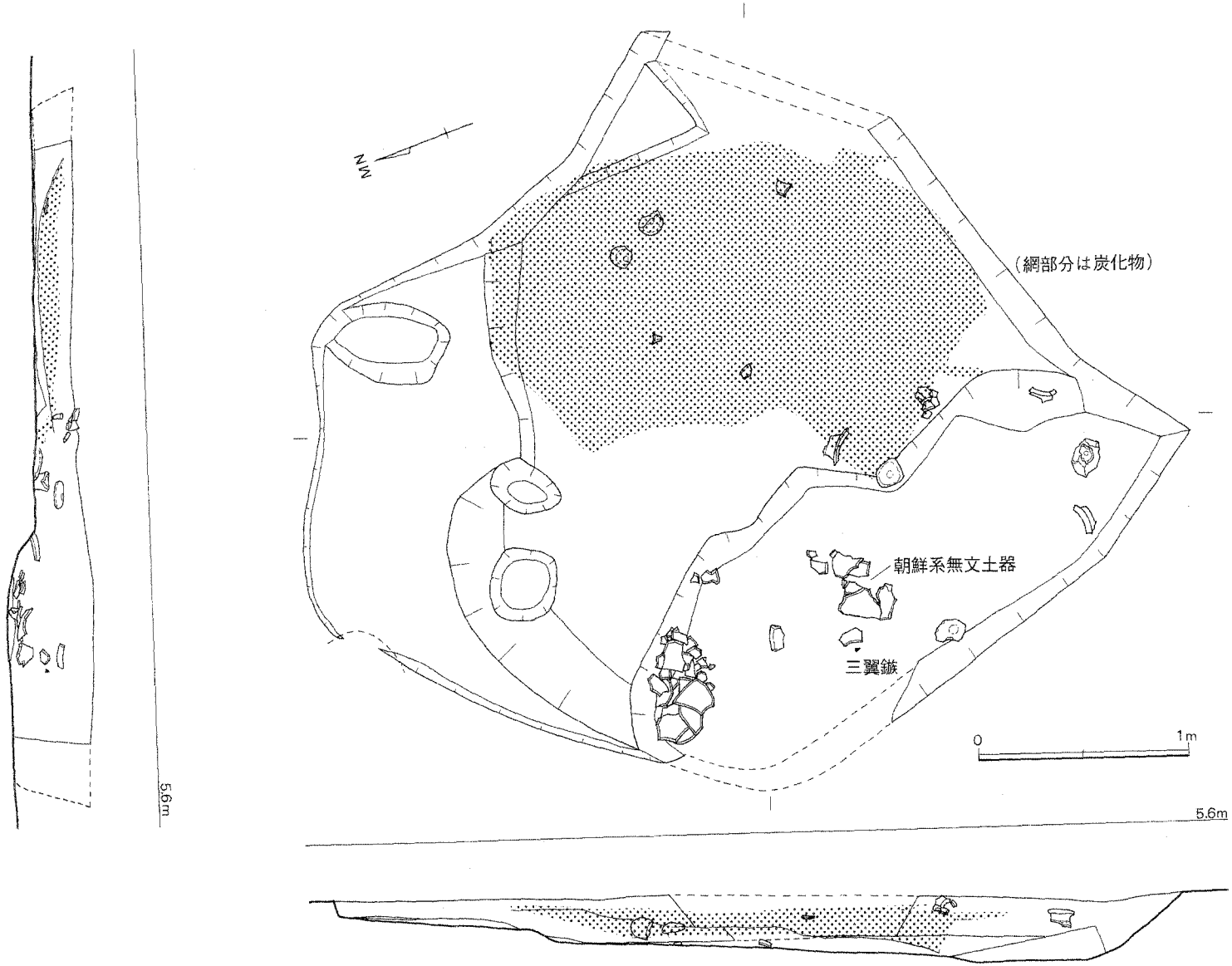
第24図　B区28号・D区２号土壙実測図・土層図（１／30）



第25図　D区3号・E区1号土壙実測図・土層図（1／30）



第26図　E区11号土壙実測図（1／30）



第27図　E区16号土壙実測図（1／30）

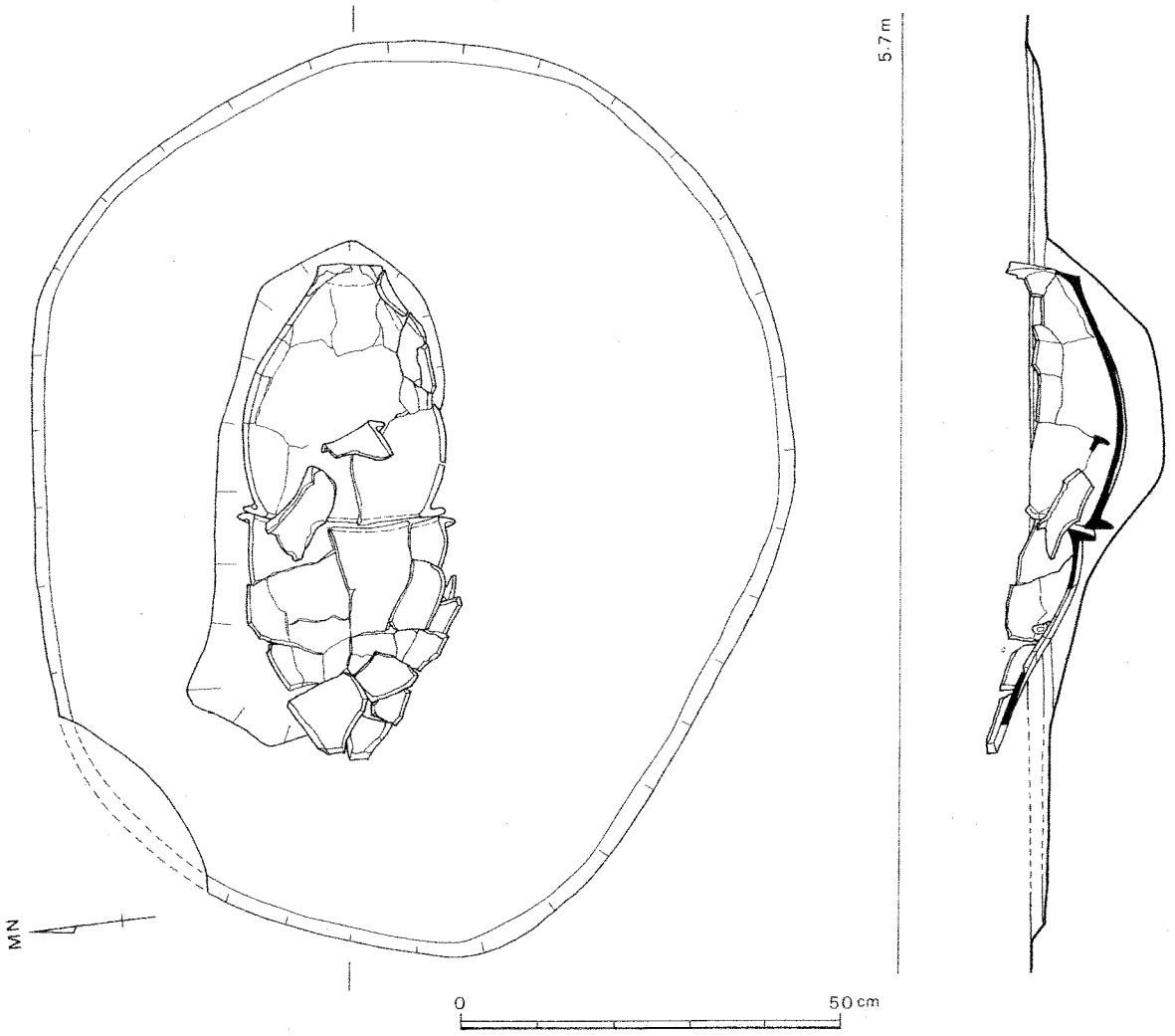
3．遺　　物

今回の調査では，コンテナ309箱分88,615点の遺物が出土した。その数量的な内訳は，土器・陶磁器84,072点，石器・石製品4,511点，金属製品10点，木製品３点，骨および骨角製品19点である。出土遺物の約95％を占める土器・陶磁器から説明を行う。

(1)　土器・陶磁器

①１号旧河道出土土器（第29図）

１～９は，逆Ｌ字形および鋤先形口縁の甕である。８・９は，口縁下に三角突帯をめぐらす。１・５・８がにぶい橙色，２・６・７が灰黄褐色，３・４がにぶい橙色，９が灰褐色を呈する。胎土に１・３・４・７・９が石英・長石・金雲母，２・６が石英・角閃石・金雲母，８が石英・長石・赤色砂・金雲母を含む。10・11は甕底部で，外底面は上げ底状をなす。10は浅黄橙色，11はにぶい橙色を呈し，



第28図　Ｅ区１号甕棺墓実測図（１／10）

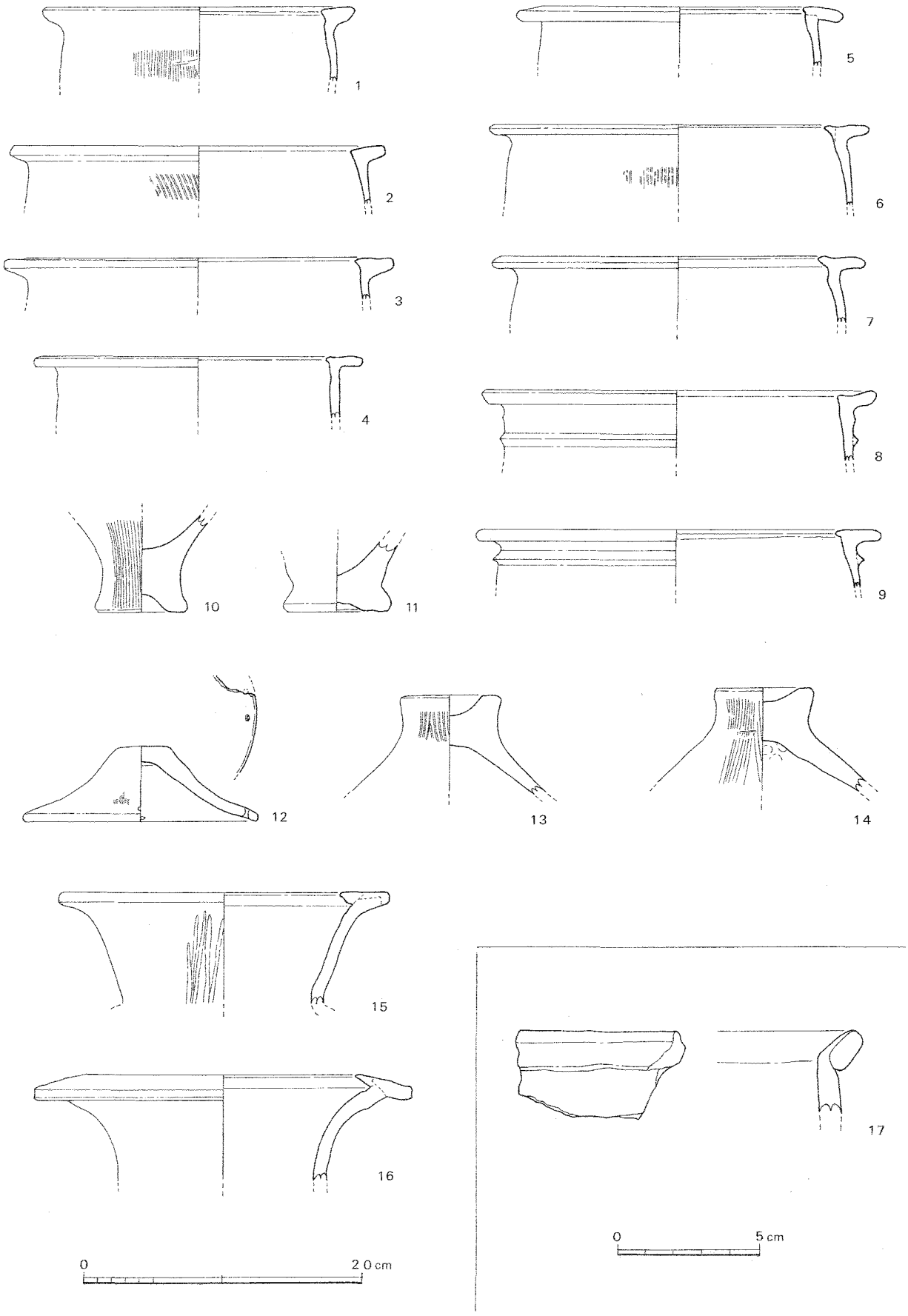
胎土に10が石英・長石・金雲母，さらに11は黒色砂を含む。12は広口壷の，13・14は甕の蓋である。12は小さな孔が2箇所みられる。12が灰黄褐色，13が明赤褐色，14が橙色を呈する。胎土に13が石英・長石，12・14が石英・長石・金雲母を含む。15・16は鋤先形口縁の広口壷である。15の頸部に縦位の部分暗号がはいる。15が灰黄褐色，16が明赤褐色を呈し，胎土に15が石英・長石・金雲母，16が石英・長石を含む。以上の1号旧河道出土土器は，弥生中期前葉の須玖Ⅰ式古段階～中期後葉の須玖Ⅱ式古段階までの土器を含むが，須玖Ⅰ式古段階～新段階を主体とする。

②2号旧河道出土土器（第29・30図）

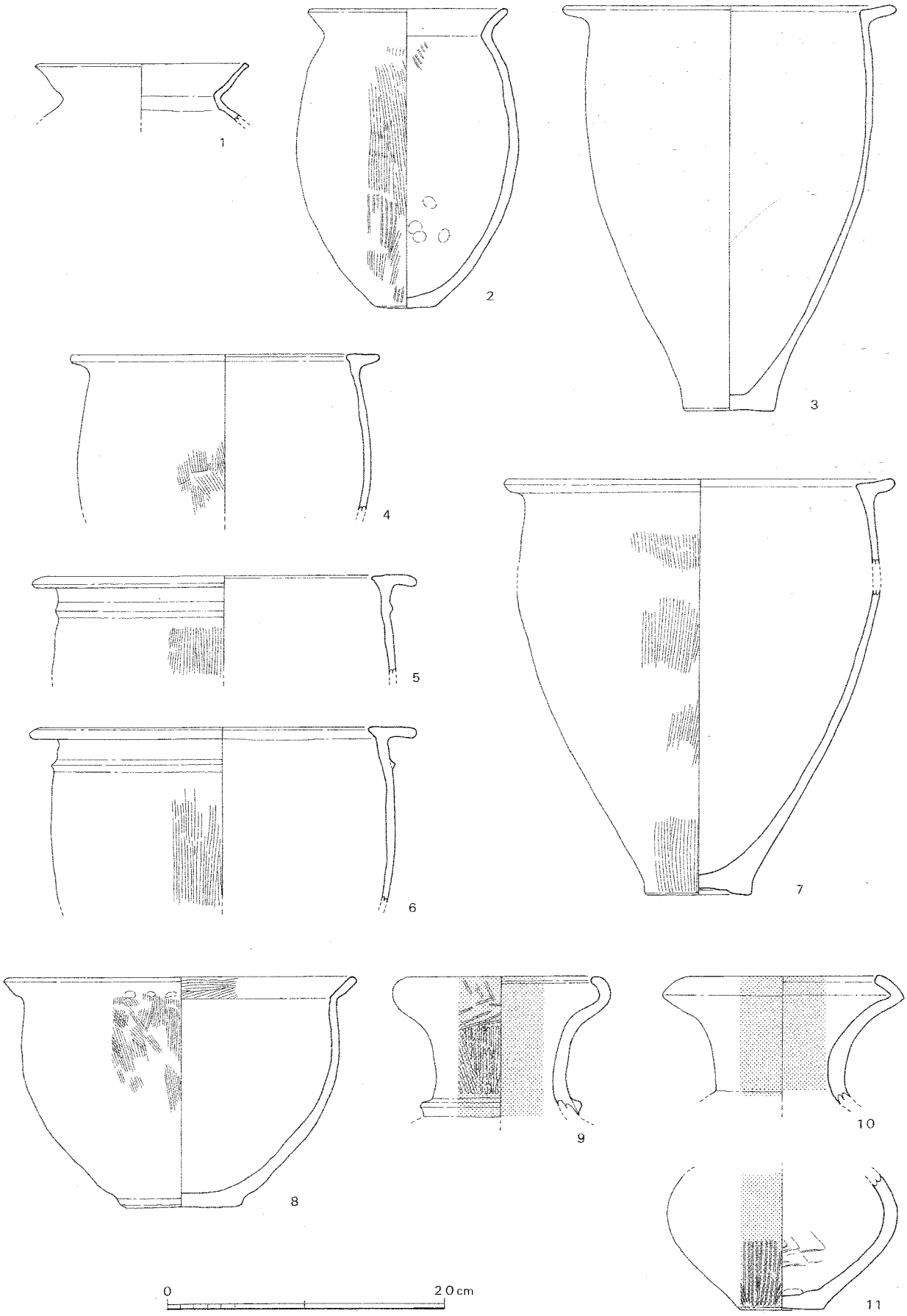
1～3は，上層出土の甕である。1は布留式甕で口縁を外方に摘みぎみにおさめる。2は「く」の字形口縁の弥生後期の甕である。底部は凸レンズ状底をなす。3は逆L字形口縁の甕である。1は橙色，2はにぶい橙色，3は灰黄褐色を呈し，胎土に1が石英・長石・赤色砂，2が石英・長石，3が石英・長石・金雲母を含む。4～11は，下層出土の土器である。4～7は逆L字形および鋤先形口縁の甕である。4がにぶい赤褐色，5・7がにぶい橙色，6が明赤褐色を呈し，胎土に4・6・7が石英・長石・金雲母，5が石英・長石・赤色砂・金雲母を含む。8は口縁が「く」の字形の鉢である。灰黄色を呈し，胎土に石英・長石・金雲母を含む。9～11は，丹塗壷である。9は袋状口縁の形態を残し，10は「く」の字形に屈曲する複合口縁である。9は灰黄色，10・11はにぶい黄橙色を呈し，胎土に9が石英・長石，10・11が石英・長石・金雲母を含む。第29図17は，上層から出土した無文土器口縁部片で，粘土紐が指オサエされ楕円形状をなす。褐灰色を呈し，胎土に石英・長石を含む。下層では後期前葉，上層では古墳前期の資料が出土して，河川は後期前葉以降に埋没したことが分かる。

③1号濠出土土器（第31～33図）

1～26は，Ⅰ層（上層）出土土器である。1～6・9～11は，逆L字形および鋤先形口縁の甕である。9～11は口縁下に三角突帯をもつが，11は凹線状にナデて突帯をつくり出している。1・2がにぶい褐色，3・9～11がにぶい黄橙色，4・5が灰黄褐色，6が灰褐色を呈し，5が胎土に石英・長石を含む他は，石英・長石・金雲母を含む。7・8は，「く」の字形に外反する口縁の甕で，7は後期初めの甕であるが，8は後期の新しい様相をもつ。7は橙色，8はにぶい黄橙色の色調で，7は胎土に石英・長石・金雲母を含み，8は石英・長石・赤色砂・角閃石・金雲母を含む。12～20は，壷である。12～17は袋状口縁の長頸壷である。13が黒塗りの可能性をもつ他は，丹塗を施している。色調は12が浅黄橙色，13が橙色，14がにぶい橙色，15がにぶい黄橙色，16がにぶい褐色，17が灰黄褐色を呈する。胎土には，いずれも石英・長石・金雲母を含む。18は屈曲部に淡い稜がつく袋状口縁壷で，にぶい黄橙色の色調で，胎土に石英・長石・赤色砂・金雲母を含む。19は複合口縁の長頸壷で，20と同一個体の可能性をもつ。20は頸部を打ち欠かれ，焼成後の穿孔がみられる。19は灰色，20はにぶい黄橙色の色調で，胎土に石英・長石・金雲母を含む。21～24は丹塗の大型筒形器台である。M字形の突帯をめぐらし，21は鍔端部に刻目を施す。21と22は同一個体と考えられる。色調は，21・22が浅黄橙色，23が灰黄褐色，24がにぶい黄橙色，25が橙色を呈する。胎土は，25が石英・長石を含む他は，石英・長石・金雲母を含む。26は広口壷の蓋で，陣笠形をなす。小さな孔が2個ずつ対にみられる。赤



第29図　1・2号旧河道出土土器（1／2，1／4）

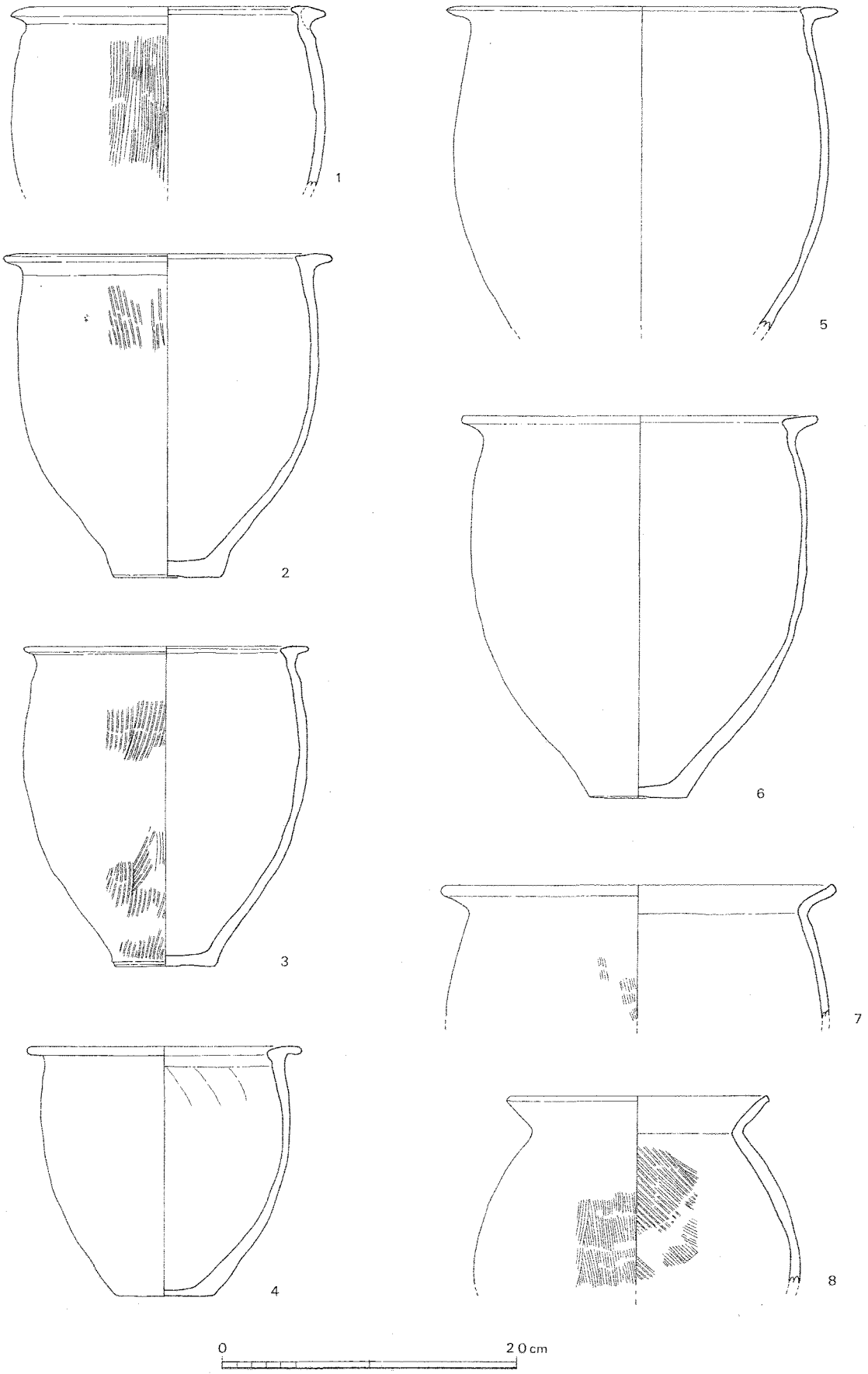


第30図　2号旧河道出土土器（1／4）

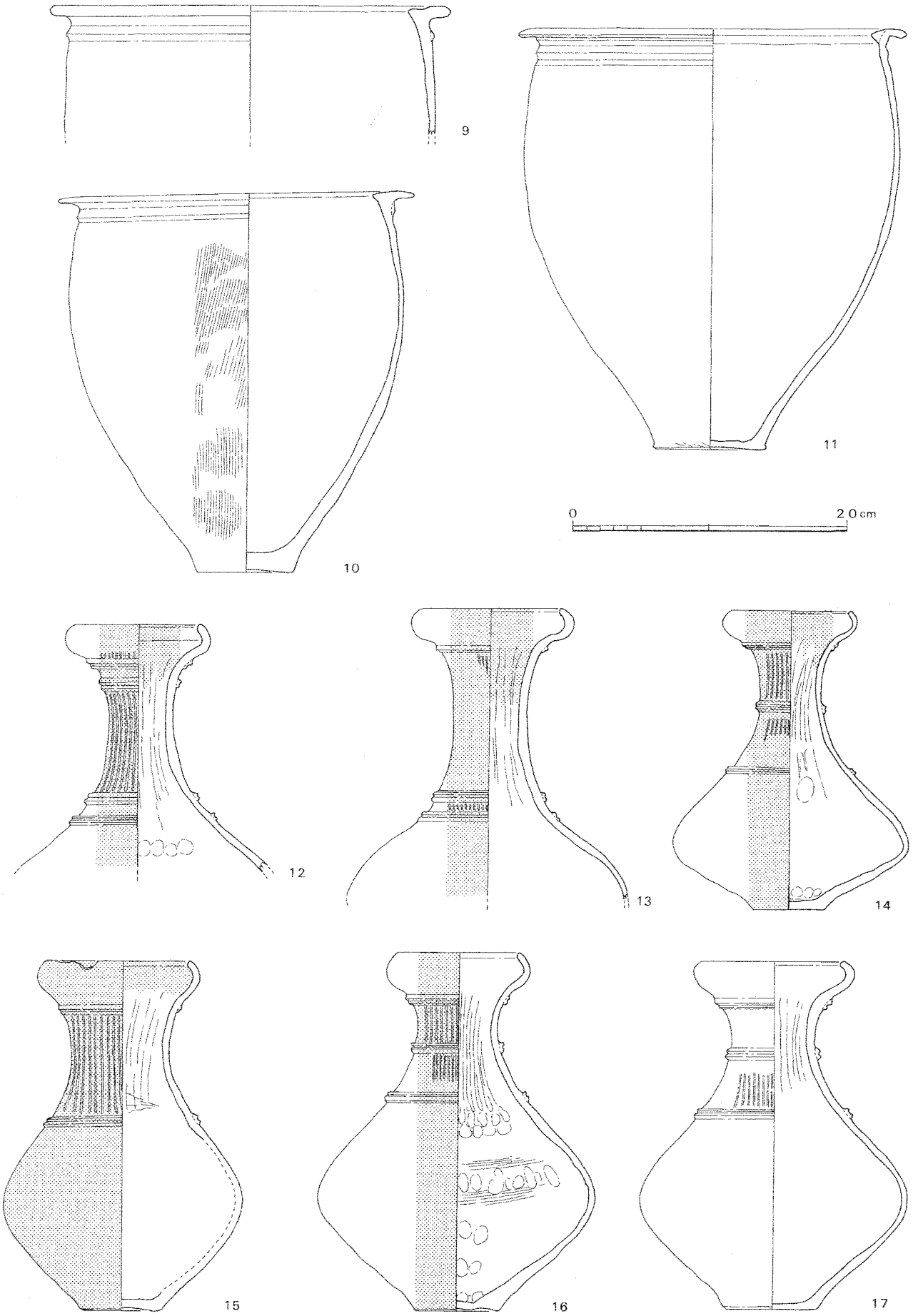
褐色の色調で，胎土に石英・長石・金雲母を含む。27・28はII層（下層）出土土器である。27は鋤先形口縁の甕で，にぶい黄褐色を呈し，胎土に石英・長石・金雲母を含む。28は有蓋の広口壷である。屈曲した口縁には小さな孔が2箇所みられる。にぶい橙色の色調で，胎土に石英・長石・金雲母を含む。以上の1号濠出土土器は，弥生中期後半から後期の土器を含んでいて，後期には濠としての機能はなくなり，弥生終末頃には埋没してしまったことが考えられる。

④2号濠出土土器（第34～37図）

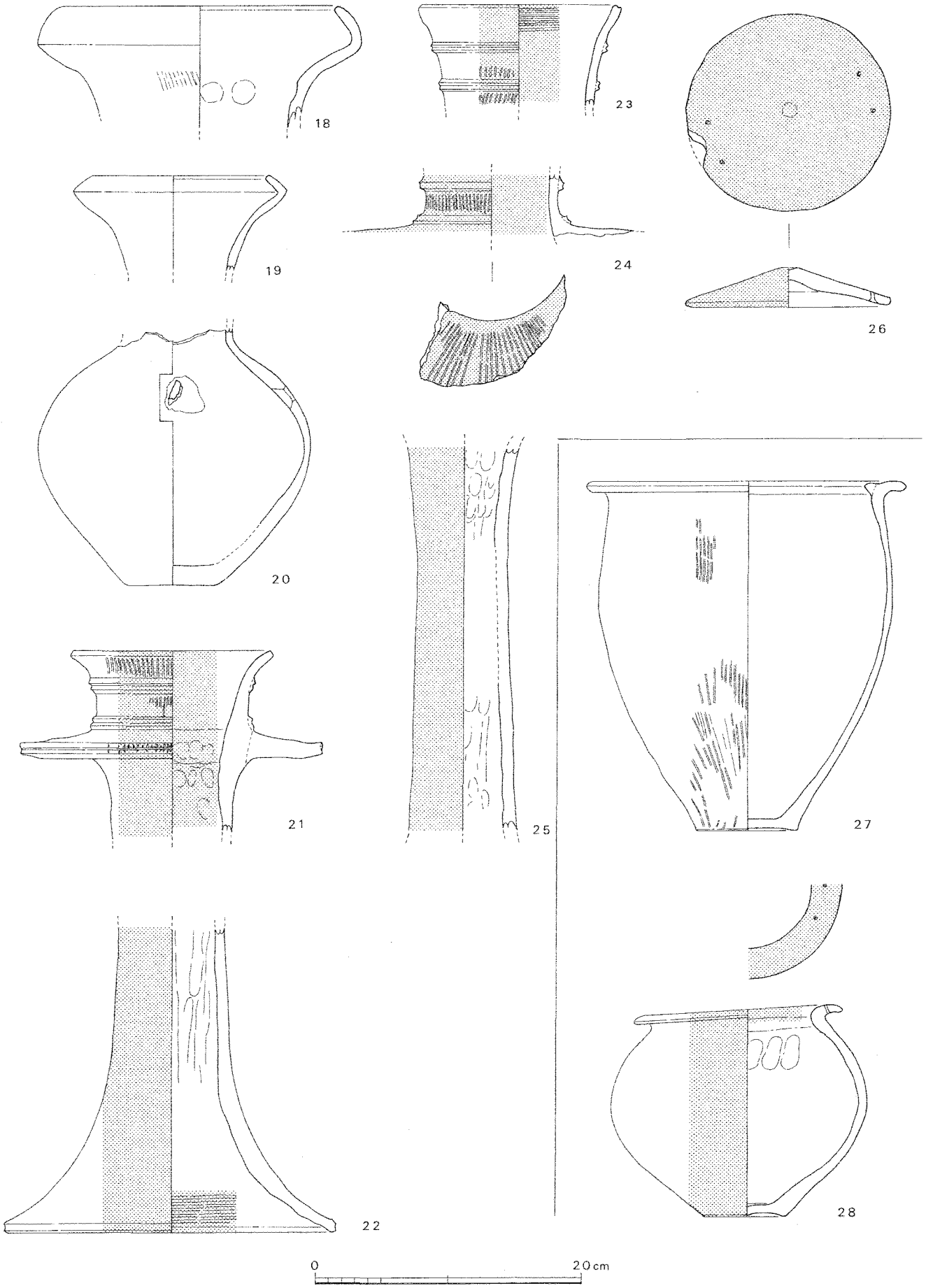
1～17は甕である。1は，「く」の字形口縁の在来系甕である。胴下半はヘラケズリの後ナデ仕上げされている。にぶい赤褐色の色調で，胎土に石英・長石・金雲母を含む。2は，胴部に2個の竹管文を施す甕で，外来系製品であろう。灰白色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石・金雲母を含む。3～17は，布留式系甕である。口縁端部を，内上方に摘みぎみにおさめるもの（4・5・10）以外は外方に摘みぎみにおさめるものに分けられる。胴部に沈線や波状沈線（6～9）や竹管文（10），刺突文（11）を施すものがある。色調は，3・4が灰白色，5・8・9・15が灰黄色，6・10・11・12・16・17がにぶい黄橙色，7・14が灰黄褐色を呈する。胎土には，3・9が石英・長石，17が石英・長石・角閃石・金雲母を含む他は，石英・長石・金雲母を含む。18～26は壷である。18は球状の胴部から口縁は外湾し，端部がヨコナデによって凹線状をなす。灰白色を呈し，胎土に石英・長石・金雲母を含む。19は口縁が直線的に開く広口壷である。胴上部に10個の刺突文を施す。灰黄色を呈し，胎土に石英・長石・金雲母を含む。20～21は，小形坩である。20・21は胴部下半を手持ちヘラケズリする。20が橙色，21が浅黄橙色，22がにぶい黄橙色を呈し，胎土に20が石英・長石，21が石英・長石・赤色砂・金雲母，22が石英・長石・金雲母を含む。23・24は長頸壷である。23が浅黄橙色，24がにぶい橙色を呈し，胎土に石英・長石・金雲母を含む。25・26は小形丸底壷で，26は指整形されいびつなつくりである。25がにぶい橙色，26が橙色を呈し，胎土に石英・長石・金雲母を含む。27～28は山陰系の二重口縁壷である。胴部内面はヘラケズリされる。28は胴上部に波状沈線が部分的に入る。27が浅黄橙色，28がにぶい橙色を呈し，胎土に石英・長石・金雲母を含む。29～32は浅鉢である。29～31は屈曲部から口縁が大きく開く鉢で，31は胴内面がヘラケズリされる。29・31がにぶい橙色，30がにぶい黄褐色を呈し，29が胎土に石英・長石・赤色砂・金雲母，30・31は石英・長石・金雲母を含む。32は丸底鉢である。にぶい橙色を呈し，胎土に石英・長石を含む。33～40は高杯である。33・36～38は杯下半が浅く，屈曲部から逆ハの字形に上半が開くものである。33の脚部は柱状部がテンタシス状をなす。37は杯上半に暗文が入る。いずれも色調はにぶい橙色を呈し，胎土に33が石英・長石・赤色砂・金雲母，36が石英・長石，37が長石・赤色砂・金雲母，38が長石・金雲母を含む。34・35は杯下半が丸みをもつ深い身の高杯である。杯上半には暗文風にタテミガキが施される。にぶい橙色の色調で，胎土に34が長石・金雲母，35が長石・赤色砂・金雲母を含む。39は杯部が丸く屈局部の段をもたないもので，にぶい橙色の色調で，胎土に石英・長石・金雲母を含む。40は三角錐形の脚部で，裾部は直線的に開く。にぶい橙色の色調で，胎土に石英・長石・金雲母を含む。41～43は鼓形の器台である。41は受部外面に暗文が施されている。42は小形品で，41ともに裾部内面はヘラケズリされる。43は内面がハケ



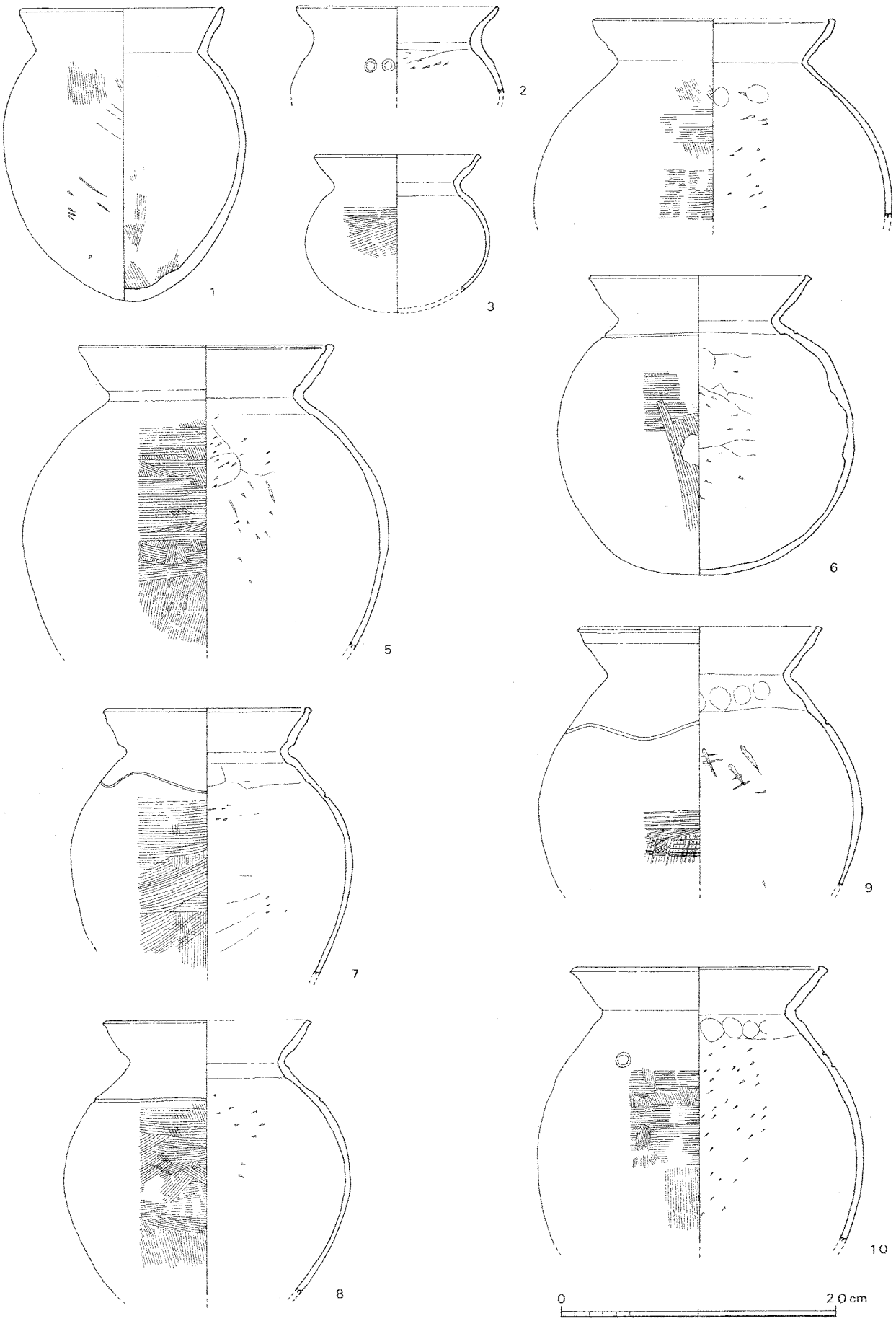
第31図　1号濠出土土器①（1／4）



第32図　1号濠出土土器②（1／4）

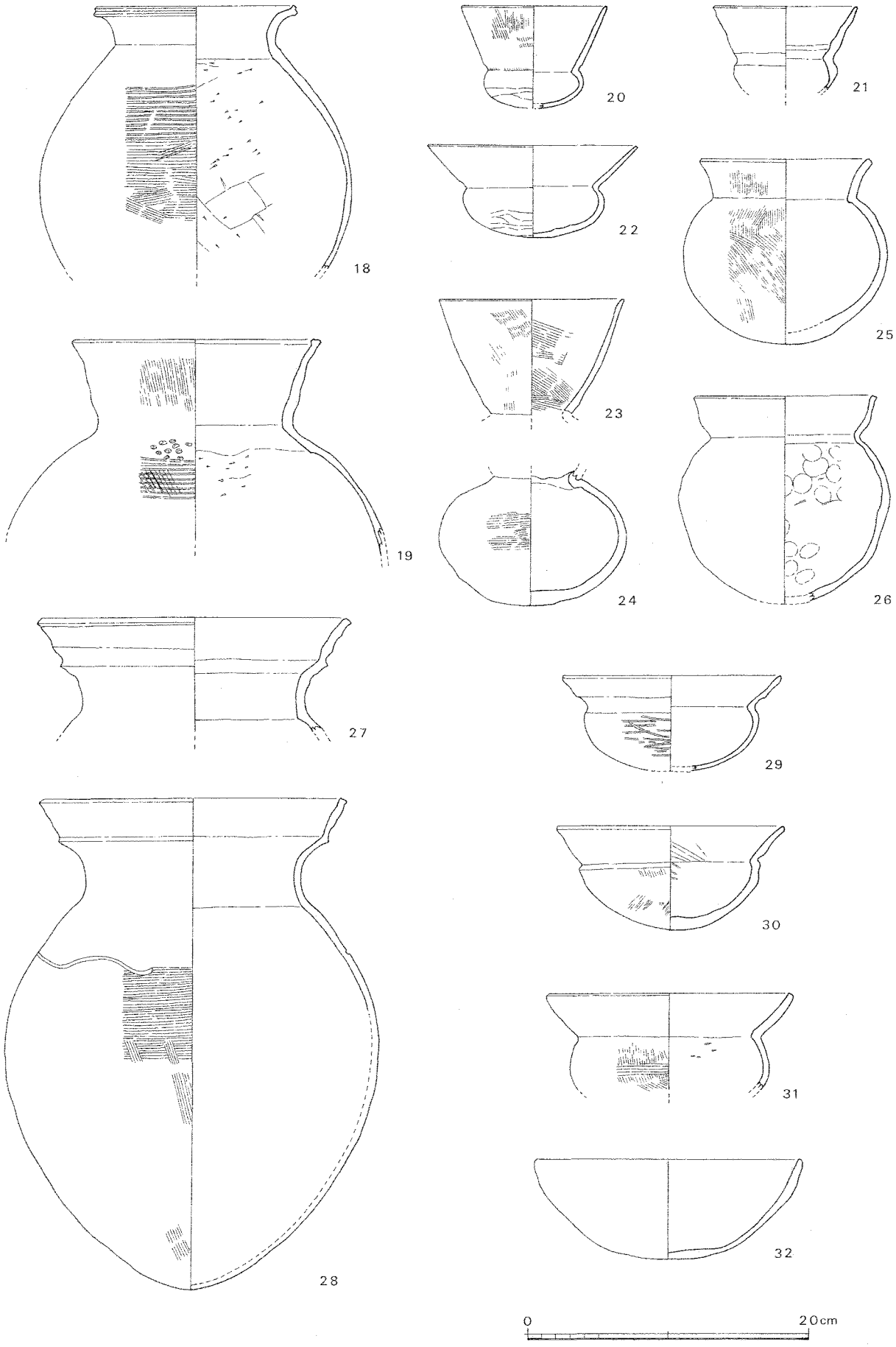


第33図　1号濠出土土器③（1／4）

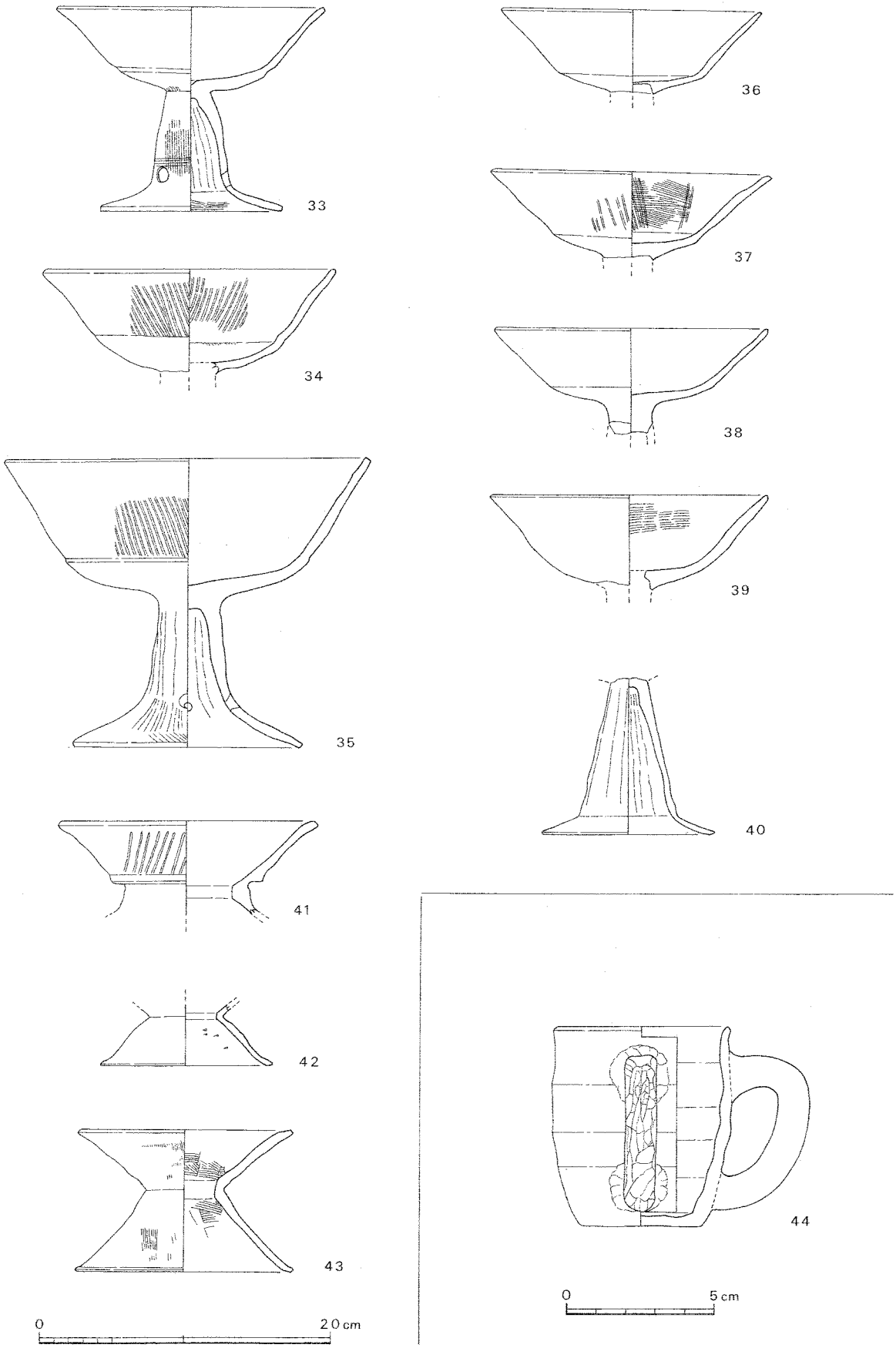


第34図　2号濠出土土器①（1／4）

第35図　2号濠出土土器②（1／4）



第36図　2号濠出土土器③（1／4）



第37図　2号濠出土土器④（1／2，1／4）

ナデ消しされている。41が灰黄色，42が浅黄橙色，43が浅黄褐色の色調で，胎土に41が石英・長石・赤色砂・角閃石・金雲母，42が石英・長石・赤色砂・金雲母，43が石英・長石を含む。44は小形ジョッキ形の陶質土器である。把手はミガキ状に仕上げている。以上の2号濠出土土器は，柳田康雄氏編年[註1]のⅡb式～Ⅱc式に相当する資料で，濠を埋める前に一括投棄されたものであろう。

⑤3号濠出土土器（第38図）

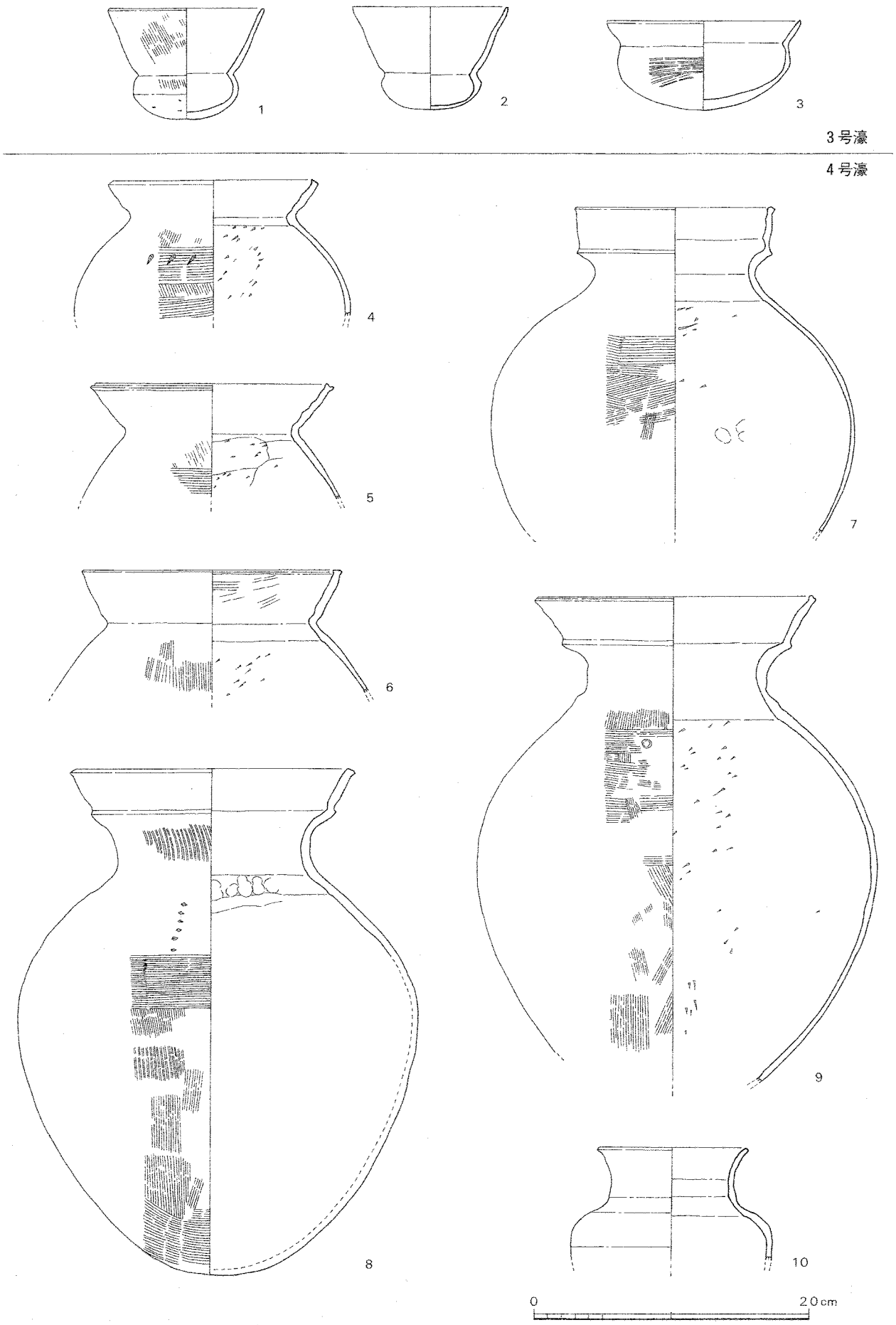
1～2は，小形坩である。1は胴部下半を，2は胴部内面がヘラケズリされている。3は「く」の字形口縁の浅鉢である。色調は，1が橙色，2がにぶい黄橙色，3にぶい橙色を呈し，胎土に1が石英・長石，2・3が石英・長石・金雲母を含む。この他に布留式甕の破片が出土していて，柳田氏編年のⅡc式に相当する資料であろう。

⑥4号濠出土土器（第38図）

4～6は，布留式甕である。4は口縁端部を内上方に，5は外方に，摘みぎみにおさめ，6は上方を平坦におさめている。4の胴部上半に7個の刺突文を施している。色調は4がにぶい黄橙色，5が灰黄色，6が灰黄褐色を呈し，いずれも胎土に石英・長石・金雲母を含む。7～9は，山陰系の二重口縁壷である。いずれも胴部内面はヘラケズリされる。胴部上部に8は縦に6個の刺突文，竹管文を施している。10は陶質土器壷である。回転ナデ仕上げされる。以上の4号濠出土土器は，柳田氏編年のⅡb式～Ⅱc式に相当する資料であろう。

⑦2号溝出土土器（第39～41図）

1～29は，2号溝出土の土器である。1～5は鋤先形口縁の甕で，1～3は口縁下に三角突帯をめぐらす。3は口縁端部に6個の刻目を施す。色調は，1が褐灰色，2・3が橙色，4が灰褐色，5が灰黄褐色を呈し，胎土に1が石英・長石，2が石英・長石・赤色砂を含む他は，いずれも石英・長石・金雲母を含む。6・7は跳ね上げ口縁の甕である。6はにぶい橙色，7はにぶい黄橙色を呈し，胎土に6が石英・長石・赤色砂，7が石英・長石・金雲母を含む。8は「く」の字形口縁の甕で，ハケをナデ消して仕上げている。にぶい橙色の色調で，胎土に石英・長石を含む。9は鋤先形口縁の丹塗甕である。端部には刻目を施している。にぶい橙色の色調で，胎土に石英・長石・金雲母を含む。10はT字形の口縁が内傾する大甕である。器面はナデ仕上げされている。橙色の色調で，胎土に石英・長石を含む。11～20・23～25は壷である。11・12は丹塗の広口壷である。11は頸部に部分暗文が施される。11がにぶい橙色，12がにぶい黄橙色の色調で，胎土に11が石英・長石・金雲母，12が石英・長石・赤色砂・金雲母を含む。13～15は鋤先形口縁の広口壷である。15の口縁は内面に突出して蓋受状をなし，穿孔がみられる。13と15の口縁端部には刻目が施される。13が橙色，14が灰黄色，15が浅黄橙色の色調で，胎土にいずれも石英・長石・金雲母を含む。23～25は鋤先形口縁の大壷で，端部に刻目を施す。23・25が浅黄橙色，24が浅黄色を呈し，胎土に石英・長石・金雲母を含む。16～18は丹塗の袋状口縁長頸壷である。17の頸部には暗文が施されている。16がにぶい橙色，17が灰白色，18がにぶい黄橙色の色調で，胎土に16が長石・金雲母を含む他は石英・長石・金雲母を含む。19は口縁下に突帯をもつ福岡平野以東の長頸壷である。灰白色の色調で，胎土に石英・長石を含む。20は瓢箪形の壷で，



第38図　3号濠・4号濠出土土器（1／4）

M字突帯が2条巡る。にぶい橙色の色調で，胎土に石英・長石・金雲母を含む。21・22は丹塗鉢である。21がにぶい黄橙色，22がにぶい橙色の色調で，胎土に石英・長石・金雲母を含む。26・27は蓋で，26は丹塗土器である。26の天井部には放射状にミガキが施されている。26はにぶい橙色，27は浅黄橙色の色調で，胎土に26が石英・長石・金雲母，27が長石・金雲母を含む。28・29は鋤先形口縁の丹塗高杯である。28がにぶい黄橙色，29が橙色の色調で，胎土に石英・長石・金雲母を含む。以上の2号溝出土土器は，弥生中期末～後期初頭の資料である。

⑧5号溝出土土器（第42・43図）

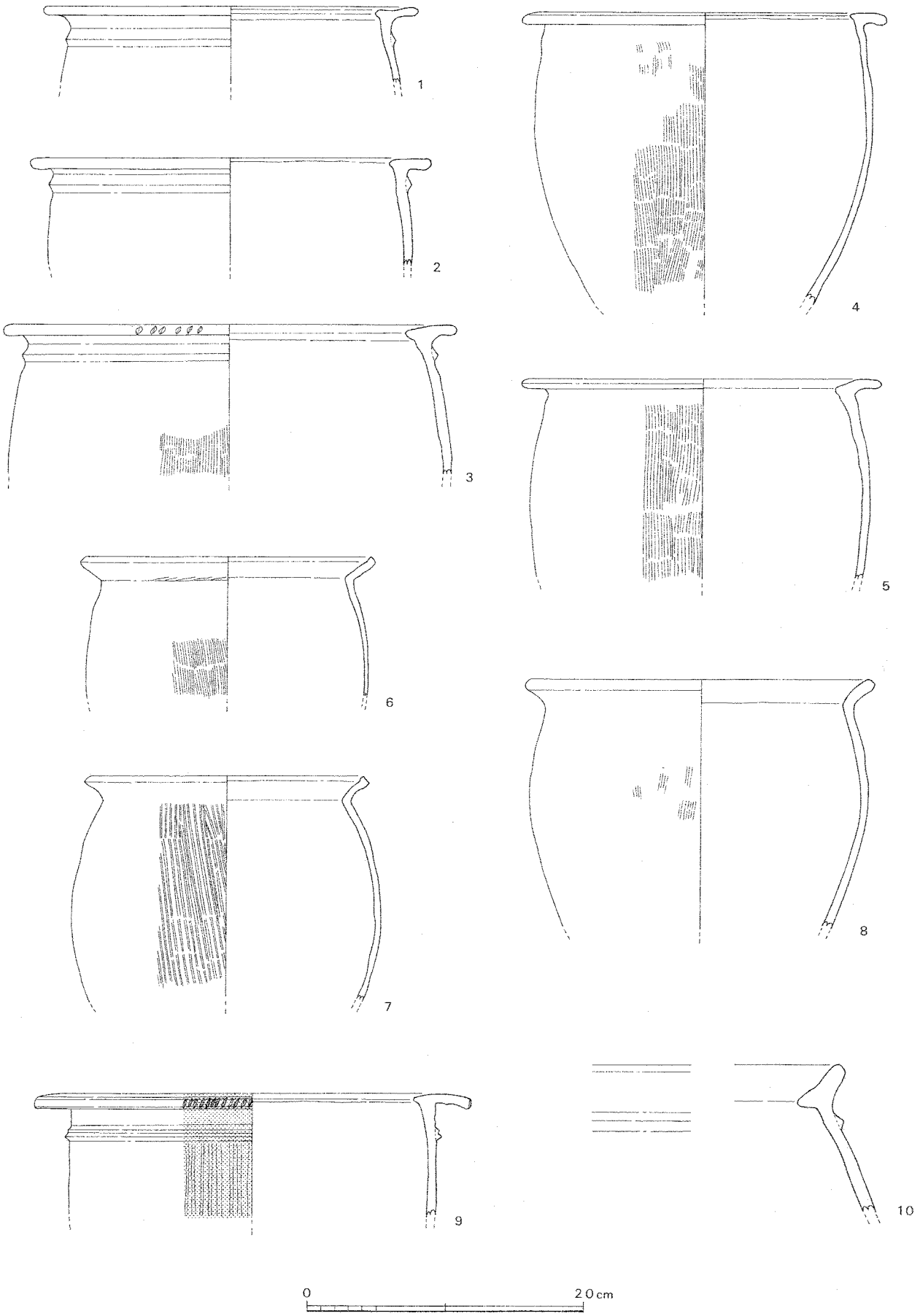
1～25は，5号溝出土の土器である。1・2は如意形口縁の甕で，1は胴部に1条沈線が入る。1がにぶい橙色，2が灰褐色の色調で，胎土に石英・長石・金雲母を含む。3・4は断面三角形口縁の甕である。3がにぶい橙色，4が橙色の色調で，胎土に石英・長石・金雲母を含む。5～9は逆L字形口縁の甕で，6は端部に刻目を施し，6・9は胴部上半に三角突帯を貼りつける。5が灰褐色，6がにぶい橙色，7・8がにぶい黄橙色，灰白色の色調で，胎土に石英・長石・金雲母を含む。10・11は上底の台状になった胴部下半部片である。10が浅黄橙色，11がにぶい橙色の色調で，胎土に石英・長石・金雲母を含む。12は擬無文土器の甕である。逆L字形の口縁で，外方を平坦に仕上げている。にぶい褐色の色調で，胎土に石英・長石・金雲母を含む。13～15は単口縁の広口壷である。13が浅黄橙色，14が灰黄褐色，15がにぶい黄橙色の色調で，13が胎土に石英・長石・角閃石・金雲母，他が石英・長石・金雲母を含む。16～18は上部を肥厚した未発達の逆L字形口縁の広口壷である。16がにぶい黄橙色，17がにぶい橙色，18が浅黄橙色の色調で，胎土に石英・長石・金雲母を含む。19は無頸壷で，褐灰色を呈し，胎土に石英・長石を含む。20は口頸部が直立ぎみに立ち上がる壷で，ヨコミガキ調整される。無文土器系の壷であろう。にぶい黄橙色の色調で，胎土に石英・長石を含む。21・22は壷底部である。21が灰黄褐色，22が浅黄橙色の色調で，21が石英・長石・金雲母，22が石英・長石を含む。23は刻目をもつ口縁の鉢である。灰白色の色調で，胎土に石英・長石・金雲母を含む。24は筒形の器台である。にぶい黄橙色の色調で，胎土に石英・長石を含む。25は支脚で，にぶい黄橙色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石・金雲母を含む。以上の5号溝出土土器は，弥生前期末板付II b式～中期初頭城ノ越式の資料であろう。

⑨B区2号土壙出土土器（第44図）

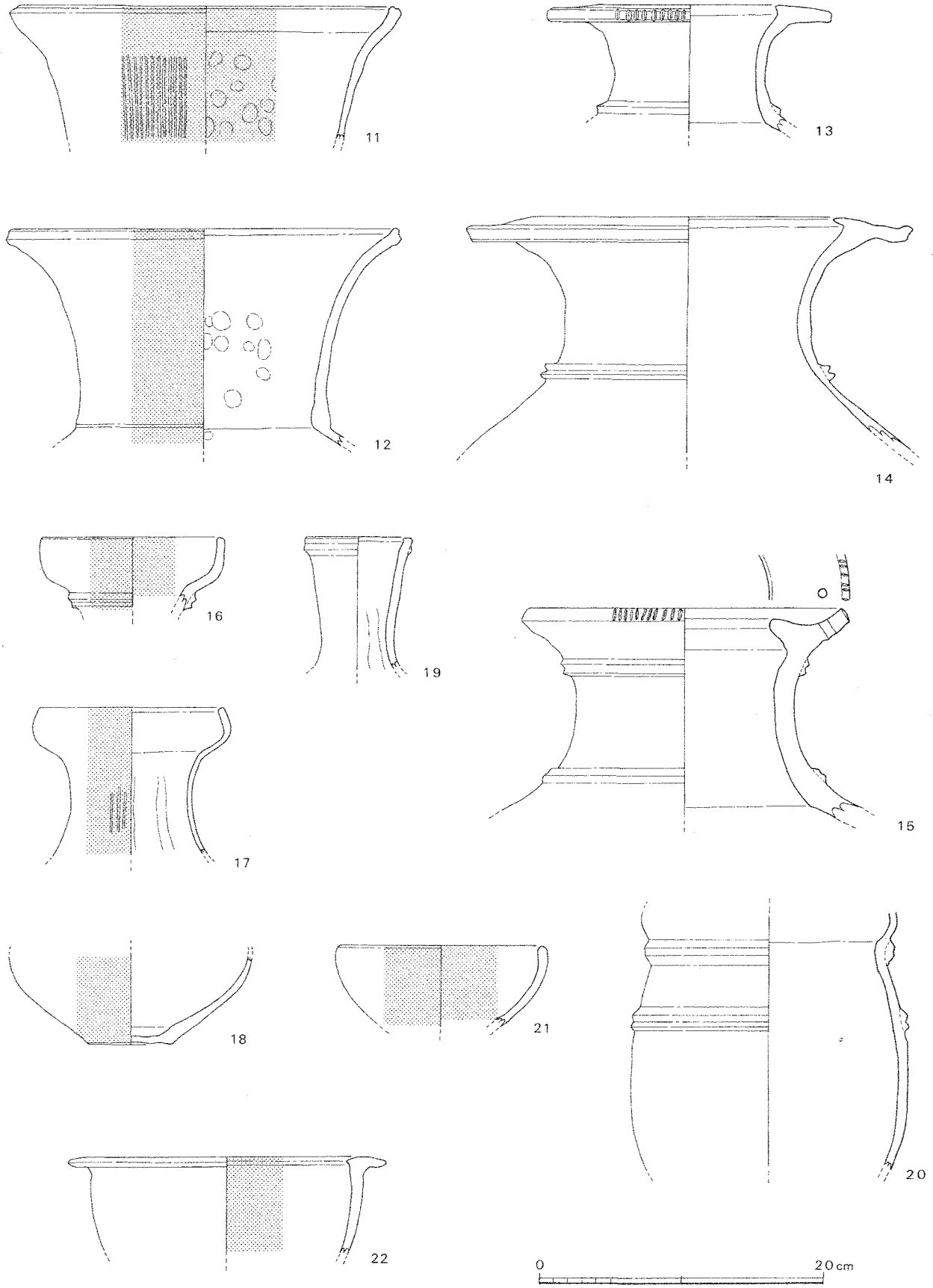
1～5は逆L字形口縁の甕である。1がにぶい橙色，2がにぶい黄褐色，3が橙色，4がにぶい褐色，5が灰黄褐色の色調で，胎土に1・2が石英・長石，3～5が石英・長石・金雲母を含む。6・7は上底の底部である。6が明赤褐色，7が淡赤褐色の色調で，胎土に6が石英・長石・金雲母，7が石英・長石を含む。8は上部を肥厚した未発達の逆L字形口縁の広口壷である。頸胴界に三角突帯を巡らす。灰黄褐色の色調で，胎土に石英・長石・金雲母を含む。9は壷胴下半部片である。にぶい橙色の色調で，胎土に石英・長石・金雲母を含む。以上の土器は中期初頭の城ノ越式の資料である。

⑩B区10号土壙出土土器（第46図）

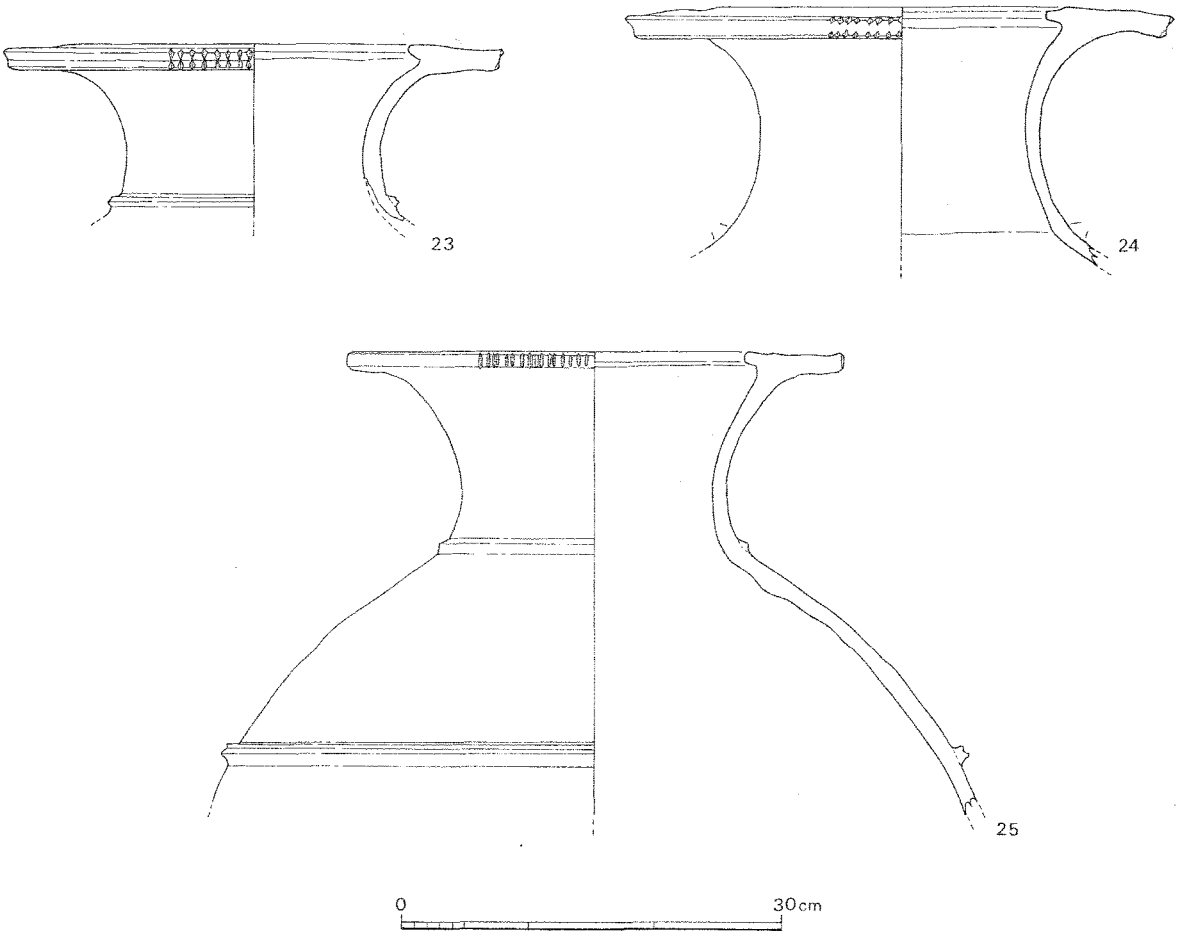
1～3は逆L字形口縁の甕である。3は口縁下に三角突帯を巡らす。1・2がにぶい橙色，3がに

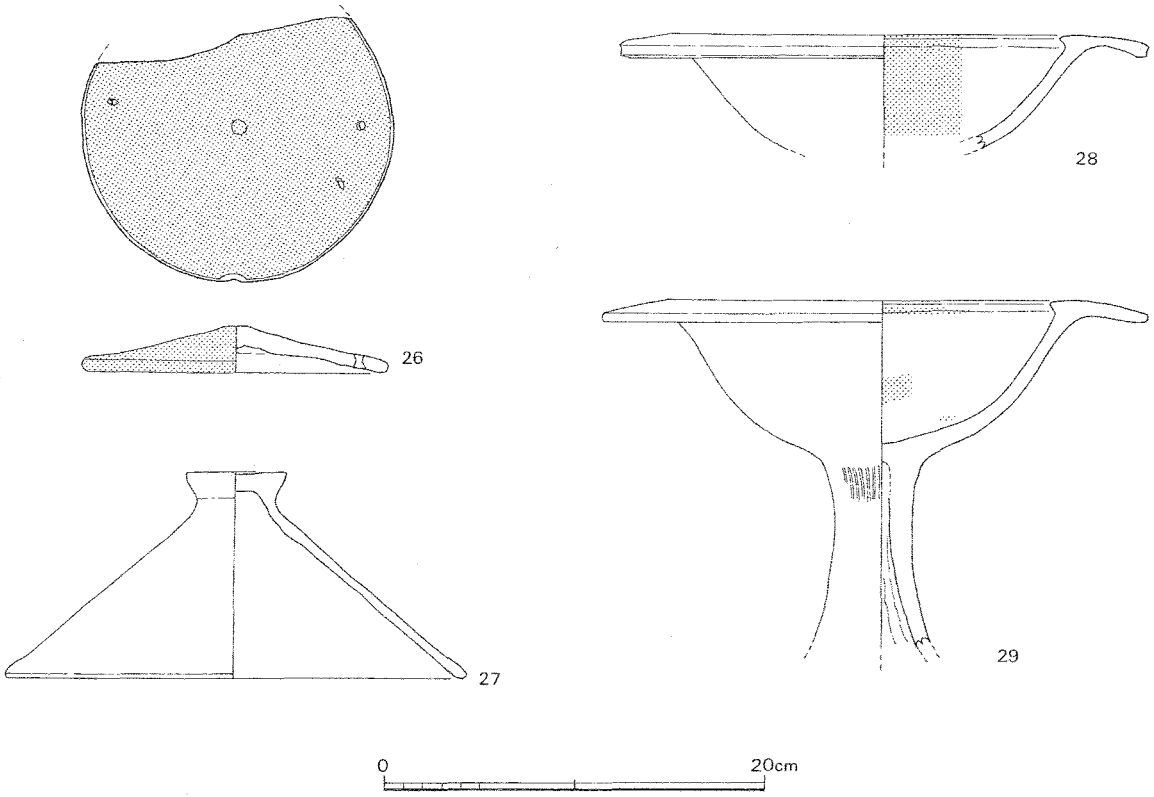


第39図　2号溝出土土器①（1／4）

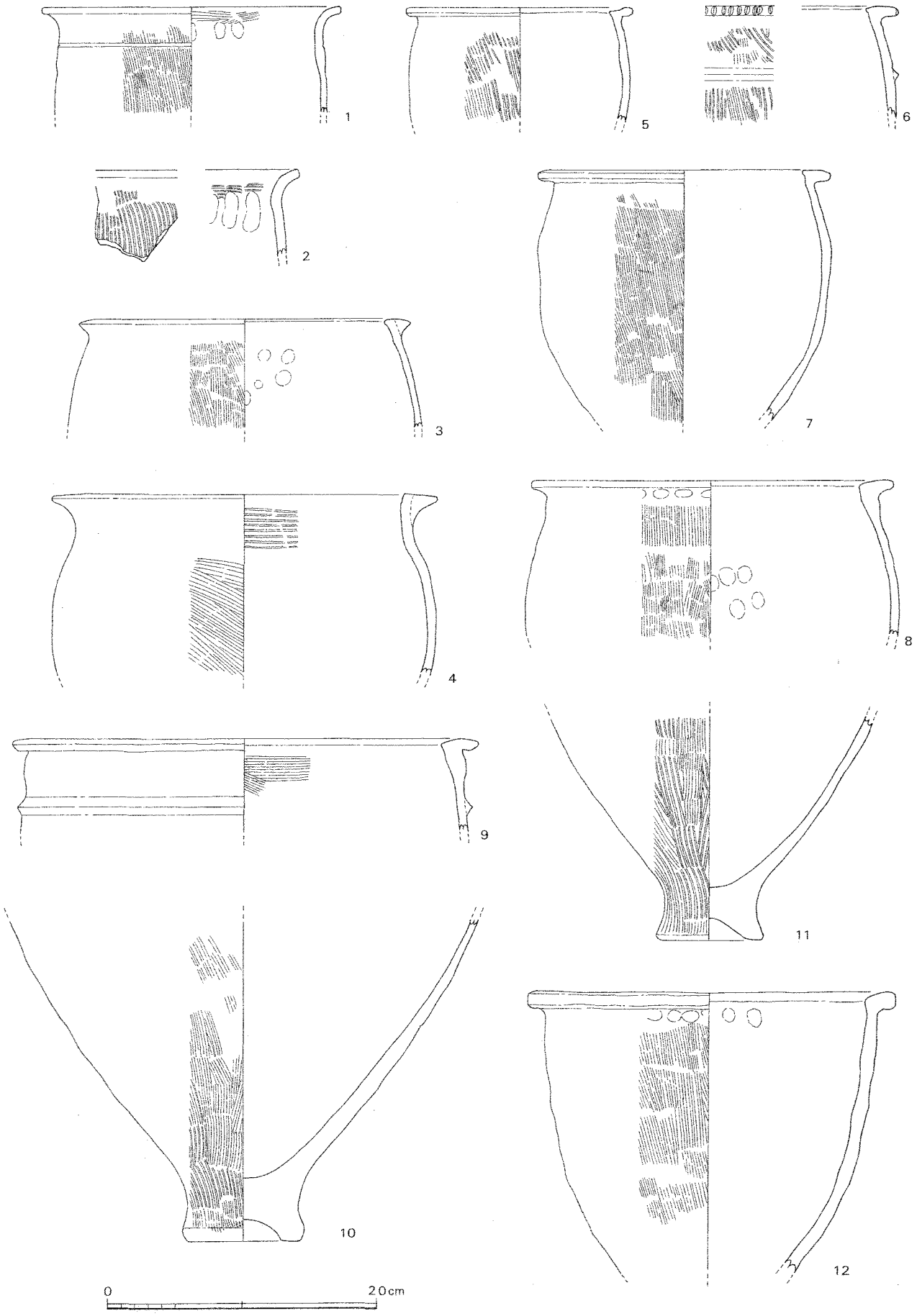


第40図　2号溝出土土器②（1／4）

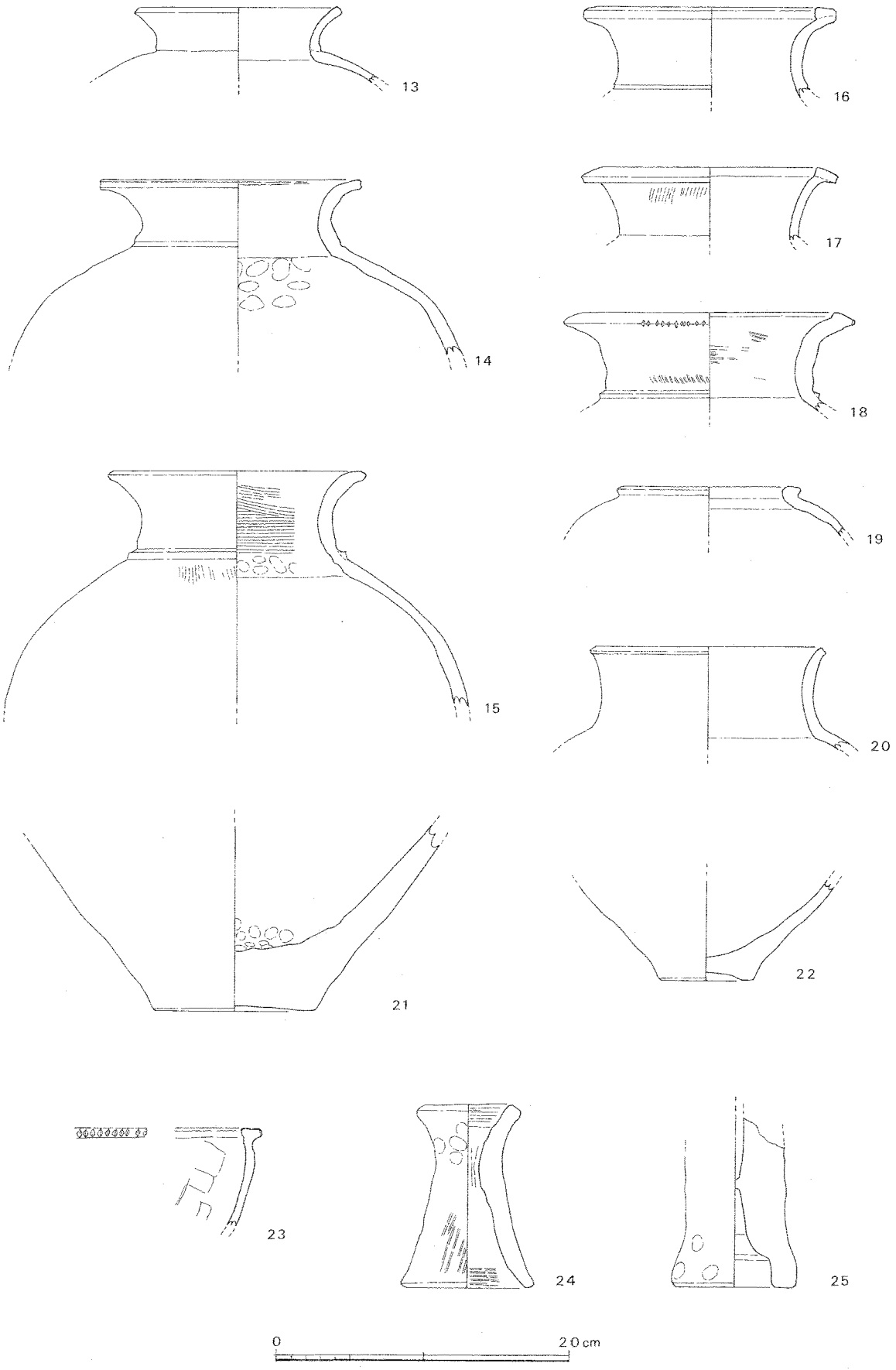




第41図　2号溝出土土器③（1／4，1／6）



第42図　5号溝出土土器①（1／4）



第43図　5号溝出土土器②（1／4）

ぶい黄橙色の色調で，胎土に1が石英・長石・金雲母，2が石英・長石，3が長石・金雲母を含む。4は未発達の鋤先形口縁の壷である。にぶい黄橙色の色調で，胎土に石英・長石・金雲母を含む。5は未発達の鋤先形口縁の高杯である。橙色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石を含む。6は筒形の器台である。にぶい黄橙色の色調で，胎土に石英・長石・金雲母を含む。以上の土器は，弥生中期中頃の須玖Ⅰ式新段階の資料である。

⑪B区17号土壙出土土器（第45図）

7～10は鋤先形口縁の甕で，口縁下に三角突帯をつける。7・9・10はにぶい黄橙色の色調で，胎土に7・8が石英・長石・金雲母，9が長石・金雲母，10が石英・長石・赤色砂・金雲母を含む。11は袋状口縁壷，12は鋤先形口縁壷でいずれも丹塗土器である。11がにぶい橙色，12が浅黄橙色の色調で，胎土に11が石英・長石，12が石英・長石・金雲母を含む。13・14は丹塗高杯である。13は上半に暗文を施している。13が橙色，14が浅黄橙色の色調で，胎土に13が石英・長石，14が石英・長石・金雲母を含む。以上の土器は，弥生中期末の須玖Ⅱ式新段階の資料である。

⑫E区1号土壙出土土器（第46図）

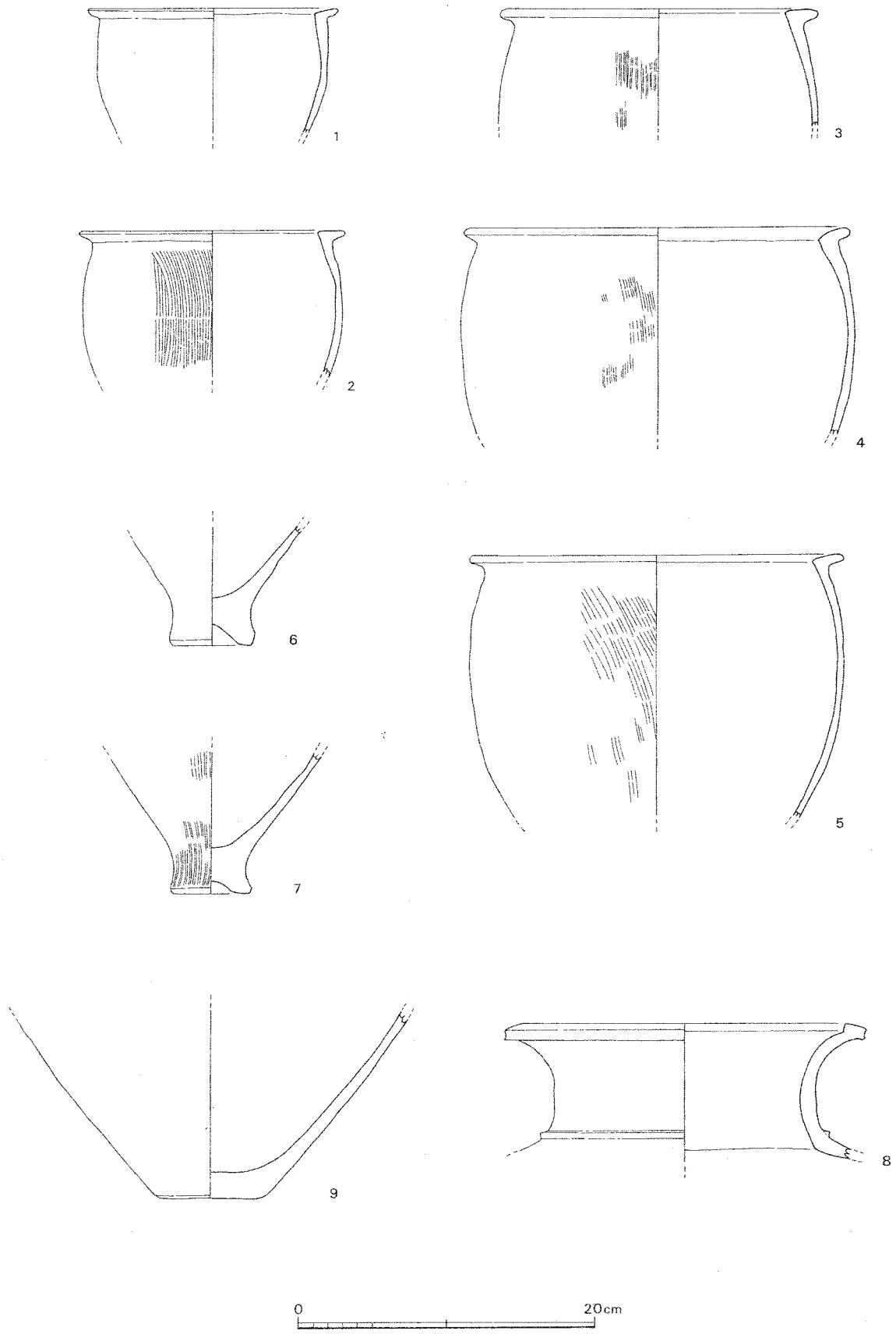
1～4は，E区1号土壙出土の土器である。1は甕下半部である。にぶい黄橙色の色調で，胎土に石英・長石・金雲母を含む。2は椀形の丹塗鉢である。外面上半はヨコミガキされる。にぶい橙色の色調で，胎土に石英・長石・金雲母を含む。3は鋤先形口縁の高杯である。にぶい橙色の胎土に石英・長石・金雲母を含む。4は楽浪系の滑石混入土器である。上方外方を平坦におさめた玉縁をもつ深鉢である。褐灰色の色調で，滑石を多く混入する。以上の土器は，弥生中期末の須玖Ⅱ式新段階の資料である。

⑬E区11号土壙出土土器（第46図）

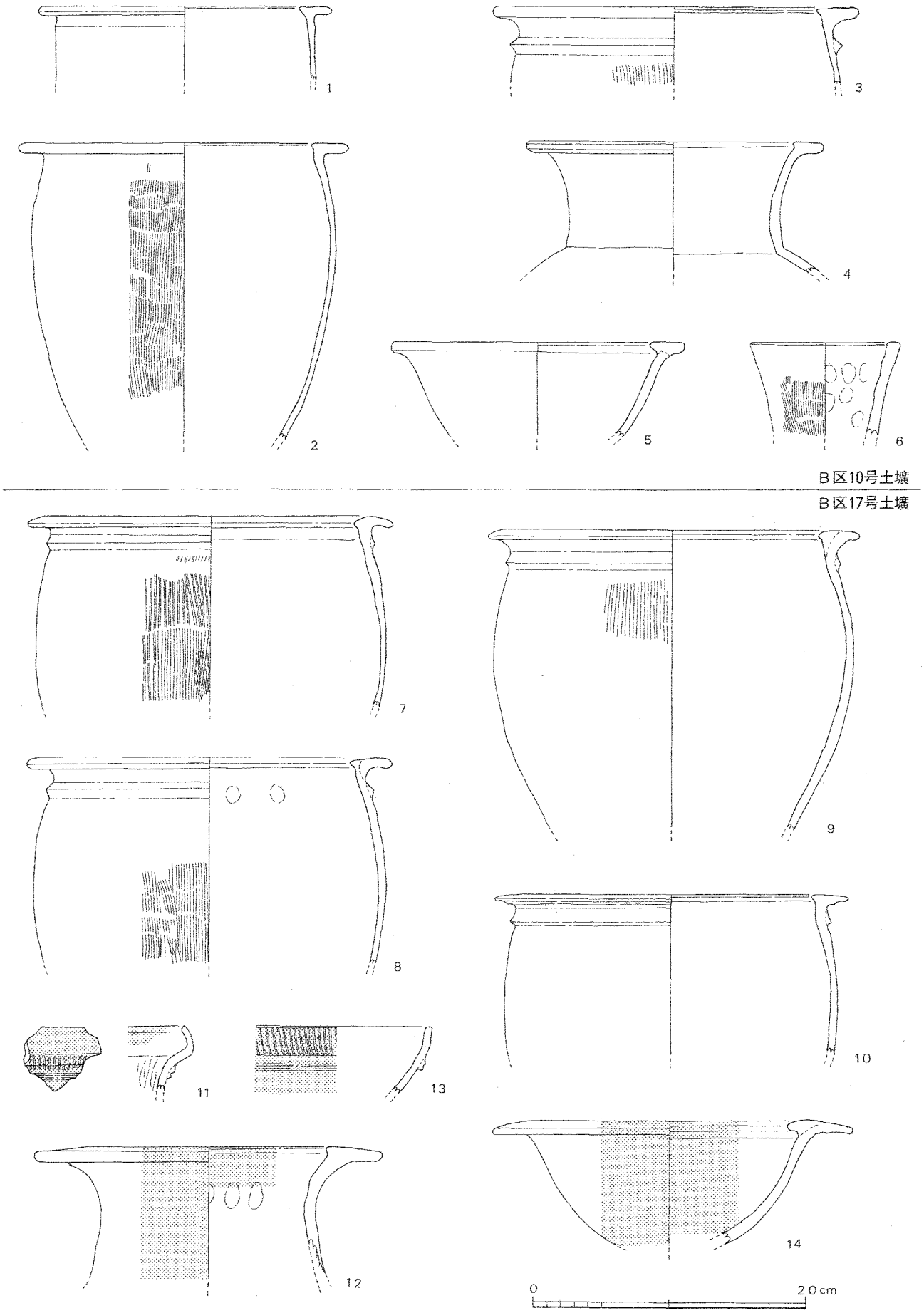
5～8は甕である。5・6は鋤先形口縁の甕で，6は口縁下に三角突帯をもつ。5がにぶい橙色，6が橙色の色調で，いずれも胎土に石英・長石・金雲母を含む。7・8は甕底部で，8は胴下端でくびれをもつ福岡平野以東の甕底部である。7が明赤褐色，8が橙色の色調で，胎土に7が石英・長石・赤色砂・金雲母，8が石英・長石を含む。9は屈曲口縁の丹塗鉢である。にぶい橙色の色調で，胎土に石英・長石・赤色砂・金雲母を含む。10・11は丹塗の袋状口縁長頸壷である。11の頸部には暗文が入る。10が橙色，11がにぶい橙色の色調で，胎土に10が石英・長石，11が石英・長石・金雲母を含む。以上のE区11号土壙出土の土器は弥生中期後半～末の須玖Ⅱ式古段階～新段階の資料である。

⑭E区16号土壙出土土器（第47図）

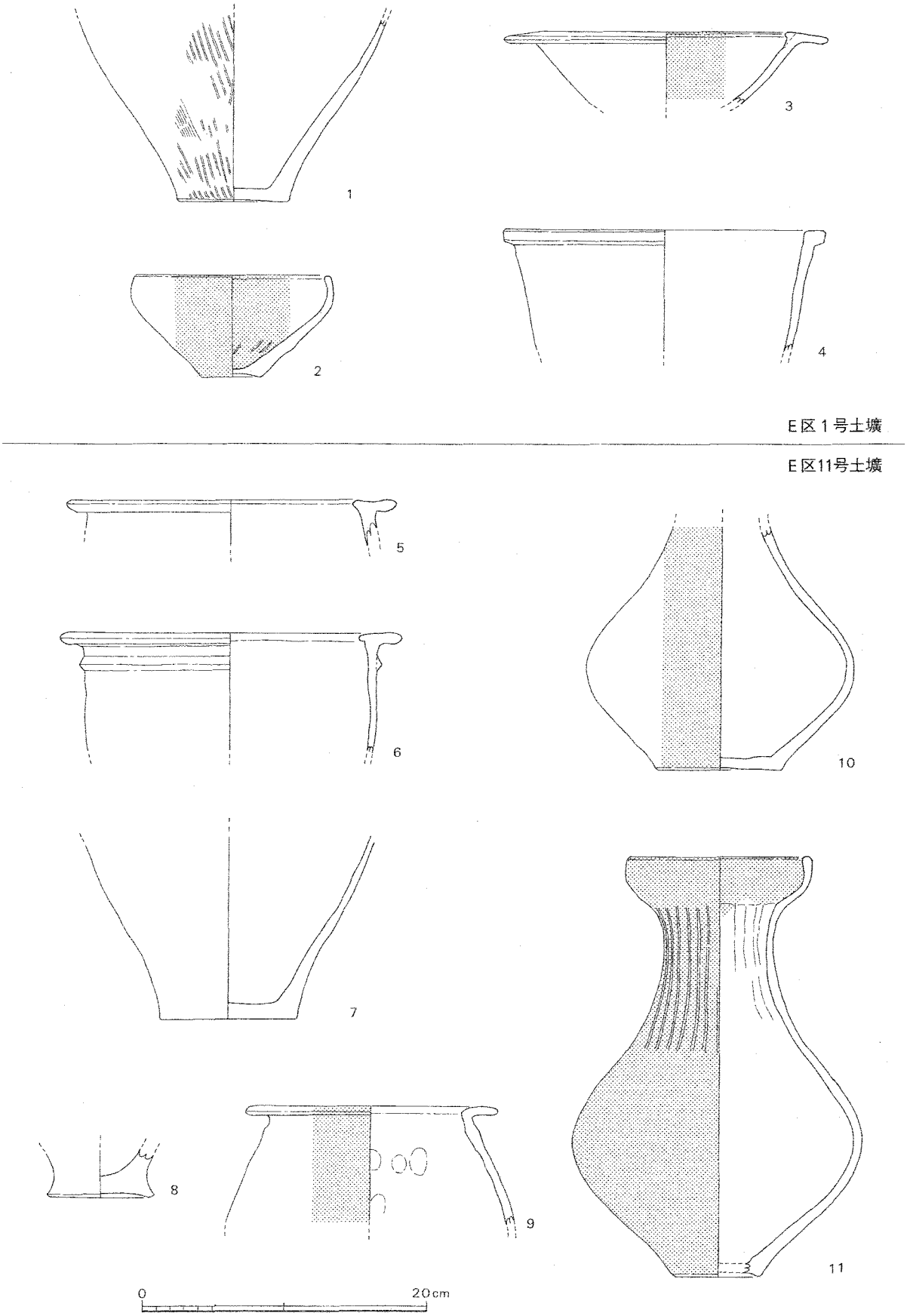
1は逆L字形口縁の甕で，胴部に2条の沈線が入る。2は上げ底の甕底である。1がにぶい橙色，2が橙色の色調で，いずれも胎土に石英・長石を含む。3～5は壷である。3は上部を肥厚した未発達の鋤先形口縁の壷で，頸胴界に2条の三角突帯が入る。4は平底の底部で，外面はタテミガキされる。5は，胴上半に最大径をもつ壷で，上半がヨコミガキされる。3が淡赤橙色，4が灰白色，5がにぶい橙色を呈し，いずれも胎土に石英・長石・金雲母を含む。6は牛角把手をもつ無文土器系壷である。外面は平滑な仕上げがなされ，沈線が1条めぐる。黒色（部分的に灰白色）を呈し，胎土に石



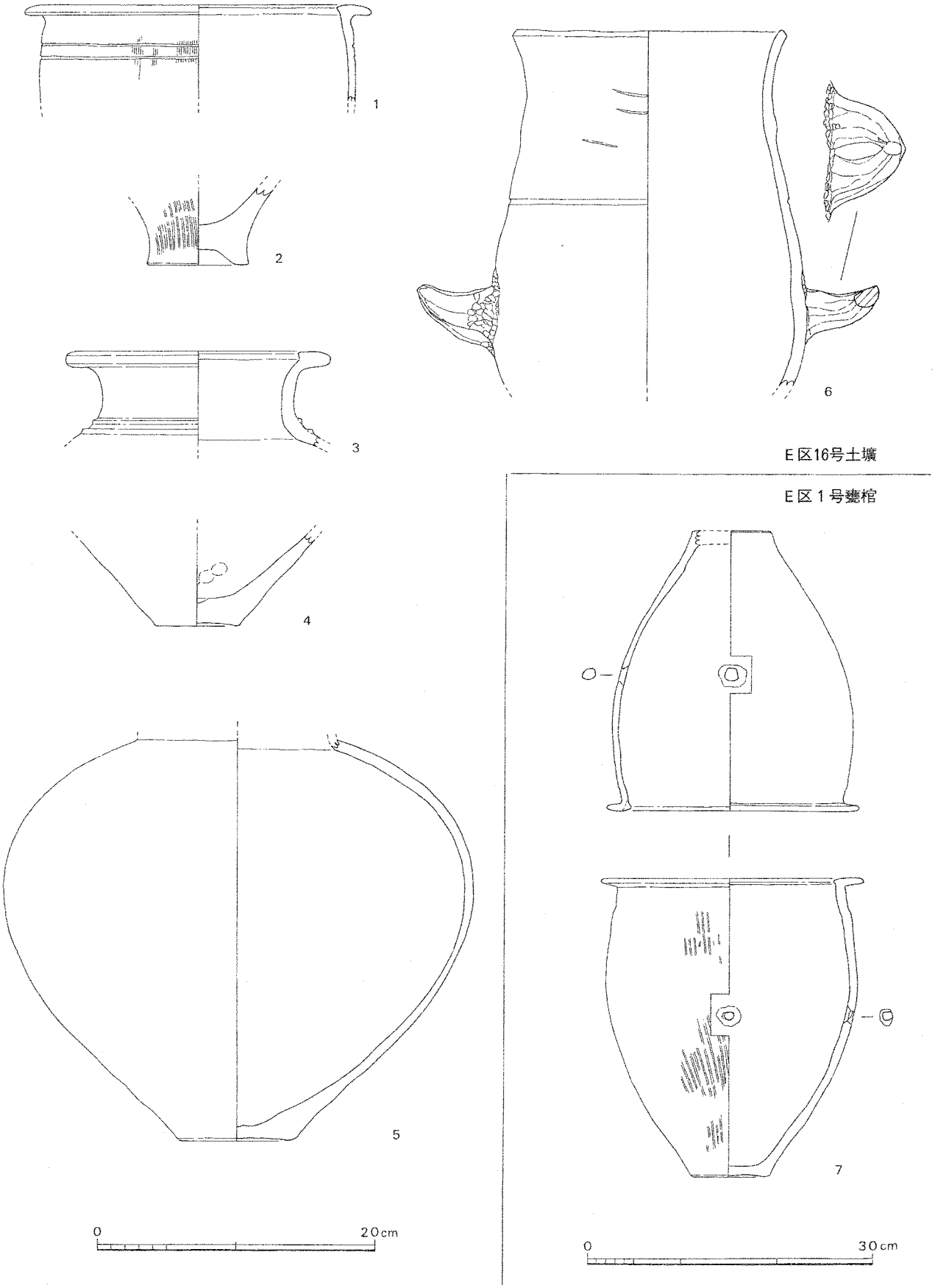
第44図　B区２号土壙出土土器（１／４）



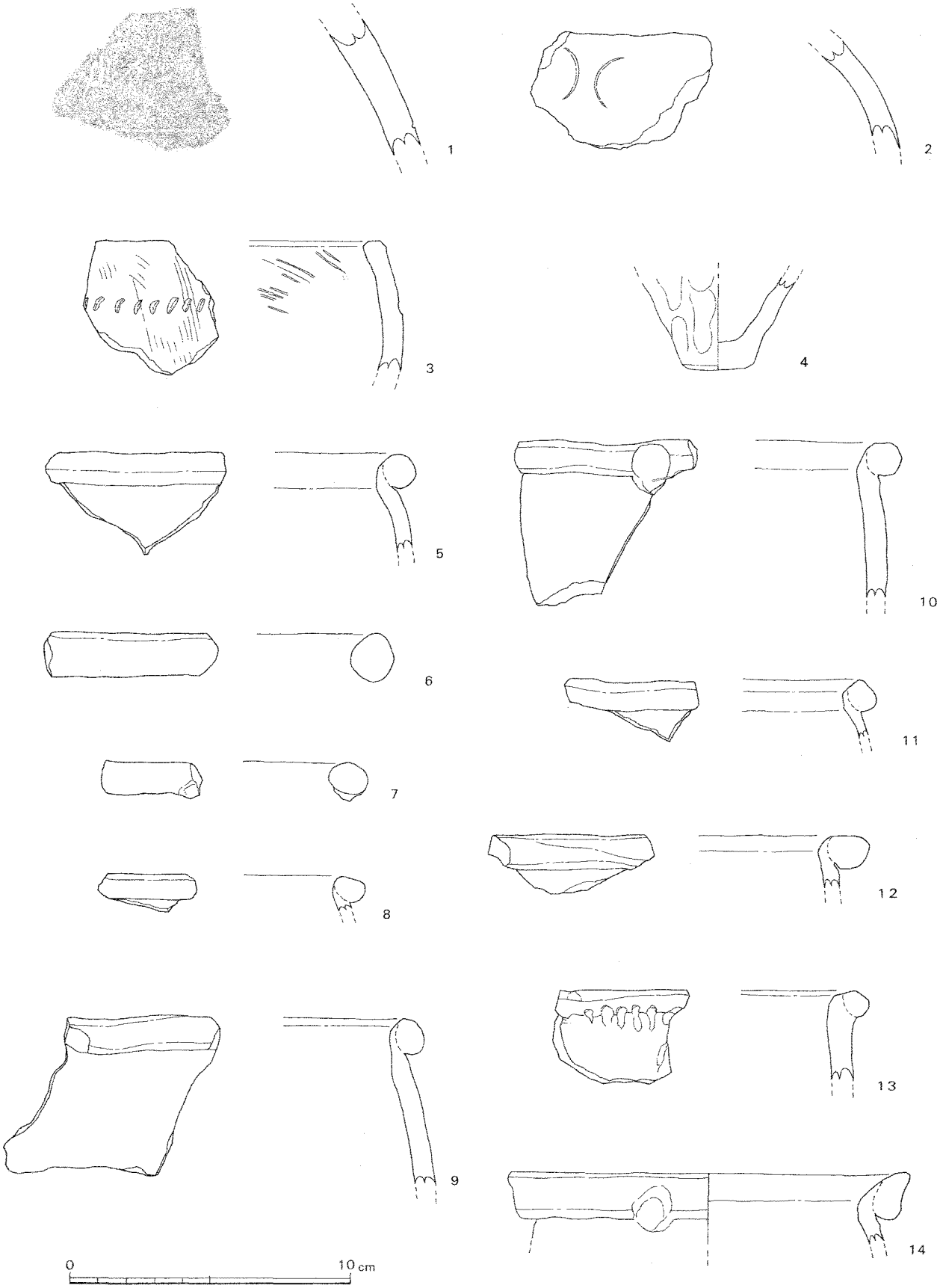
第45図　B区10号・17号土壙出土土器（1／4）



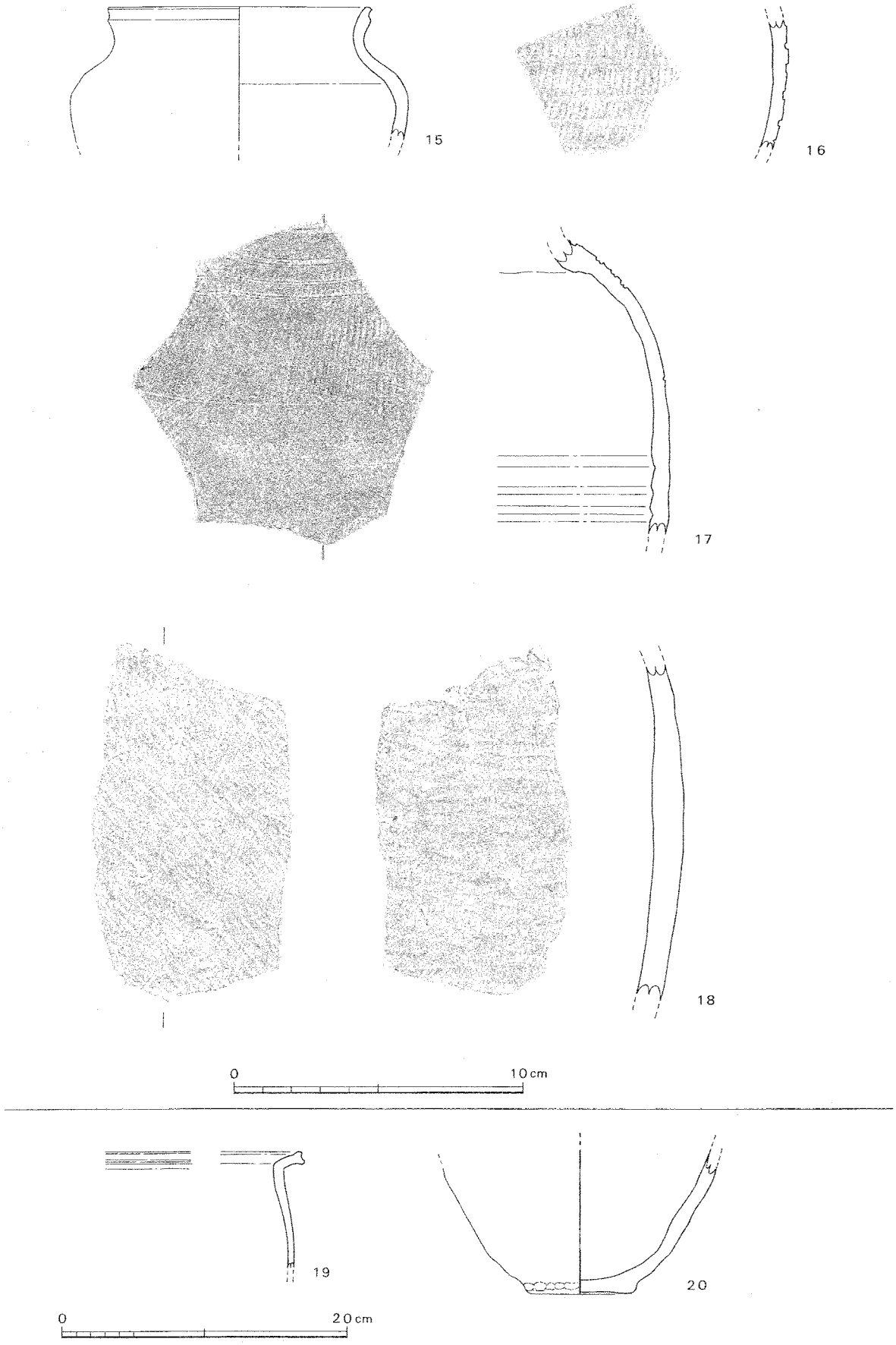
第46図　E区１号・11号土壙出土土器（１／４）



第47図　E区16号土壙出土土器（1／4），E区1号甕棺（1／6）



第48図　朝鮮半島系土器・その他の土器①（1／2）



第49図　朝鮮半島系土器・その他の土器②（1／2，1／4）

英・長石・黒褐色砂を含む。以上の土器は弥生中期初頭～前葉の城ノ越式と須玖Ⅰ式古段階の資料である。

⑮Ｅ区１号甕棺（第47図）

７はＥ区１号甕棺で，鋤先形口縁の甕を組み合わせて合口甕棺とする。上甕は，器面がナデ仕上げされ，胴部中央に焼成後の穿孔がみられる。下甕は，外面がハケ調整され，胴部中央に焼成後の穿孔がみられる。上甕がにぶい黄橙色，下甕が橙色を呈し，いずれも胎土に石英・長石・金雲母を含む。Ｅ区１号甕棺は，弥生中期中頃の須玖Ⅰ式新段階の甕をもちいている。

⑯その他の土器（第48・49図）

１はヘラ描きの復線山形文を施す壷胴部上半片である。灰白色の色調で，胎土に石英・長石・赤色砂を含む。２は円弧を対に向き合わせてヘラで描いた壷胴部上半片である。灰白色からにぶい黄橙色の色調で，胎土に石英・長石・黒色砂を含む。３は外面に連続刺突文を施す鉢片である。灰白色の色調で，胎土に砂岩質砂を含む。19は屈曲口縁で外方が凹線文状にくぼむもので，灰白色の色調で，胎土に石英・長石・金雲母を含む。これらは，中国地方の搬入品の可能性が高い資料である。

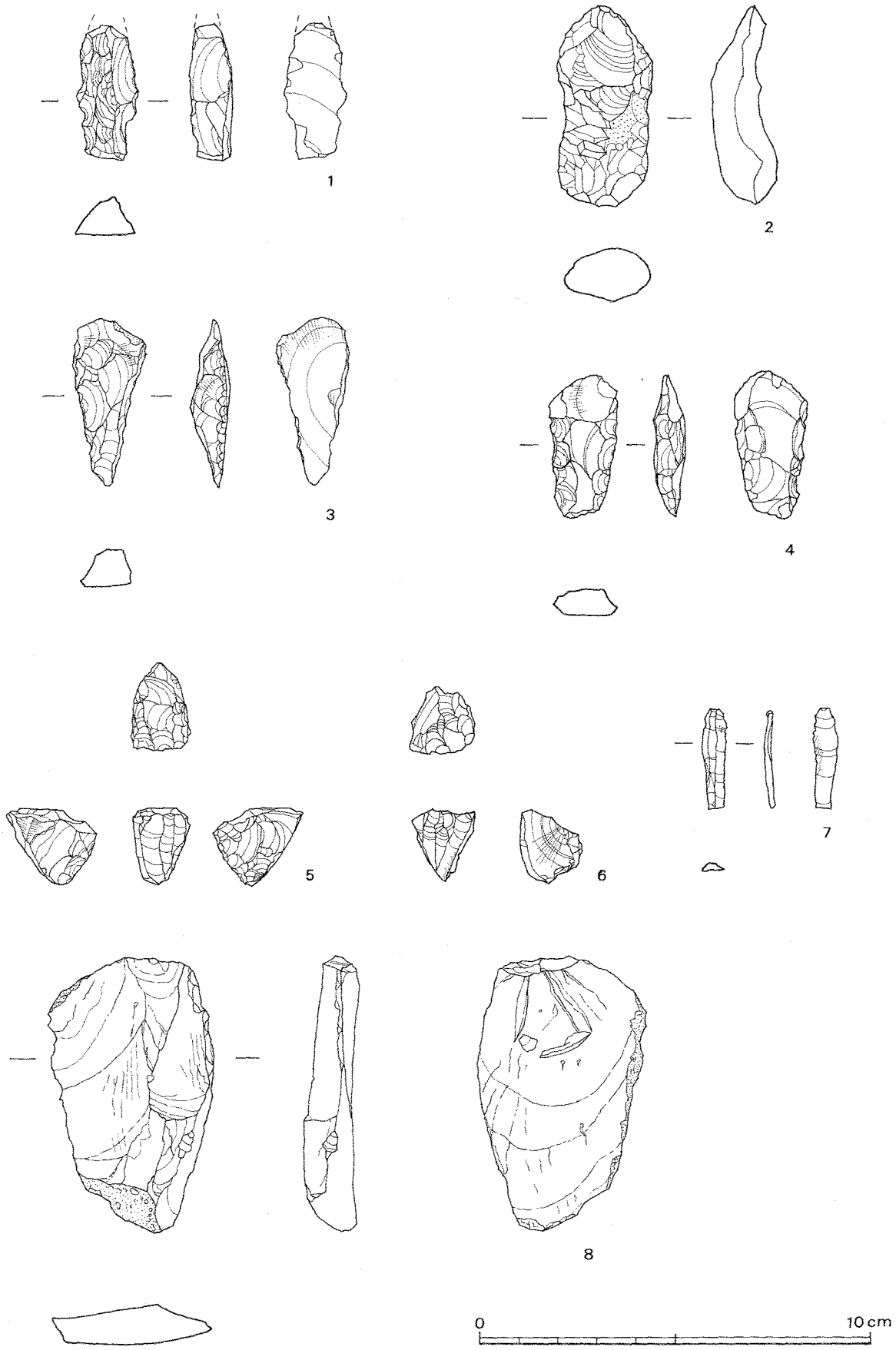
⑰朝鮮半島系土器（第48・49図）

４は手ずくねの鉢で，黄灰色の色調で，胎土に長石・黒色砂・金雲母を含む。Ｅ20区３層出土。５～14は粘土紐の玉縁をもつ無文土器系甕である。５が橙色，６・12がにぶい黄橙色，７・14がにぶい橙色，８が黒褐色，９が明赤灰色，10が灰黄褐色，11・13が褐灰色の色調で，胎土に５・９が石英・長石・角閃石・金雲母，６が石英・長石・角閃石・赤色砂・金雲母，７が石英・赤色砂，８が石英，10・12が胎土に石英・長石・金雲母，11が石英・長石，13が石英・金雲母を含む。５がＢ５区２層，６がＤ18区２層，７が２号濠２層，８がＢ23区２層，９が２号溝，10がＢ15区２層，11が５号溝，12が５号濠，13が２号濠２層，Ｅ５区３号落ち込み出土。20は無文土器系甕体下半部である。橙色の色調で，胎土に石英・長石・金雲母を含む。Ｅ区ピット112出土。18は瓦質壷体部片である。外面に平行タタキ文，内面に平行条線当て具痕がつく。１号濠１層出土。15～17は陶質土器である。15は口縁に凹線がめぐる小壷である。Ｃ２区２層出土。16は外面に縄席文タタキと沈線を施す壷胴部片である。器肉は橙色を呈する。Ｃ11区２層出土。17は上半にハケ目と沈線を施す壷胴部片である。Ｅ18区２層出土。同一個体の破片がＥ18区から２点ある。陶質土器はこの他に３号濠から６点，Ｅ21区から１点出土している。朝鮮半島系の土器・陶磁器は，今回調査で，楽浪系滑石混入土器同一個体２点，無文土器・擬無文土器系16点，瓦質土器１点，陶質土器15点の出土がみられた。

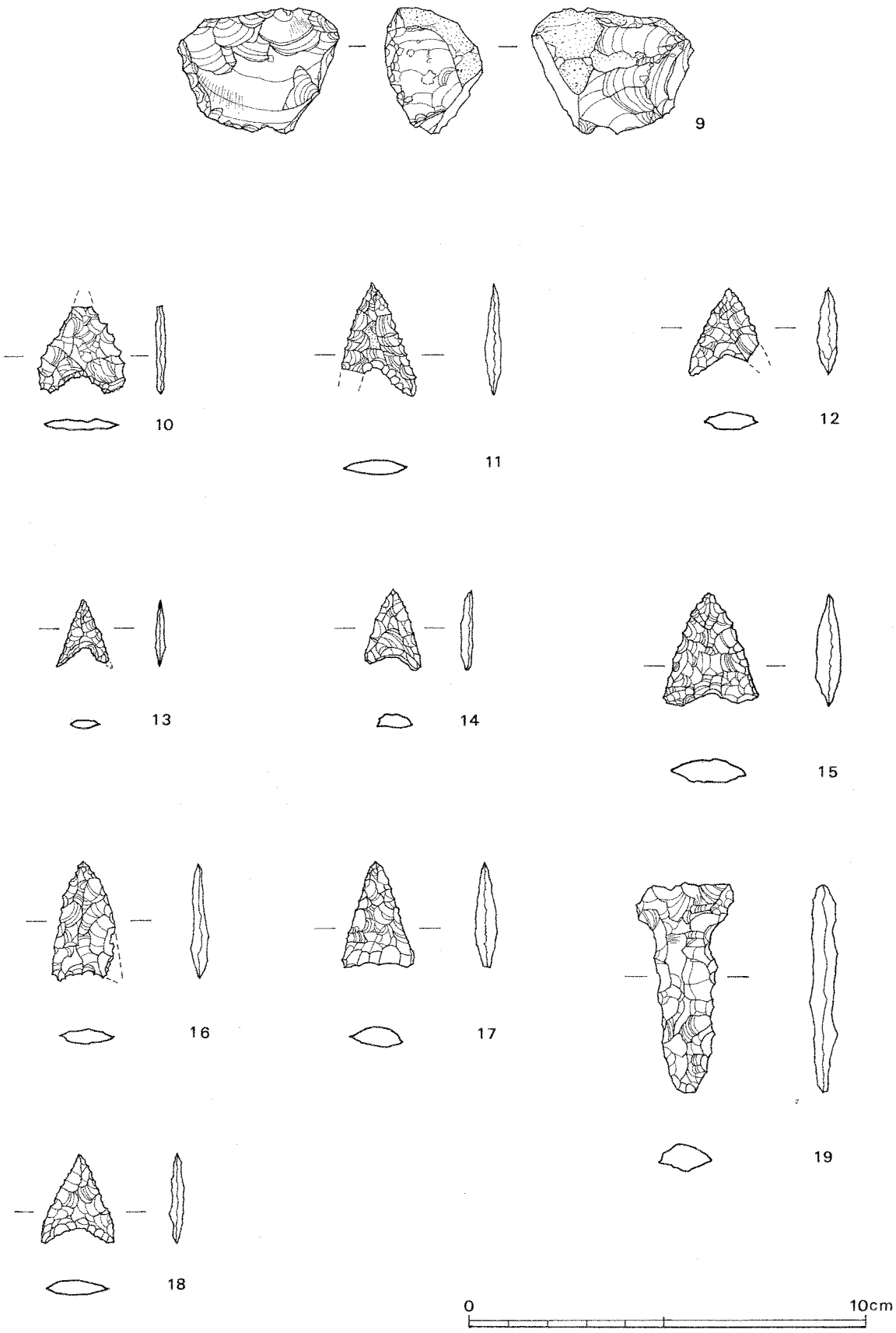
註１　柳田康雄「九州」『古墳時代の研究』６　雄山閣　1991

(2) 石　器（第50図～第60図）

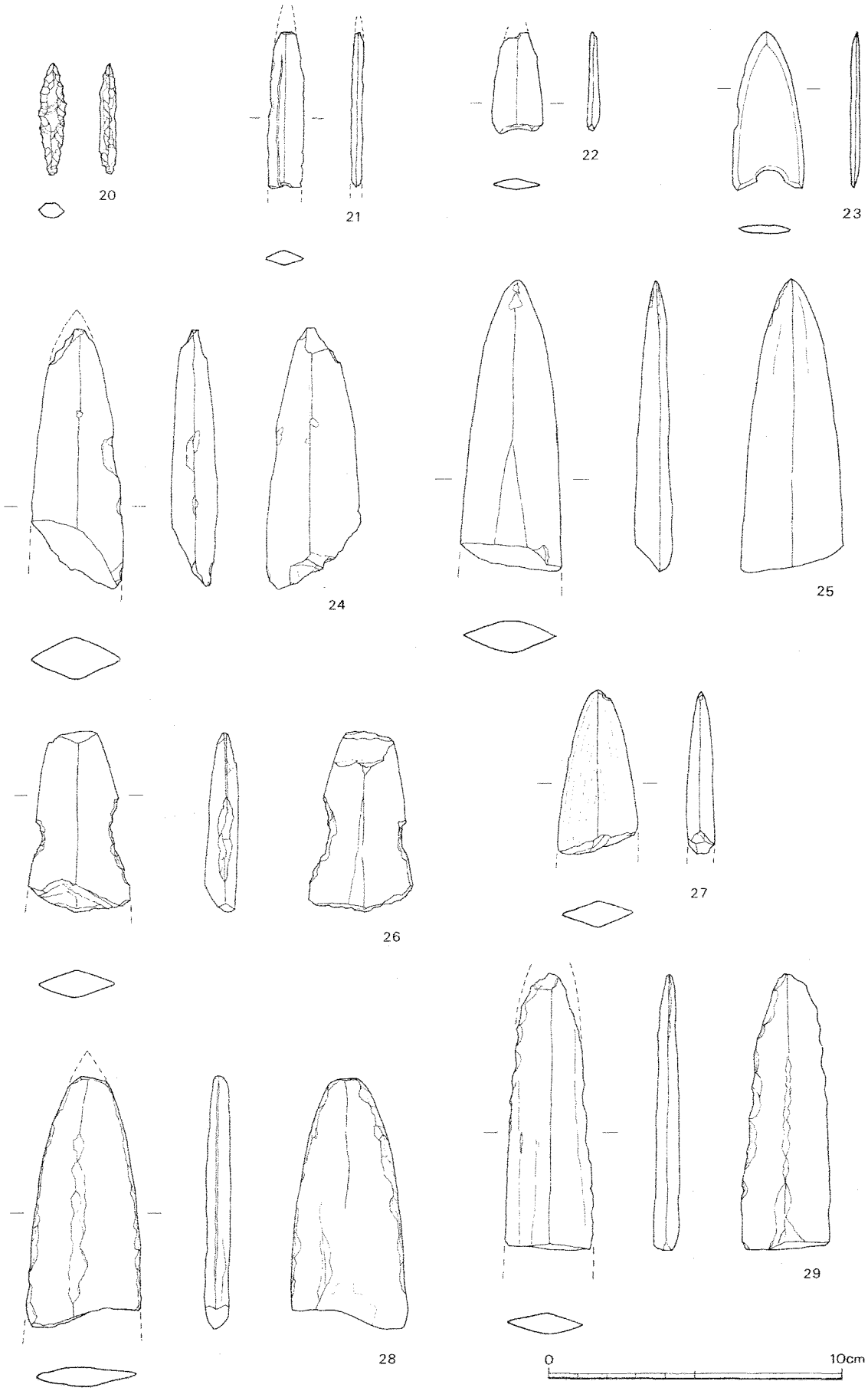
1～8は，旧石器時代から縄文時代の遺物と考えられる。1は黒曜石製の三稜形尖頭器で，C区3層出土。2は水晶製の尖頭器でB区41号pit出土。3，4は黒曜石製の台形様石器である。3はC区3層出土，4はC区2層出土。5，6は黒曜石製の細石核である。ともにC区2層出土。7は黒曜石製の細石刃で，C区1号濠1層出土。8はサヌカイト製サイドスクレイパーで，C区5層出土。側面に自然面を多く残している。9は弥生時代の石核と考えられる。A区1層出土。10～18は，黒曜石製の無茎打製石鏃である。10が5号溝，11と15がB区2層，12がB区9号土壙，13がD区1層，14が1号溝，16がD区2号土壙，17がB区3層，18がE区落込みから出土。18は中央部がやや黒っぽいものの全体的に灰白色をしており，佐世保市針尾島の産出と考えられる。19は黒曜石製の石錐で，T字形の形態をしている。9は有茎打製石鏃である。細かな筋が入ったサヌカイト製である。2gを測る。21は柳葉形磨製石鏃である。頁岩製で3gを測る。E区4層で出土。22・23は無茎磨製石鏃である。22は頁岩製で3gを測る。B区1層で出土。23は粘板岩製で5gを測る。B区2号土壙から出土。24～34は，磨製石剣である。24は福岡県東部から山口県にかけて分布する凝灰岩質頁岩，34が粘板岩を使用している以外は，頁岩を用いている。24はC区5層，25はE区落込み，26は5号溝，27は2号濠3層，28はE区落込み，29は3号溝，30は4号溝，31・32・34はB区2層，33はE区pitから出土。重量は，24が36.0g，25が38.4g，26が25.7g，27が16.0g，28が32.3g，29は24.1g，30は9.4g，31は43.4g，32は43.0g，33は43.7g，34は30.0gである。26は両側面に抉りを入れており，折れた後も石錘等に再利用したものと考えられる。また31は，刃部をきれいに面取りしているため，儀礼用として用いた可能性がある。35は，胡部や孔が無いため磨製石剣と考えられるが，断面等の形状などから磨製石戈の可能性もある。重さ77.4gを測り，C区3層から出土。36は無樋型磨製石戈である。重さ50.0gを測り，1号溝から出土。37～44は石鑿である。全て粘板岩を使用。37はB区2号土壙，38と40は5号溝，39は2号濠3層，41はD区2層，42と44はB区2層，43はC区6層から出土。重さは37が13.7g，38が4.0g，39が15.1g，40が16.0g，41が11.5g，42が55.0g，43が20.0g，44が48.0gである。45は偏平片刃石斧である。粘板岩を素材とし，重さ120.0gを測る。B区6号土壙から出土。46～48は磨製石錘である。全て頁岩を使用。46はE区落込み，47はB区10号土壙，48はC区5層から出土。46は10.0g，47は20.0g，48は53.0gを測る。49は蛤刃石斧である。重さ786.0g，D区2層から出土。50は石斧の未製品である。製作中に折れたため廃棄されたものと考えられる。頁岩製，重さ60g，1号旧河道8層から出土。51は蛤刃石斧の未製品と考えられるが，完成前に製作を止め敲石として使用したようである。52は抉入方柱状石斧の未製品である。重さ100.0g，粘板岩を素材とし，C区5層から出土。53～56は石庖丁である。全て頁岩を使用。重さは53が27.4g，54が20.0g，55が31.6g，56が69.0gである。53と55はC区6層，54がA区pit内，56がE区落込みから出土。57～67は石庖丁である。素材は全て頁岩を使用。重量は57が107.0g，58が77.4g，59が60.0g，60が35.6g，61が20.0g，62が40.0g，63が20.0g，64が20.0g，65が40.0g，66が67.4g，67が40.0gである。57が2号溝3層，58と60が5号溝，59と67がC区6層，61がB区1層，62～66がC区5層から出土。68～76は



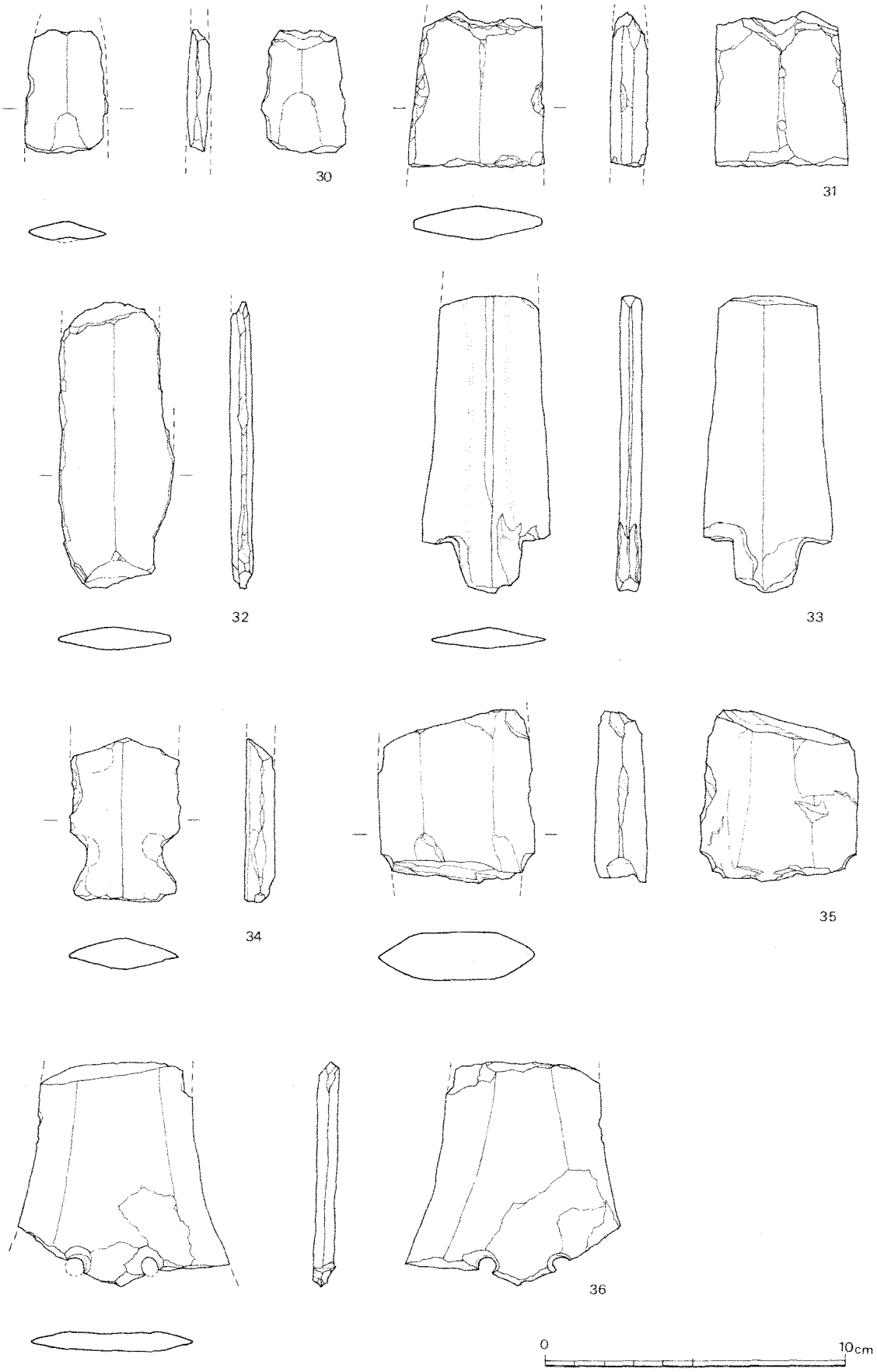
第50図　石器・石製品①（2／3）



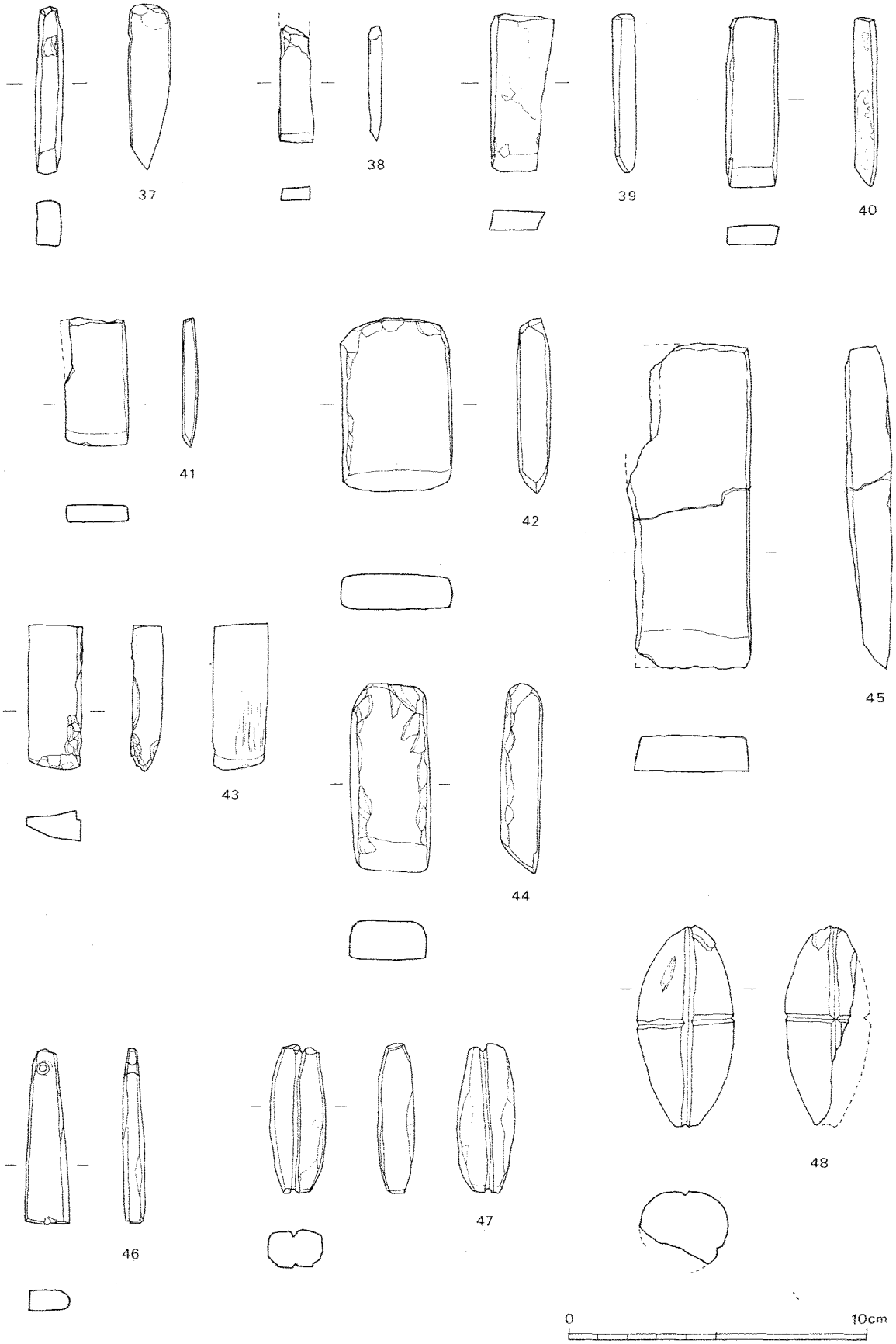
第51図　石器・石製品②（2／3）



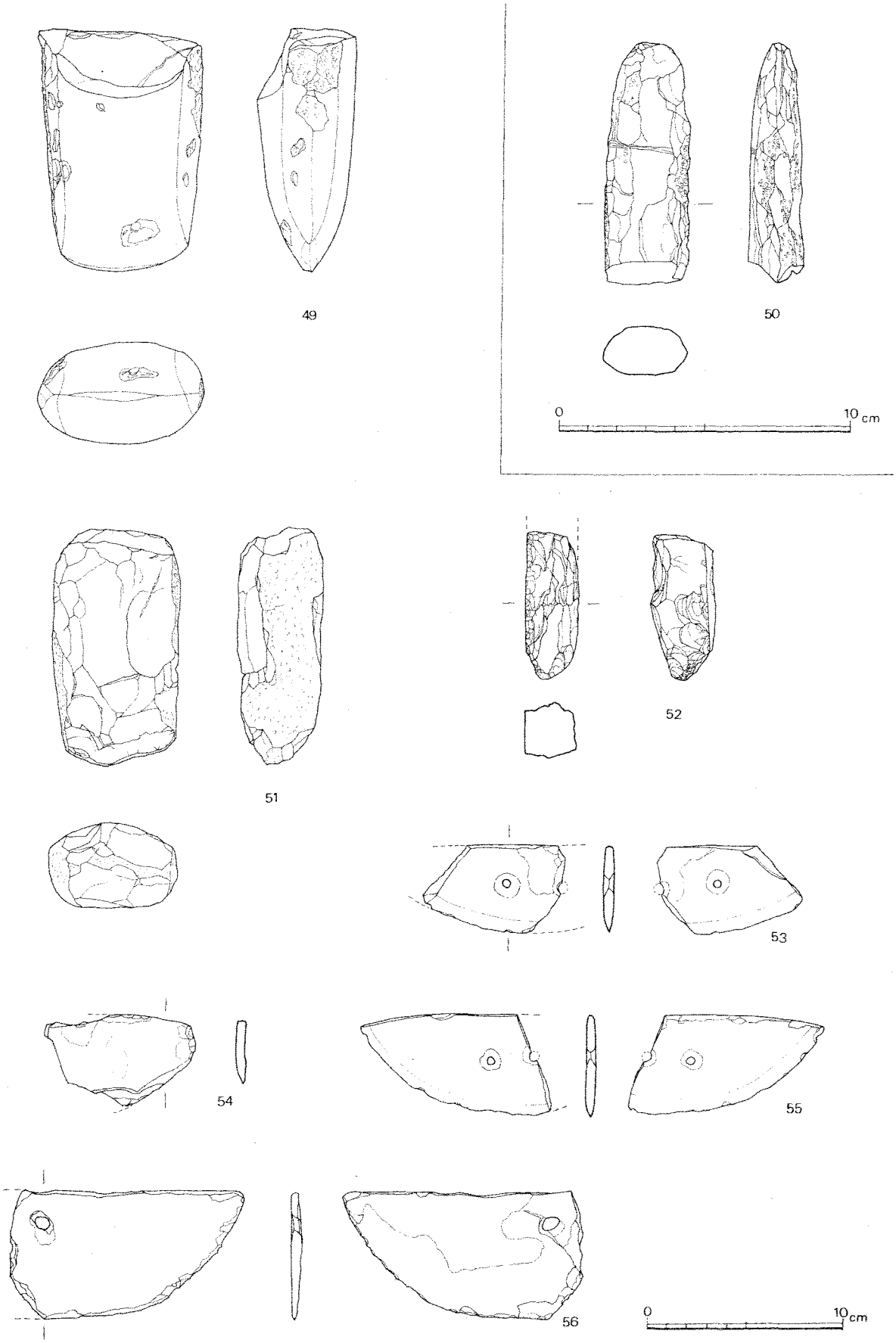
第52図　石器・石製品③（1／2）



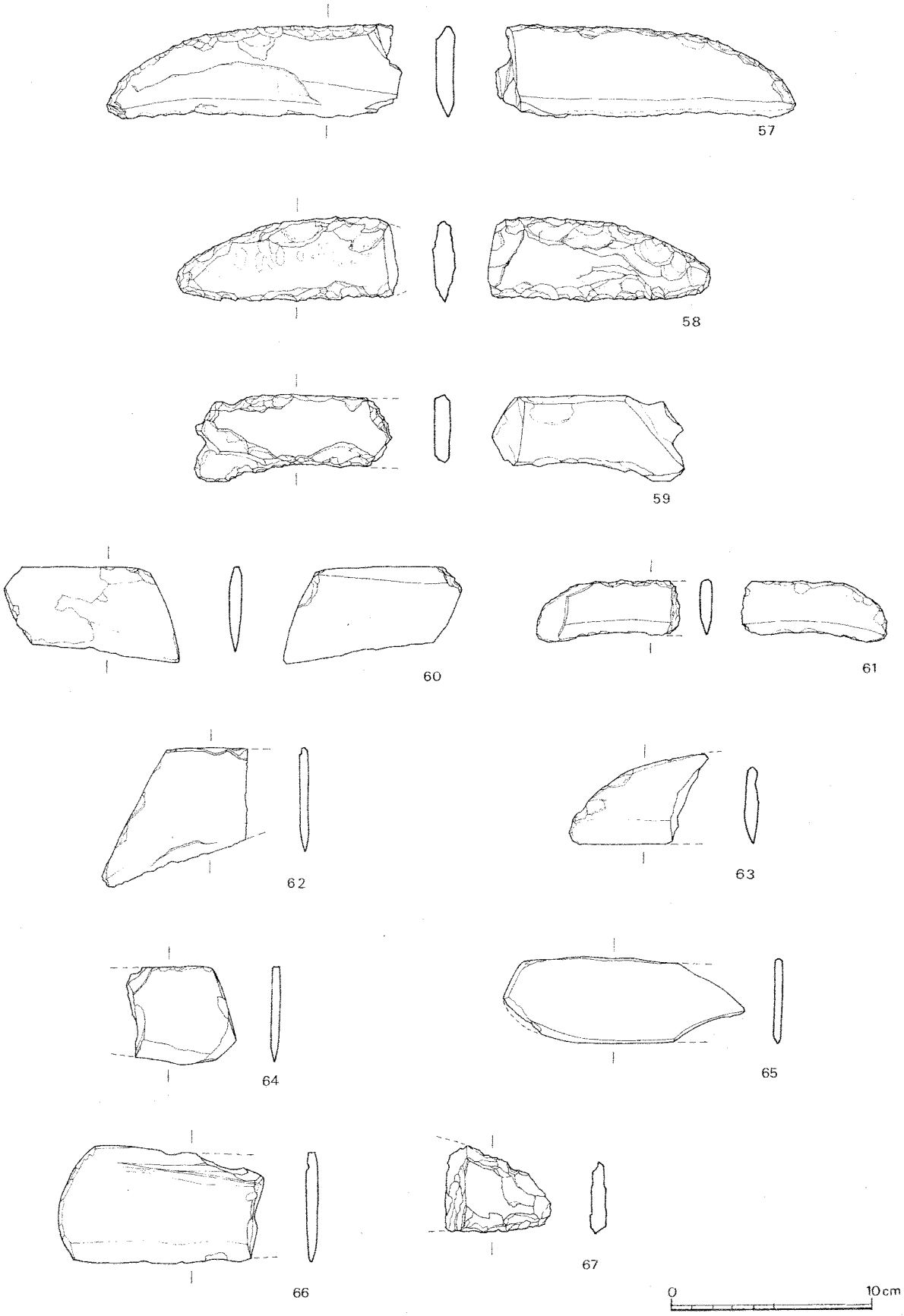
第53図　石器・石製品④（1／2）



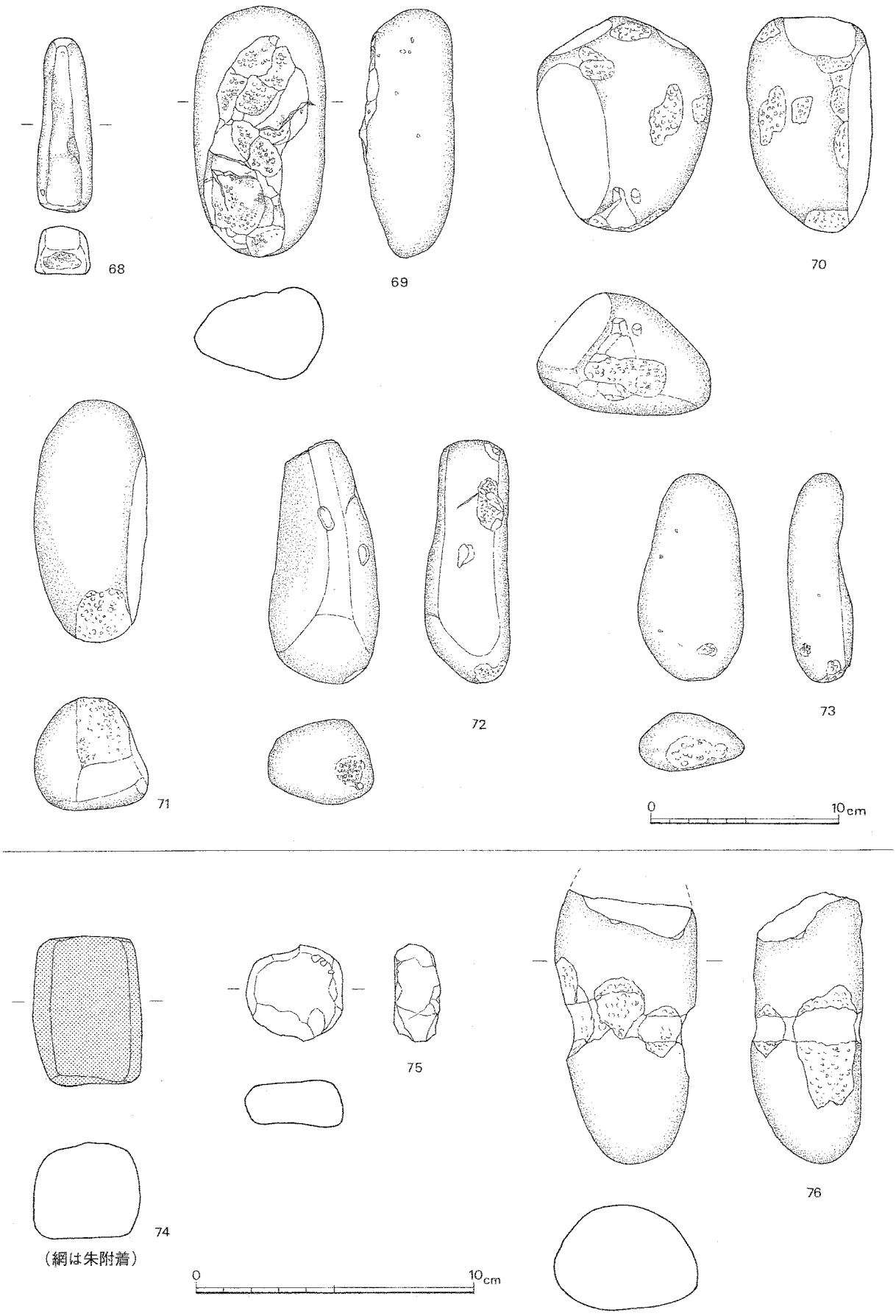
第54図　石器・石製品⑤（1／2）



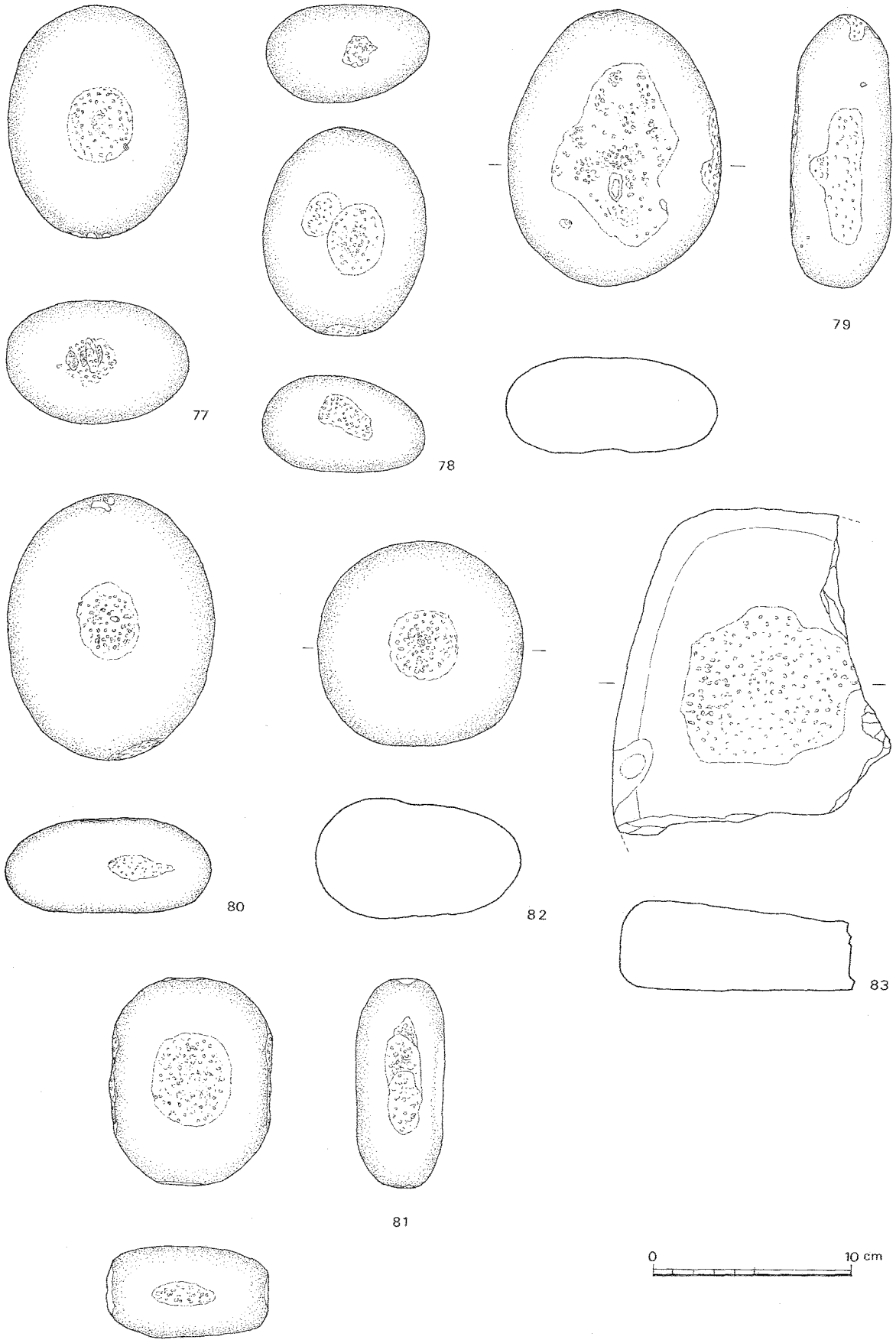
第55図　石器・石製品⑥（1／2，1／3）



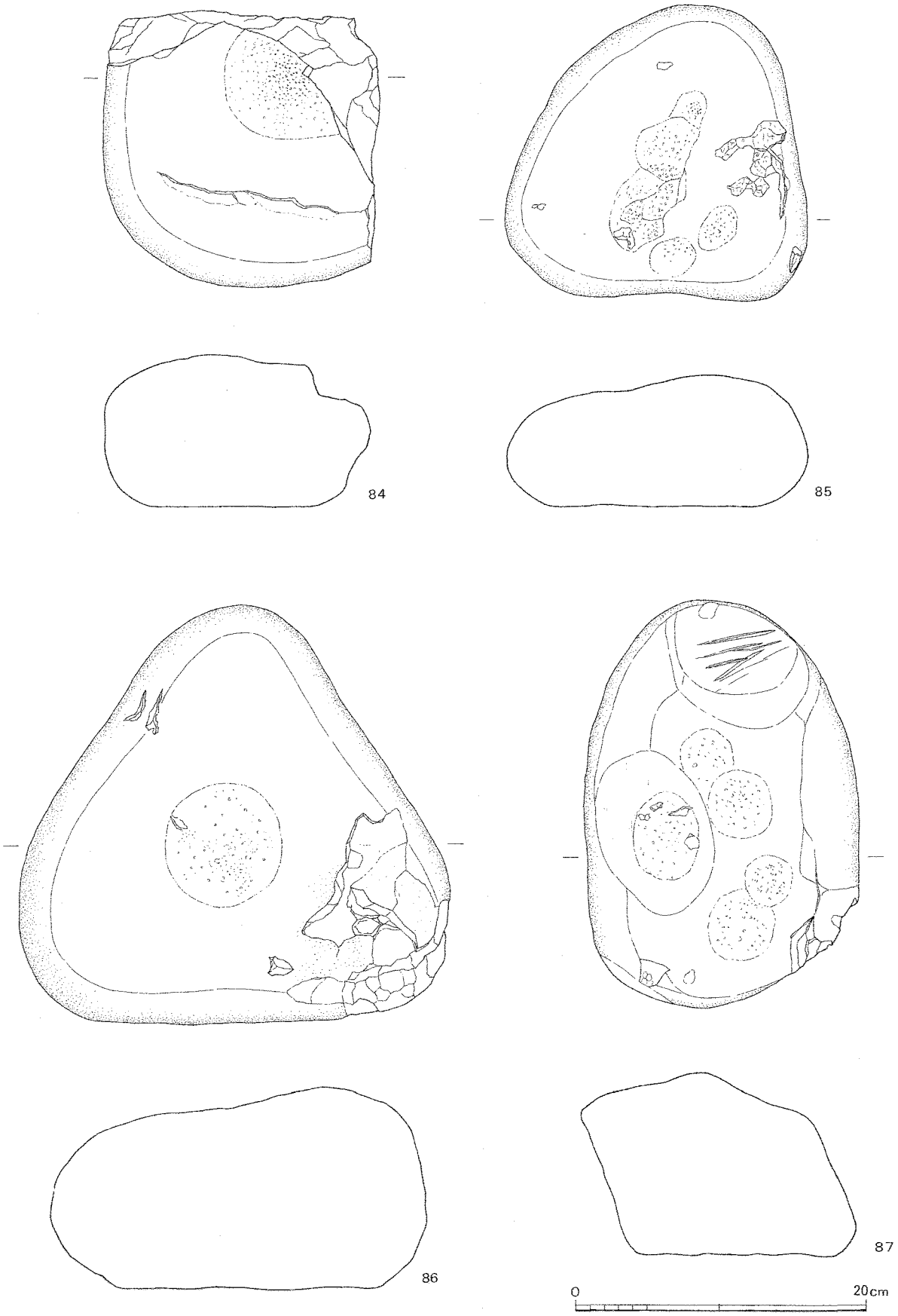
第56図　石器・石製品⑦（1／3）



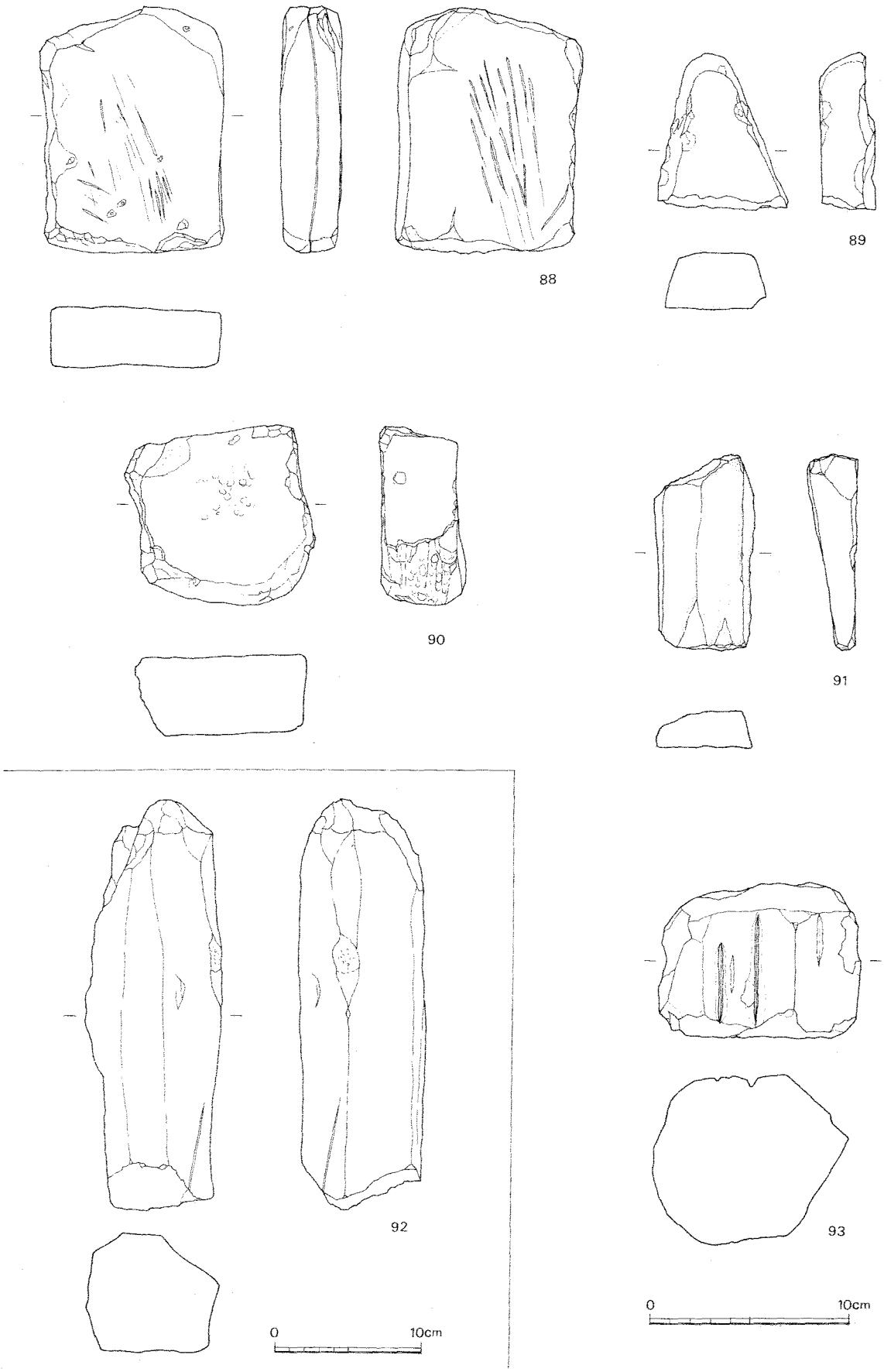
第57図　石器・石製品⑧（1／2，1／3）



第58図　石器・石製品⑨（1／3）

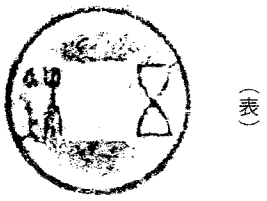


第59図　石器・石製品⑩（1／4）

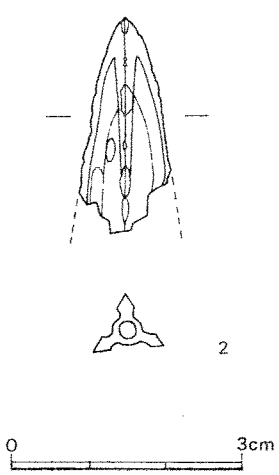


第60図　石器・石製品⑪（1／3，1／4）

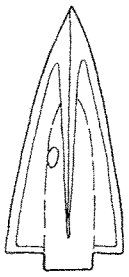
敲石である。75が壱岐島外の方鉛鉱か亜鉛鉱である以外は全て玄武岩を素材としている。74は全面に朱色の粉のようなものが付着しており，水銀朱をつぶすのに使用した可能性がある。75は石錘の可能性もある。76は胴部中央に抉りを入れている。敲石として使用した後に石錘等として使用したと考えられる。68は131.0g，２号溝出土。69は750g，２号溝出土。70は894.1g，Ｂ区17号土壙出土。71は614.9g，５号溝出土。72は509.8g，Ｂ区17号土壙出土。73は273.0g，34号土壙出土。74は127.5g，Ｂ区28号土壙出土。75は46.3g，Ｃ区５層出土。76は288.0g，Ｂ区２層出土。77～83は凹石である。素材は82の安山岩を除き玄武岩である。82と83以外は敲石としても使用した敲打痕が側辺に残る。77は1054.7g，Ｂ区17号土壙出土。78は724.5g，３号溝出土。79は1280.0g，Ｂ区17号土壙出土。80は1169.1g，Ｂ区34号土壙出土。81は662.8g，Ｂ区７号土壙出土。82は1102.6g，２号溝出土。83は1700.0g，３号溝出土。84～87は大型の凹石である。石臼のように用いたものであろう。素材は全て玄武岩である。重さは84が6800.0g，85が6600.0g，86が20000.0g，87が10640.0g。84と85が３号溝，86がＢ区27号土壙，87が５号溝から出土。88～93は砥石である。素材は全て砂岩である。88は表裏面，89は表面と側面，90は表面と一側面，91・92・93は多角面で使用している。88は２号溝，89は３号溝，90～93は５号溝から出土した。重さは88が605.0g，89が166.0g，90が575g，91が125g，92が2961.7g，93が890.0gである。



出土五銖銭拓影



出土三翼鏃実測図



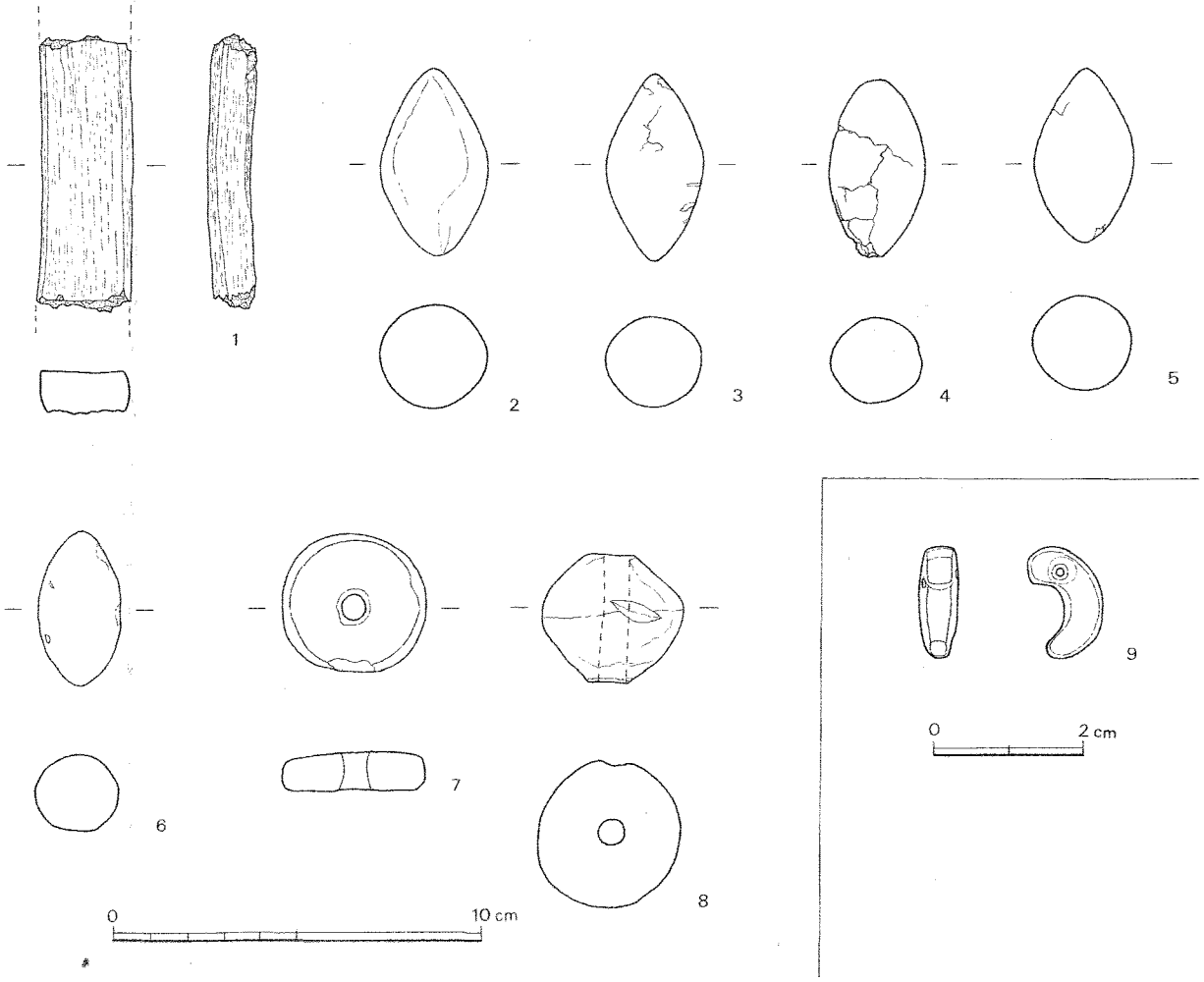
三翼鏃推定復原図

第61図　出土五銖銭および三翼鏃（１／１）

(3) 金属製品（第61図）

1は，五銖銭である。青銅製の完形品で，直径25.55㎜，厚さ1.30㎜，重さ2.1ｇを測る。中央に一辺が10.2㎜の方孔をあけている。方孔には背面にのみ輪郭をとる。法量や「五」・「銖」の書体，福岡県守恒遺跡の出土例との比較などから前漢時代の五銖銭と考えられる。2号濠の南端部西岸から出土した。守恒遺跡の例は弥生時代中期後半から末の遺物包含層から出土したが，今回の場合，2号濠自体は弥生時代後期のものであるが，弥生時代中期の遺構を多く切って作られており，その際に濠内に混入した可能性が高い。原の辻遺跡ではこれまで2枚の貨泉が出土しているが，五銖銭の出土は初めてであり，長崎県でも初例であった。

2は，三翼鏃である。青銅製で茎部と翼部が一部欠失しているが，現存長28.5㎜，重さ3.5ｇ，最大幅12.0㎜を測り，鏃身は一辺10.0㎜の三角形を呈する。茎部は中空になっているが，中国では一般的に，この部分をもって鉄製矢柄に装着し，弩の矢として使用したとされる。弥生時代中期初頭から前半のＥ区16号土壙内から出土した。これまで国内の弥生文化圏内から出土した三翼鏃は，兵庫県会下山遺跡などの弥生時代後期の例が知られていたが，今回の出土で2世紀遡ることが判明した。また，これまでの出土例は採集によるものであり，遺構内からの出土としては日本初例となる重要な発見で



第62図　骨角器・土製品・勾玉（1／1，1／2）

あった。五銖銭と同じころに大陸から伝えられたと考えられるが，これらの大陸文化の流入を示す遺物の出土は，大陸との交流拠点としての原の辻遺跡の重要性を改めて実証するものであった。平成8年に検出した，弥生時代中期の船着き場遺構と近接した位置からの出土であることから，密接な関連性をもつことが推測される。

(4) 木 製 品

木製品は，濠内より出土した。2号濠の南端付近からは建築部材が集中して出土し，中央部付近からは内部に仕切りがついた槽が出土した。弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺物と考えられる。また，5号濠の方形掘り込みの底部からは弥生時代後期と考えられる竪杵が出土した。

(5) 骨 角 器（第62図）

1は，骨製アワビおこしである。B区2層からが出土した。前部，後部ともに欠失しているが，前面及び両側面はきれいに仕上げ加工を施している。裏面は損傷が激しい。

(6) 土 製 品（第62図）

2～6は，紡垂形の土製投弾である。2は5号濠1層から，3と5は5号溝から，4はB区2号土壙から，6は2号濠2層から出土した。2が32.2g，3が24.8g，4が25.3g，5が26.9g，6が17.4gを測る。7は，紡垂車である。一般的な円盤状を呈し，18.5gを測る。E区pit内から出土した。8も紡垂車と考えられるが，断面が算盤玉状の珍しい形状をなしている。45gを測り，5号溝内から出土した。

(7) 装 飾 品（第62図）

9は，濃緑色の軟玉製の勾玉である。上部に小さな穿孔を施している。重さ1gを測る。6号濠1層から出土した。

4．まとめ（第63図）

最後に今回の発掘調査の成果について簡単にまとめてみたい。調査区は，調査目的であった弥生時代中期の船着き場遺構と同時期の幡鉾川旧河道とを接続する水路等を確認するため，平成６年度から平成８年度の河川改修に伴う調査や同じく平成８年度の圃場整備に伴う調査，平成９年度の溜池工事に伴う調査などの結果を踏まえて，不條地区に東西に広く展開して設定した。調査の結果，２条の旧河道，６条の濠，７条の溝，小児甕棺墓１基，数10基の土壙，３箇所の石製礎盤を伴う柱穴を含む多数の柱穴状小穴などの遺構を確認した。以下，検出した遺構をその時期ごとに概観して，今回の調査地区の状況の時期別変遷を考察する。

弥生時代前期末から中期初頭の遺構では，５号溝，６号溝，Ｂ区２号土壙・６号土壙などを確認した。５号溝と６号溝は生活・農業用の用排水路と考えられ，Ａ区とＢ区の間で今年度実施した農道整備に伴う発掘調査でも確認されており，さらに西に伸びることが明らかになった。Ｂ区６号土壙からは石器製作により排出される石チップがまとまって出土した。石器工房関連の土壙と考えられる。チップの素材は粘板岩と頁岩がほとんどであった。原の辻遺跡の低地部においては，弥生時代前期末から居住が始まり，弥生時代後期初頭には終わって遺跡中心部の台地に集住することが前出の河川改修に伴う発掘調査などで明らかにされていたが，これらの遺構の検出によりこれが裏付けられた。また，ほぼ同時期に石器工房もはじまることは注目される。

弥生時代中期前葉の遺構では，１号旧河道（弥生時代中期後葉初めころまで），２号旧河道（弥生時代後期まで），Ａ区３号土壙，Ｂ区７号～10号土壙，Ｅ区16号土壙，合口小児甕棺墓などを検出した。１号旧河道と２号旧河道は幡鉾川の支流と考えられる。地形的にこの地区は微高地であったと推測され，この両河川と幡鉾川旧河道に囲まれた状況が弥生時代中期後葉はじめころまで続くと考えられる。前の時期に比べて遺構の数も増え，居住域として定着，発展したことが推測される。Ｅ区16号土壙からは前漢時代の三翼鏃が出土したが，Ｂ区からは同じく前漢時代の五銖銭も出土している。この時期には船着き場も築造されたと推定され，これに近接したこの地区でも大陸や朝鮮半島からの人々との交易・交流などが行なわれた物証となる。

弥生時代中期後葉の遺構では，１号濠，１号溝，２号溝，３号溝，４号溝，土壙20基以上などを確認した。今回の調査において検出した遺構数が最も多く，この時期がこの地区の最盛期と考えられる。１号濠は，これまで原の辻遺跡の多重環濠の中で内濠とされてきたものである。前の時期からの幡鉾川支流にあたる旧河道２条がこの時期にも存在し，この両河川は自然の濠的な役割も果たしていたと考えられる。１号溝は生活・農業用の用排水路と考えられる。２～４号溝は，この地区の発展による集住・過密化などに伴う，何らかの意味を持つ区画のためのものと思われる。

弥生時代後期の遺構では，土壙や溝など人々の生活に関連する遺構はほとんど検出しなかった。やはりこの地区においても居住は行なわれなくなり，台地上に集住したものと考えられる。原因としては，「倭国大乱」の前哨戦から大乱に至る軍事的緊張の高まりなどが考えられる。これを裏付けるよう

に，この時期の遺構で主体となるのは2号濠，3号濠，4号濠，5号濠，6号濠という，5条にも及ぶ濠群である。この濠群の検出により，原の辻遺跡において従来考えられてきた，弥生時代中期から後期に遺跡中央の台地を環濠が多重環状的に囲んで防御する状況は，少なくとも弥生時代後期の今回の調査地区においては違うことが判明した。5条の濠は接することなく交錯し，複雑に中継し合い総体として複合的環濠を形成していたことが明らかになった。後世の城郭の「虎口」的な意味をもつ，防御的配慮と考えられる。環濠の状況解明については来年度以降の発掘調査に期待される。

古墳時代前期の遺構では，はっきりしたものは7号溝だけである。この時期，弥生時代後期に掘削された濠群は埋め戻され，おそらくは水田としてこの地区は利用されたものと考えられる（柳田康男氏編年IIb～IIc式)。また濠の消滅と時を同じくして台地上の居住も終わりを告げ，原の辻遺跡集落は解体したと考えられる。7号溝は水田のための用排水路と考えられる。

出土遺物で特筆すべきは，まず前漢時代の五銖銭と三翼鏃，朝鮮系無文土器，楽浪系土器などの活発な大陸や朝鮮半島との交渉を物語る遺物群である。三翼鏃と同じ土壙から出土した牛角把手付き朝鮮系無文土器もあった。これは調査地区の120mほど南にある船着き場遺構との密接な関連が考えられる。また，前出の河川改修に伴う調査や溜池造成に伴う調査によって，1号旧河道を挟んで隣接する地区は微高地で，これを囲む幡鉾川旧河道からは200点ほどの朝鮮系無文土器が出土したため，この微高地は朝鮮半島から来た人々の集住域と推定されたが，これとの結びつきも考えられる。また，B・D区を中心に石器製作で排出したと推測される多数の石チップや，石器の未製品が土壙などから出土したことも注目される。これはこの地区が単なる居住域ではなく，石器工房も集中しており，さながら東京の下町と付随する町工場群のような状況を呈していたと考えられる。石製礎盤の出土も注目すべきことである。前出の溜池造成工事に伴う調査において，大型高床建物の建築部材である弥生時代中期の床大引材が出土した。この材は礎石・瓦葺き建物に使用される可能性があることが指摘されていたが，現在までの発掘調査では同時期の礎石や瓦は発見されておらず，また冬に非常に強い北西風が吹く遺跡の立地環境などから，床大引材と石製礎盤との組み合わせによる，より強固な構造をもつ大型建物の可能性も生じてきた。

以上，今回の調査成果をまとめてみたが，一言で表わせば弥生時代前期末から古墳時代前期までの原の辻遺跡の北西低地部の状況を，これまで以上に明らかにすることができたことである。同時に試掘壙による調査の限界，広い面的調査の必要性を感じた。今後の調査の指針となるべきことである。

最後になったが，発掘調査から報告書作成にあたり，原の辻遺跡調査指導委員の先生方，調査事務所の外業・内業員の方々をはじめ多くの人々の支援，指導助言を受けた。記して感謝の意を表する。また，原の辻遺跡の発掘調査及び壱岐郡の埋蔵文化財の保存・研究に尽力されてきた，芦辺町教育委員会文化財指導員の松永泰彦氏が平成10年12月6日急逝された。謹んで哀悼の意を表したい。

註1　柳田康男「九州」『古墳時代の研究』6　雄山閣　1991

第5図　A区，B・D区遺構配置図（1／200）

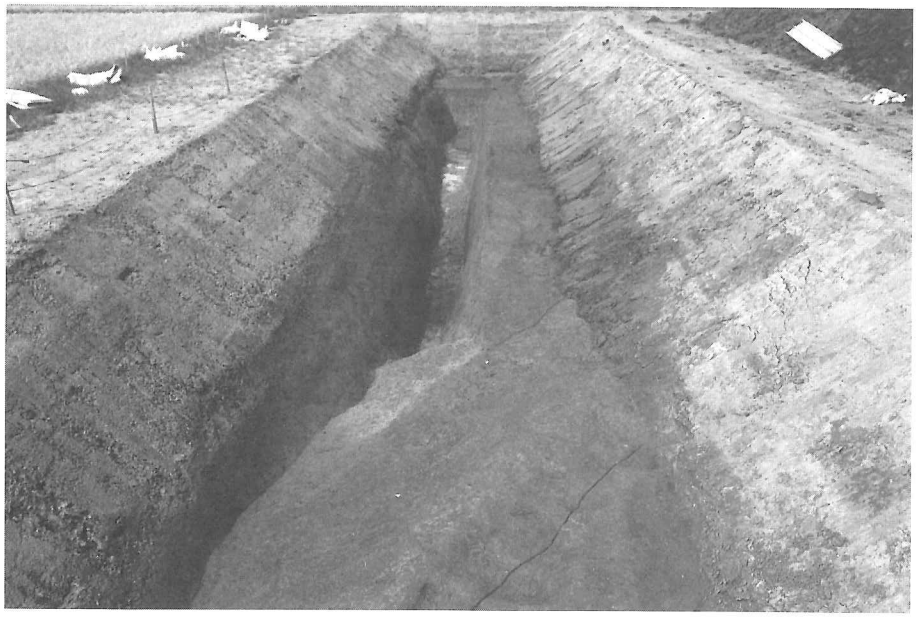
図版 1

調査風景（B区）

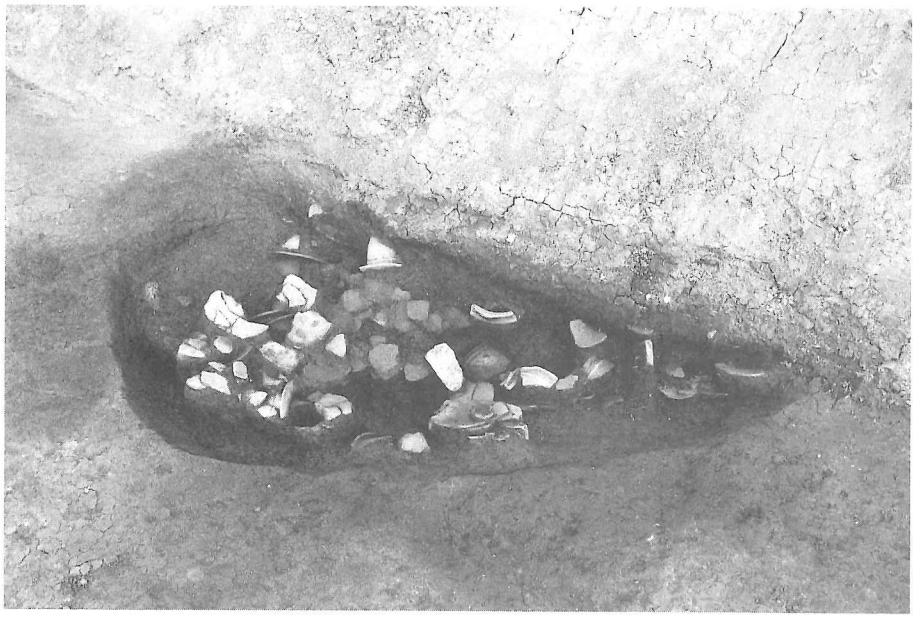
調査風景（B区）

調査風景（B区）

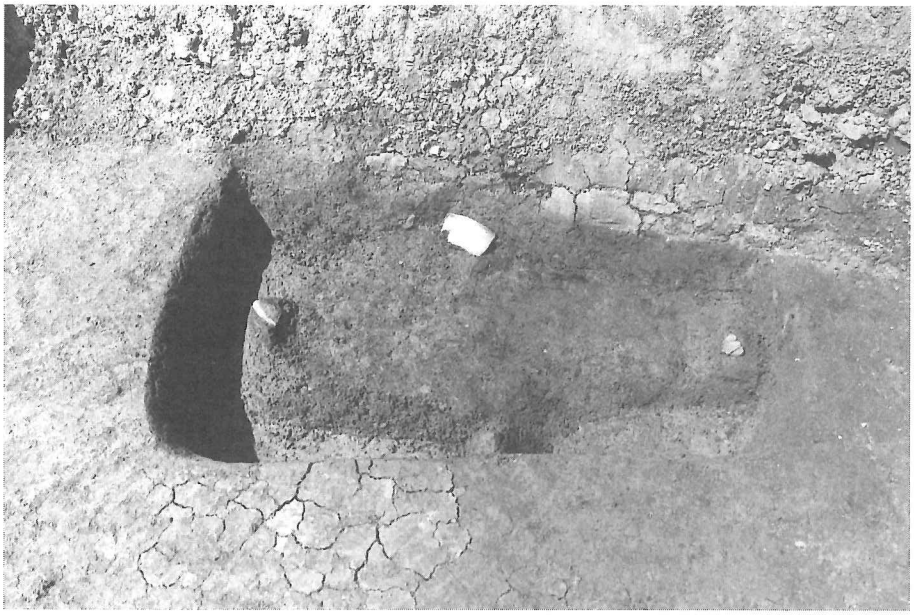
A区全景（西から）



1号旧河道検出状況
（東から）



A区1号土壙
遺物出土状況



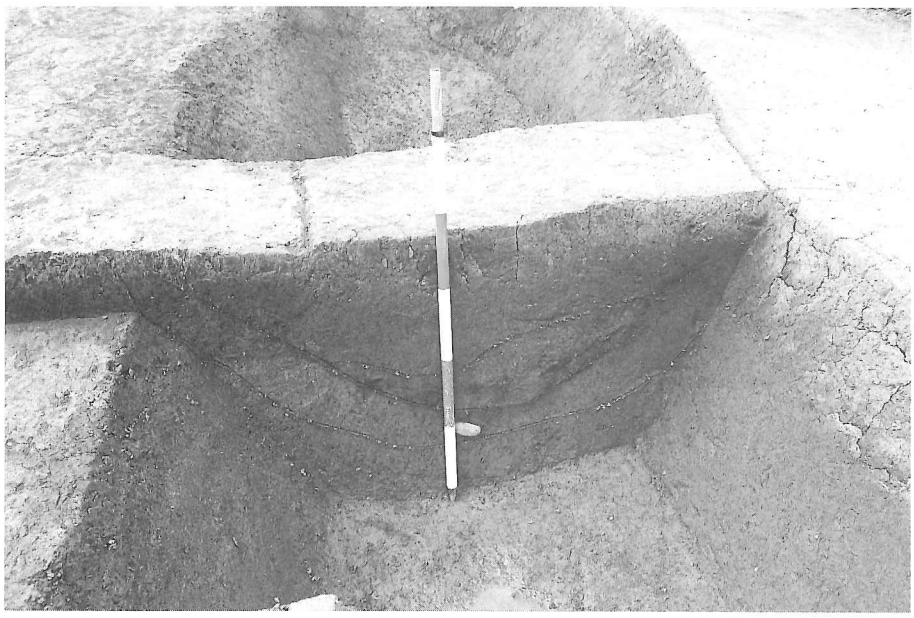
A区 2 号土壙
遺物出土状況

A区 3 号土壙
遺物出土状況

A区 3 号土壙
完掘状況

1 号溝
遺物出土状況

1 号溝
完掘状況

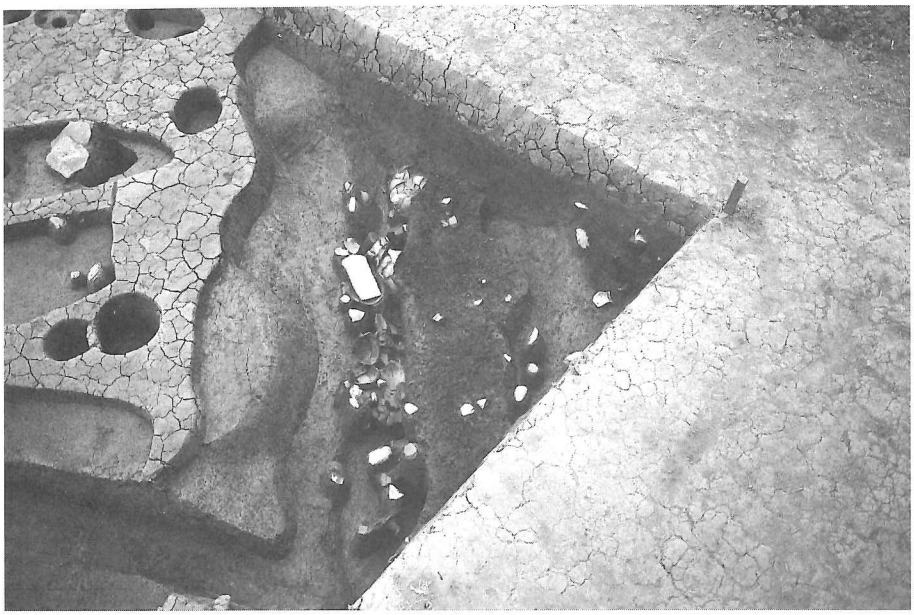


1 号溝
横断土層

B・D区全景（北から）

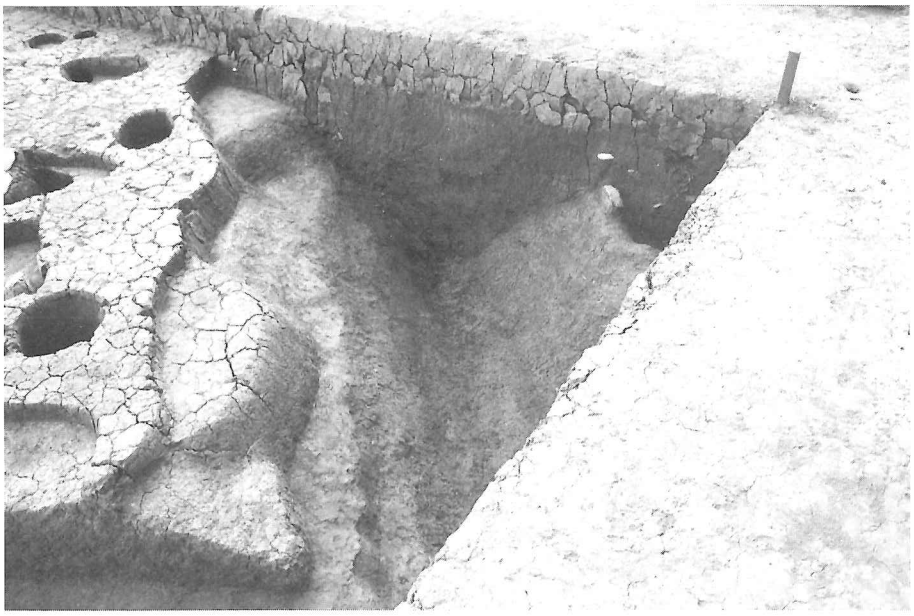
2号濠と4号濠
検出状況

4号濠
遺物出土状況

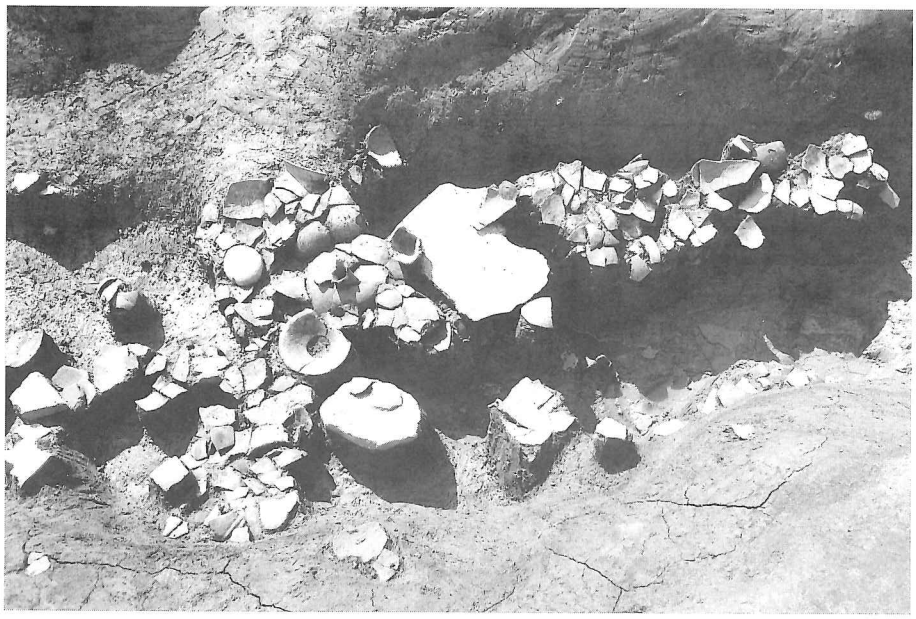


4 号濠
遺物出土状況

4 号濠
遺物出土状況



4 号濠
完掘状況



2 号濠
遺物出土状況

2 号濠
遺物出土状況

2 号濠
遺物出土状況

D区全景（南から）

D区全景（北から）

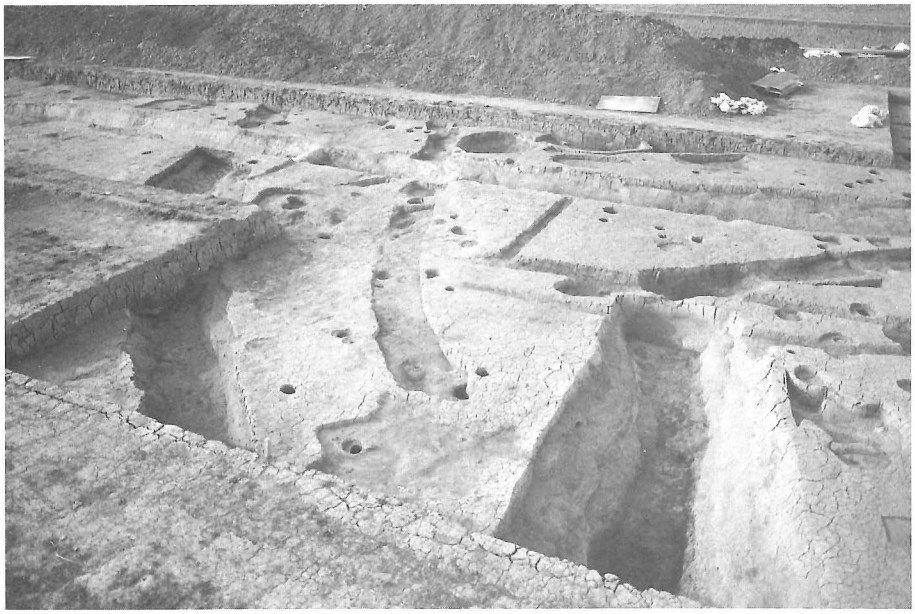
3号濠
検出状況

2 号溝
遺物出土状況

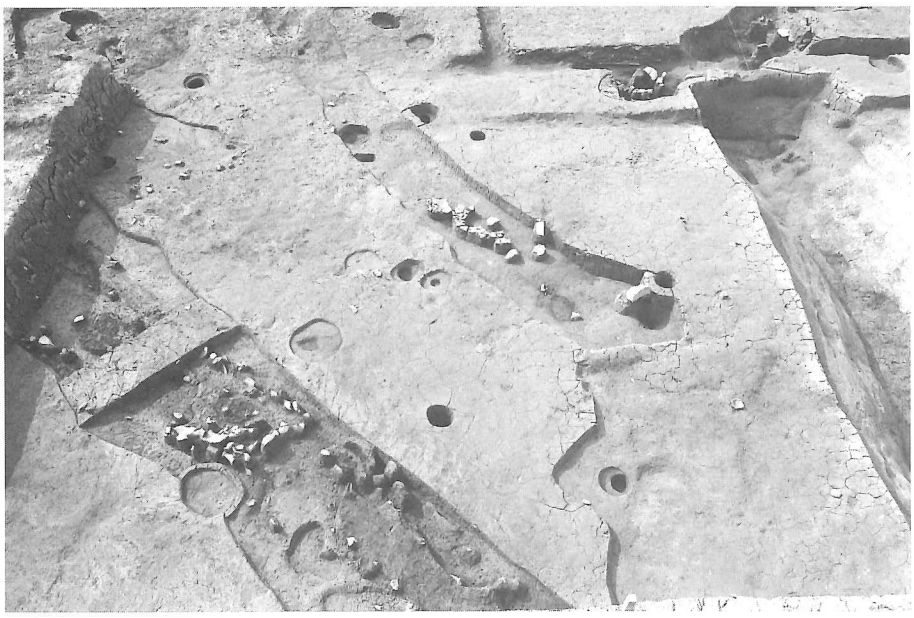
2 号溝
遺物出土状況

2 号溝と 3 号溝
検出状況（南西から）

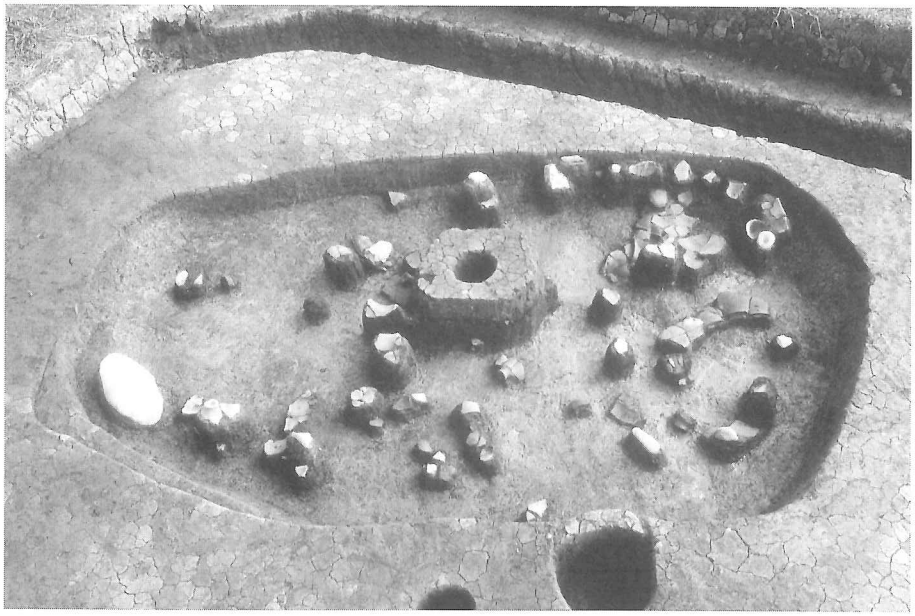
4号溝と5号溝
検出状況（北西から）



4号溝と5号溝
検出状況（北東から）

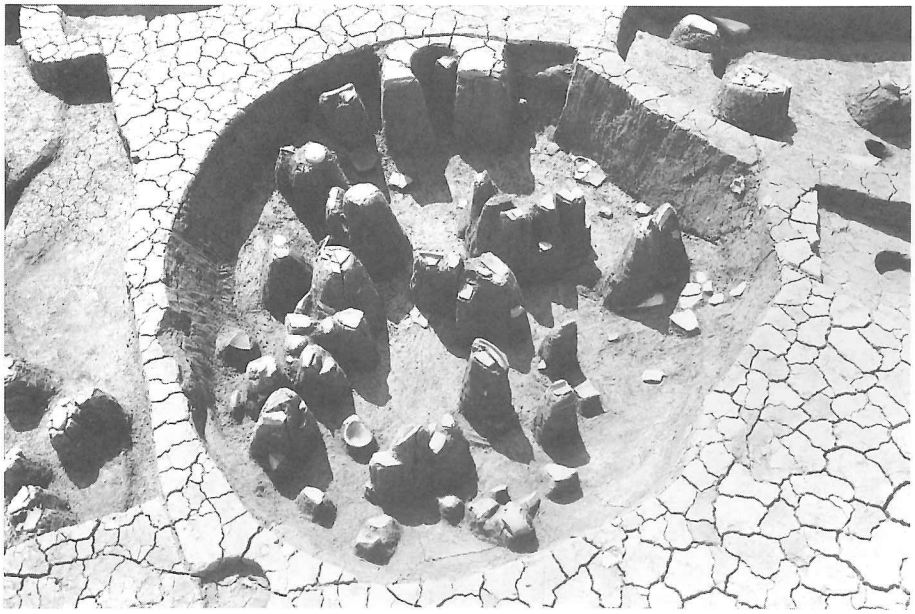


4号溝と5号溝
遺物出土状況

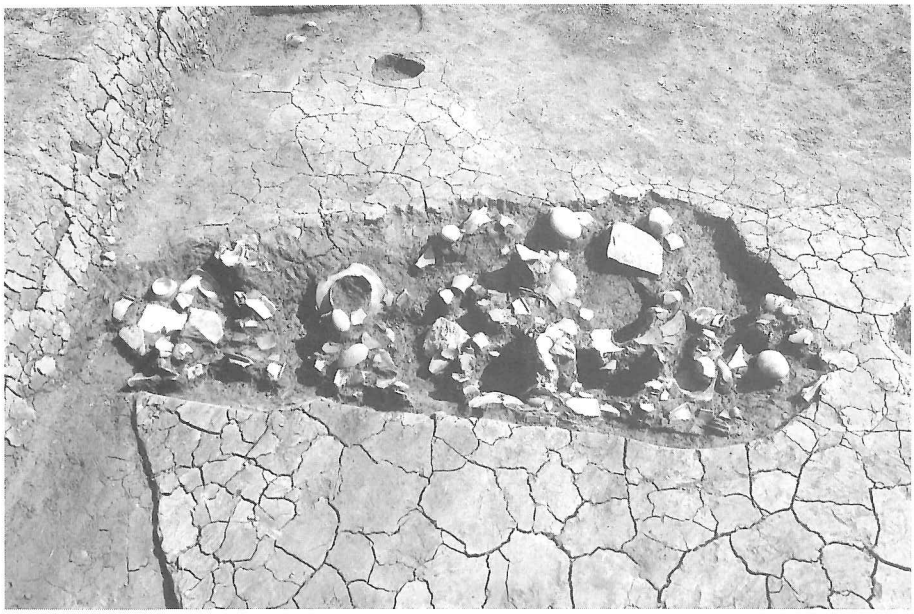


B区 2 号土壙
遺物出土状況

B区 6 号土壙
遺物出土状況

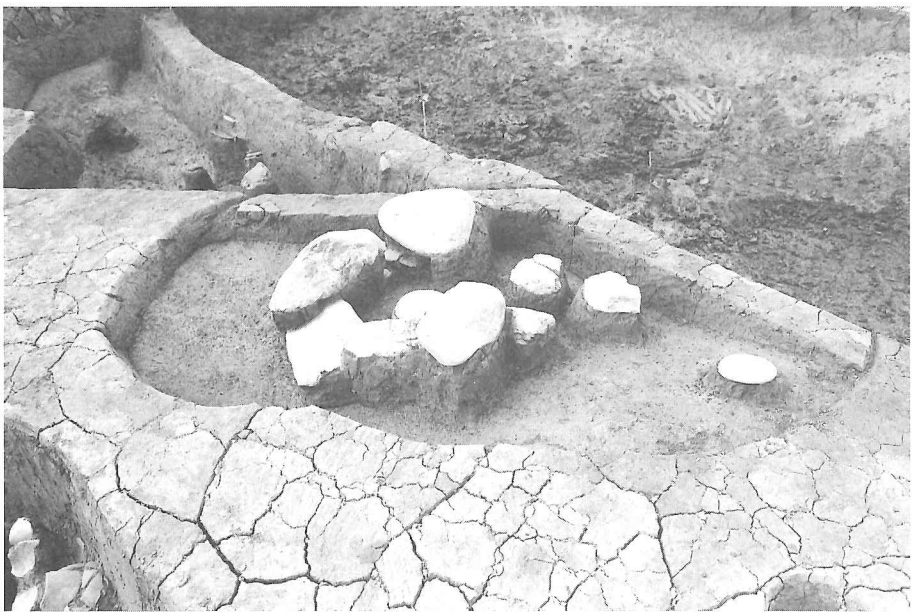


B区10号土壙
遺物出土状況



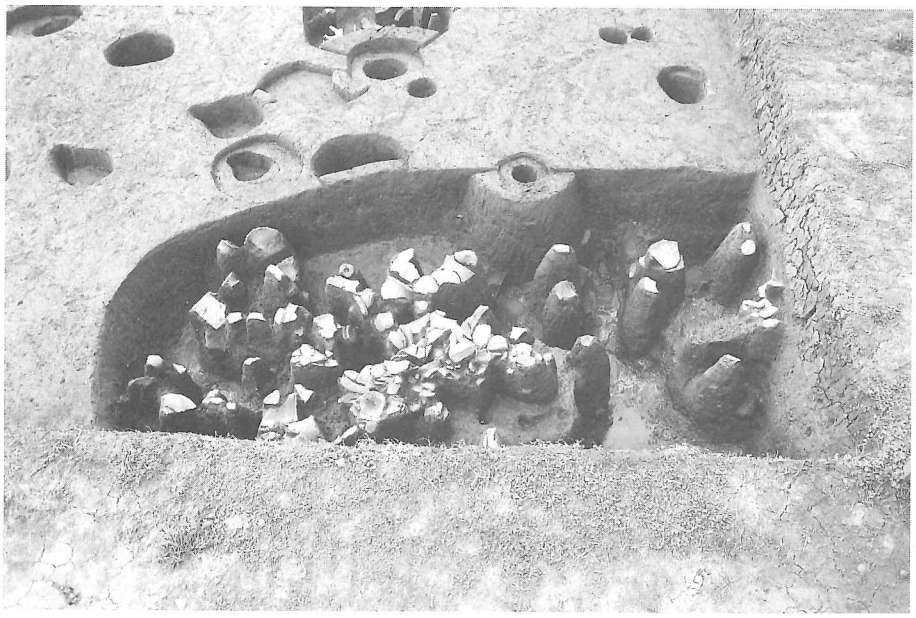
B区17号土壙
遺物出土状況

B区26号土壙
遺物出土状況



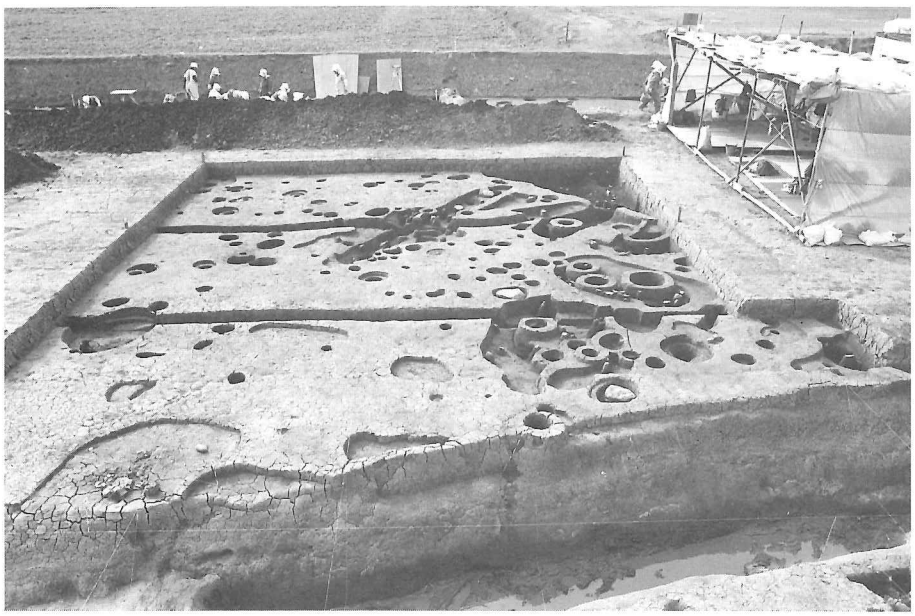
B区27区土壙
遺物出土状況

B区28号土壙
遺物出土状況



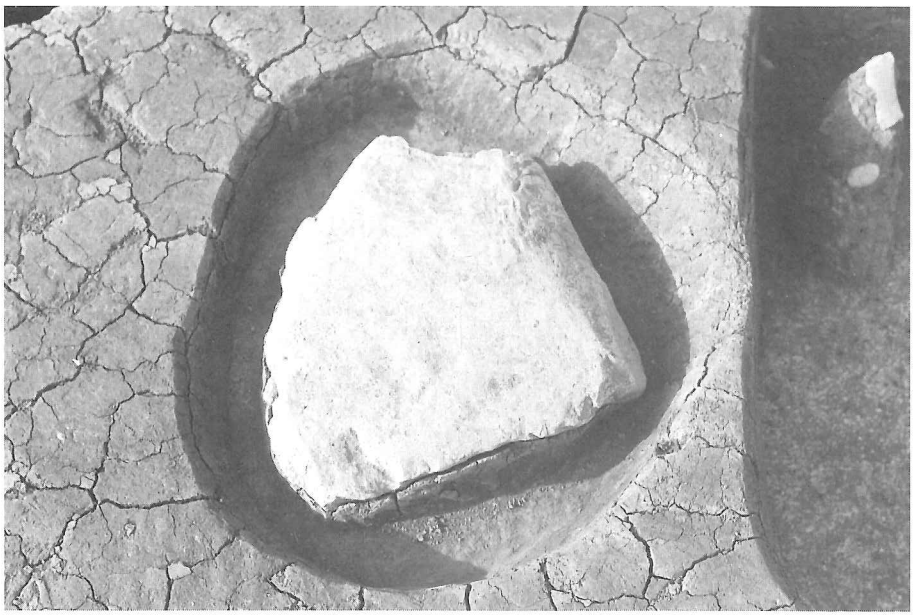
D区１号土壙
遺物出土状況

D区３号土壙
遺物出土状況



礎盤１と礎盤２
検出状況

礎盤１検出状況

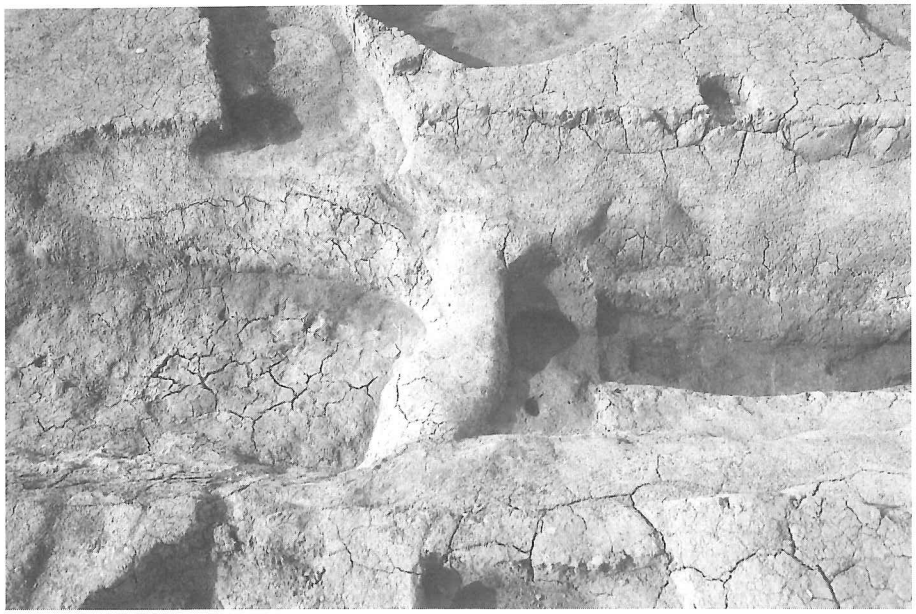


礎盤２検出状況

2号濠内土手状遺構
検出状況（北から）

2号濠内土手状遺構
検出状況（北から）

2号濠内土手状遺構
検出状況（南から）



2号濠内土手状遺構1
検出状況

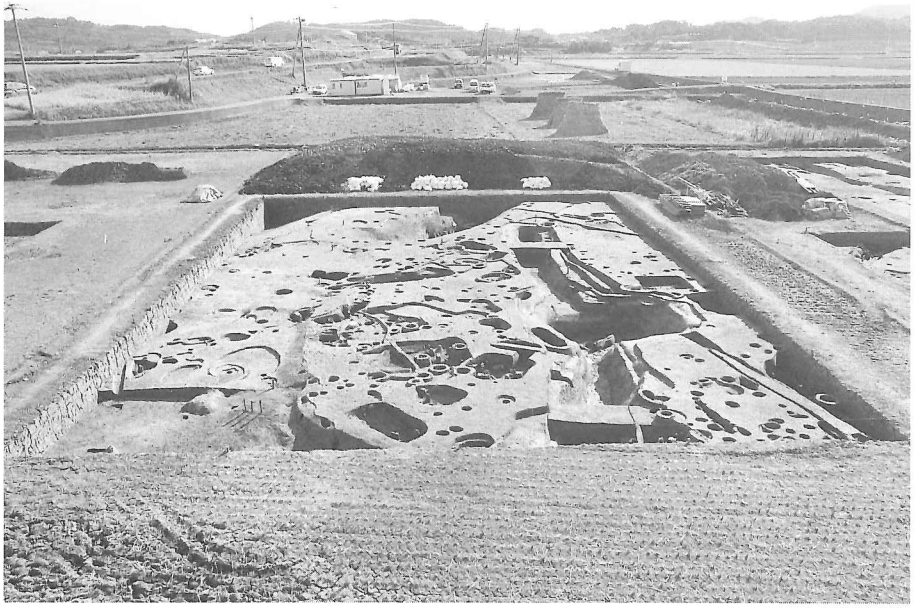
2号濠内土手状遺構2
検出状況

2号濠内土手状遺構3
検出状況

2号濠内建築部材
出土状況

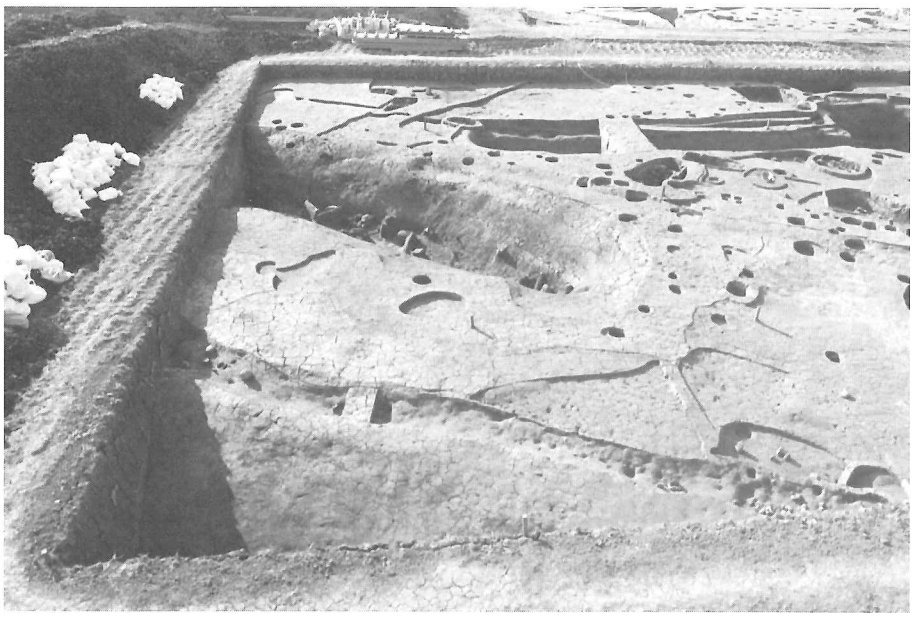
2号濠内槽
出土状況

2号濠内五銖銭
出土状況

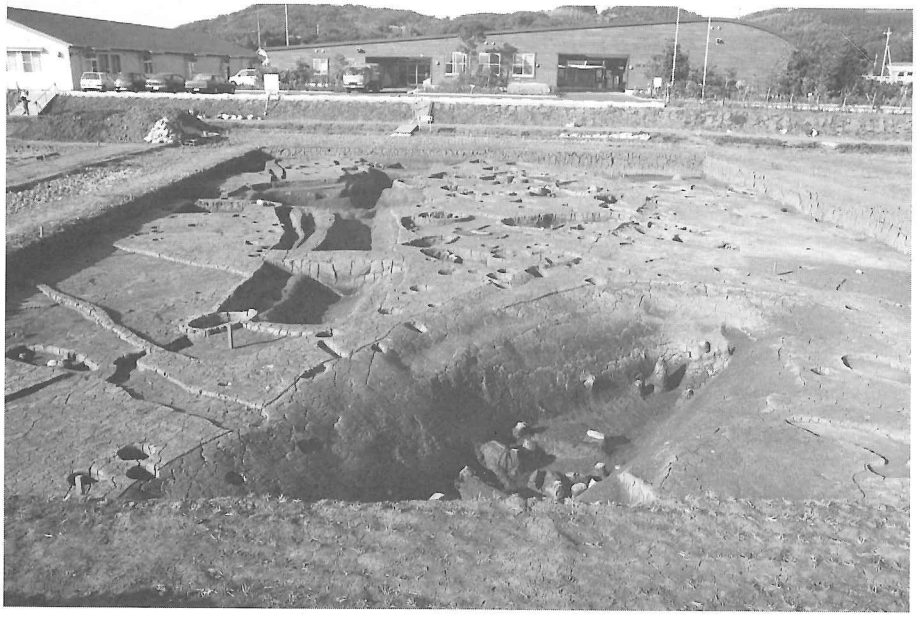


E区全景（北から）

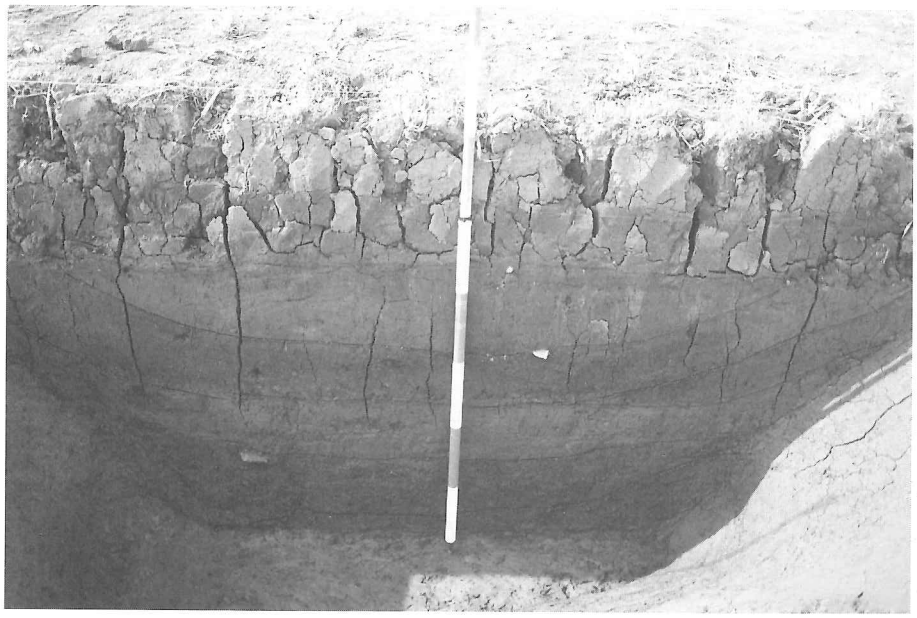
E区東部とD区
検出状況（北から）



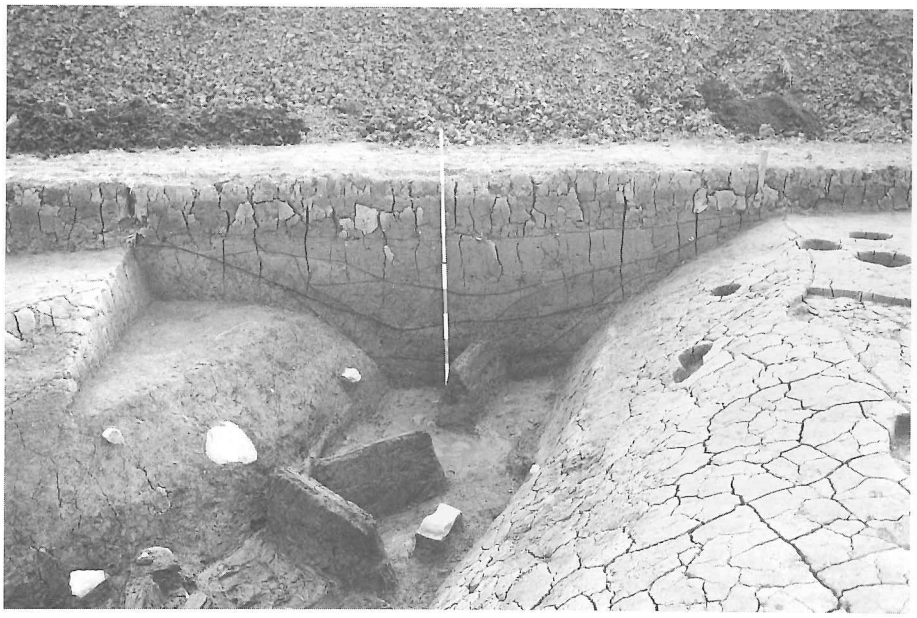
E区南部検出状況
（東から）



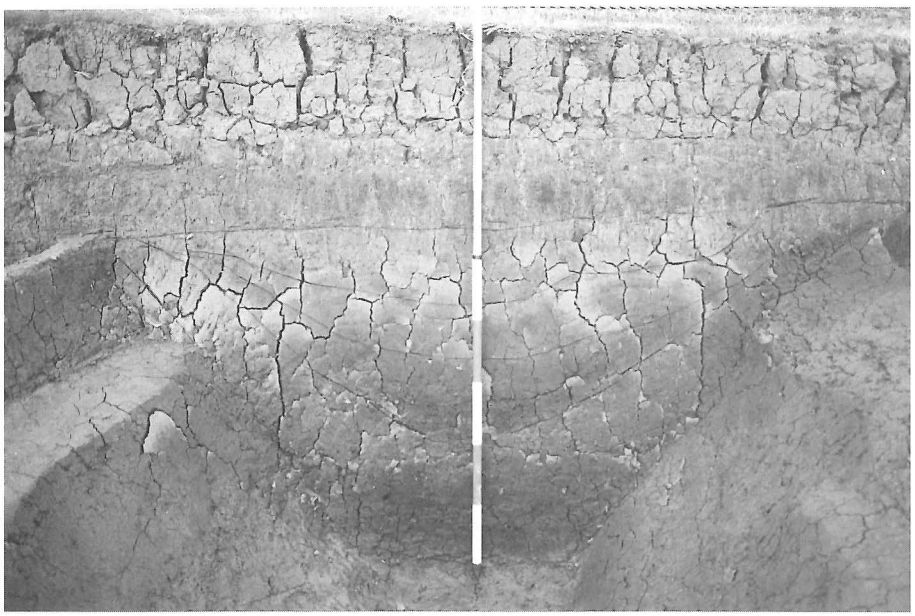
5号濠と6号濠
検出状況（南から）



E区内3号濠
横断土層



6号濠
横断土層

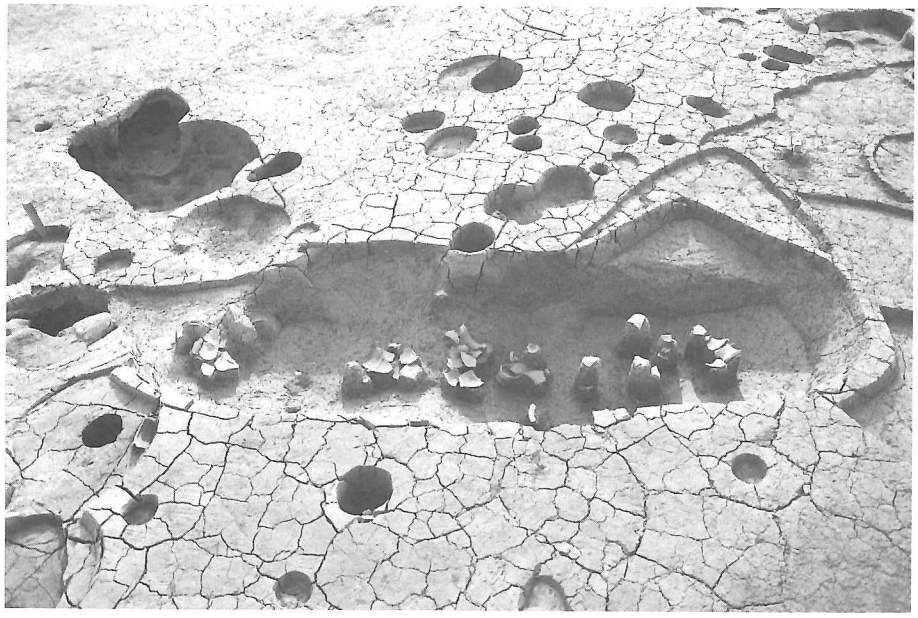


5号濠
横断土層（E区北壁）

5号濠
横断土層（北部）

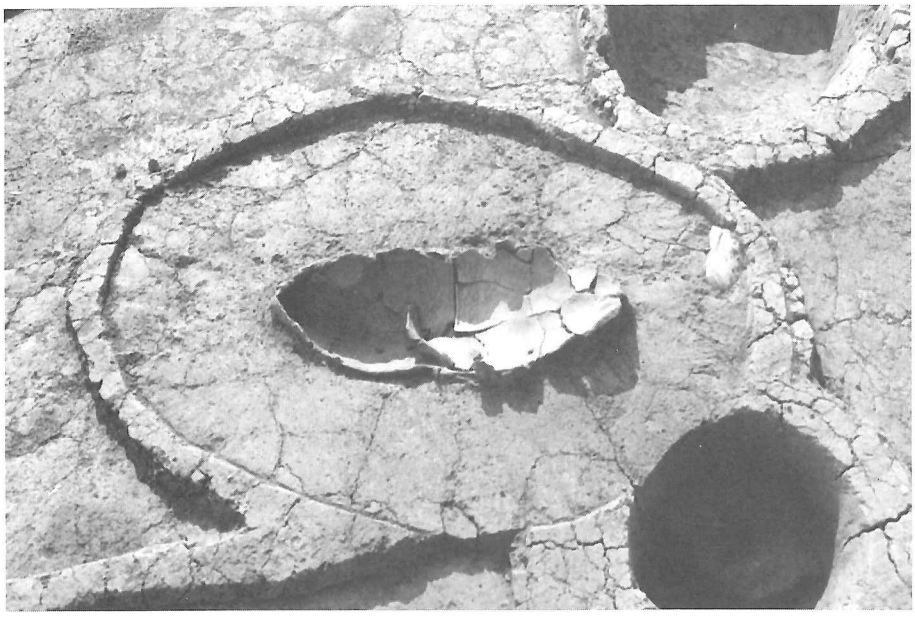
5号濠
横断土層（南部）

E区１号土壙
遺物出土状況



E区11号土壙
遺物出土状況

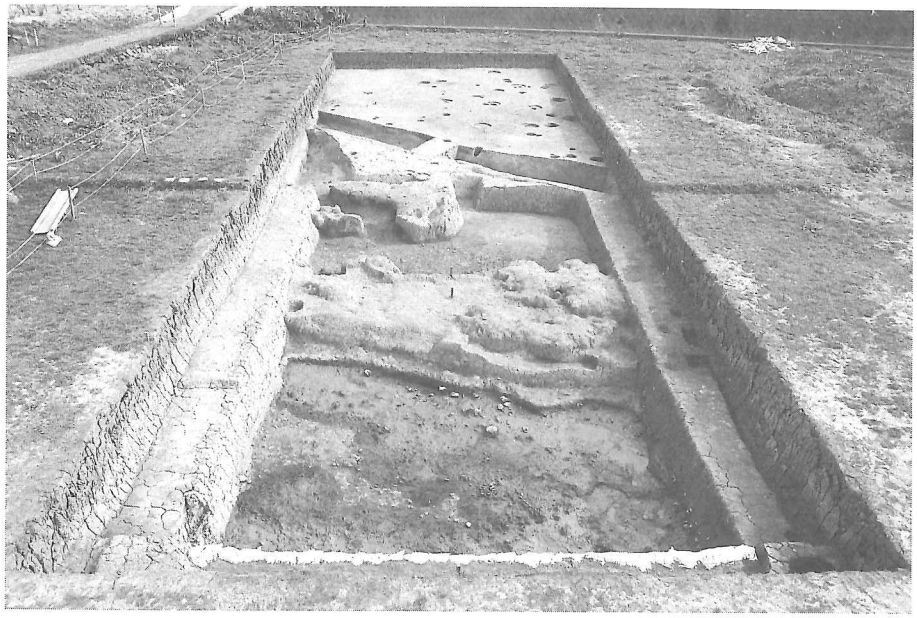
E区16号土壙
遺物出土状況



1号甕棺
検出状況

5号濠内堀り込み
検出状況

5号濠内堀り込み
木製堅杵出土状況



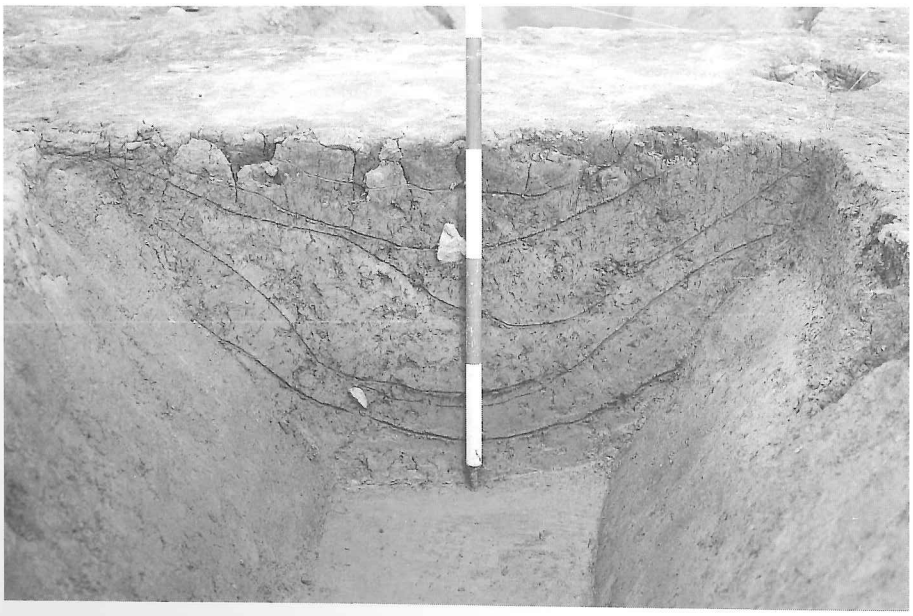
C区全景（西から）

2号旧河道
検出状況

7号溝
検出状況

1号濠
遺物出土状況（北から）

1号濠
遺物出土状況（南から）



1号濠
横断土層

1号濠
遺物出土状況

1号濠
遺物出土状況

1号濠
遺物出土状況

報告書抄録

ふりがな	はるのつじいせき
書名	原の辻遺跡
副書名	原の辻遺跡特定調査事業発掘調査報告書
巻次	I
シリーズ名	原の辻遺跡調査事務所調査報告書
シリーズ番号	第16集
編著者名	宮崎　貴夫・杉原　敦史
編集機関	長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所
所在地	〒811-5322　長崎県壱岐郡芦辺町深江鶴亀触1092番地1　TEL 09204(5)4080
発行年月日	西暦1999年3月31日

ふりなが 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
原の辻遺跡（はるつじいせき）	長崎県壱岐郡芦辺町深江鶴亀触（ながさきけんいきぐんあしべちょうふかえつるきふれ）	42423	93	33°45′34″	129°45′4″	19980803 ～ 19990312	2,297m²	特定調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
原の辻遺跡	集落・ 包含地	弥生時代 古墳時代	旧河道2条 濠6条 溝7条	弥生土器，石器， 木製品 朝鮮系無文土器 楽浪系土器 前漢時代五銖銭 前漢時代三翼鏃	

原の辻遺跡調査事務所調査報告書第16集

原の辻遺跡

1999．3．31

発行　長崎県教育委員会
長崎市江戸町2番13号

印刷　株式会社　昭和堂印刷